清正また、その封地に營める馬場を櫻馬場といふ。蓋しその兩側に櫻樹を植ゑ列ねしより名づくるならむ。越中國高岡にまた櫻馬場あり。前田利長の築きし所なり。この地今櫻の名所として知らる。櫻と武人との因緣深きことはこの一二人に止まらず。

石川丈山も亦近世武人の典型たり。大阪夏陣の時拔驅の功名をなして武勇をあらはししかど、軍令を犯せるによりて武門を離れて比叡山の麓に隱棲しぬ。名高き詩仙堂はその遺跡たり。この人また櫻を愛し、三百株を其の家に植ゑたり。かつて詩を賦していはく「小櫻疊雪縫山翠、便是吾家舊戰袍」とこれ小櫻威の鎧の事を寓したるものにして武人の詠たるを失はずといふべし。

やよいざ櫻

木下長嘯子は若狹守勝俊といふ。豐太閤の從弟にして北政所の姪なり。慶長十三年父家定歿し北政所の命によりて、遺領を嗣ぎしが、德川氏之を沒收す。よつて京都東山靈山に閑居して長嘯子と號す。而して豐臣氏沒落の後餘所ながら大政所高臺院の守護をなししなり。世人その誠意をさとらず、優柔不斷の徒と目す。われ常に長嘯子の爲に之を慨かずんばあらず。その本居を擧白堂といひ、別に歌仙堂を設けて三十六人の歌仙の像を掲ぐ。丈山の詩仙堂は蓋しこれに倣ひしならむ。

藤原惺窩かつて花時靈山の亭に長嘯子を訪ひ、詠じて曰く、

君是護花花護君　介花此地久留君
入門先問花無恙　莫道先花更後君

と。長嘯子の面目を詠じ出して躍如たらしめたり。

晩年西山の小鹽山に隱る。蓋し、高臺院薨じ、全く隱棲すべくなりし故ならむ。小鹽山は既にいひし花の寺勝持寺のある所なり。この寺の傍に菴を設けて棲めりしなり。その舊地土屏を圍みて殘れりといふ。その春花駘蕩の候櫻にかまけしこと想像するに堪へたり。長嘯子この幽栖を記したるの文あり。山家記といふ。その文の要をいはば先づ

小鹽山の麓に蘭若あり、勝持寺とかける道風が額あざやかなり。方丈の前に西行かうへたるといひつたふる老木のさくらあり。くち殘れる枝のさすがに春をわすれぬこゝろはへもむかしおぼえてなさけふかし。あるじの僧忠海やつかれとよし。遣仰院ときこゆる大とこの弟子なりかし。しりへに勝地をむくふ。かしこにあやしき櫻あり。根は五またにわかれてかこみは牛もかくしつへし。かの社檪にになる事あり。こゝらのたくみの斧をもれて、いかでかうつゝがなく生ひなりけん、いとあぶかし。これらにしりぬ、をのづからものはみな命ある事を。さればきのふの木の不才をもとむるも云にたらず。かへりてあざみわらふべきにや。かれをよすがのあるじとたのむかげにて、やどれる翁ありけり。いづれの所の人ともしらず、また名もなし。

やまふかくすめるこゝろは花ぞしる
　やよいざさくらものがたりせむ

ひとりごちてやみぬ。

と、ここにその櫻はこの歌によりて名を得たり。上の文のうちに曰はく、

かべ耳つくとやらん、いへるやうに、里の子どもいかで聞とりけん、やよいざ櫻とうたひのゝしりてやがて名とするもいとおかし。

と。卽ちこの歌いつしか世人の間に傳へられ「やよいざ櫻」とうたひののしりてやがて其の櫻の名とせりといふ。この歌をよく玩味せば、長嘯子の胸中察するにあまりあり。長嘯子の和歌、擧白集に載する所、凡そ千七百七十餘首にして春の歌四百五十首に近し。そのうちの過半二百四十餘首は櫻花の詠なり。これを以て彼も亦櫻花黨の一人たりしことを知るべし。滿天下殆ど語るに友なかりし世にげにも櫻のみこそ武士の胸中をばさとりしならめ。われこの歌をよむごとに常に長嘯子に同情を禁ずること能はざるなり。彼また詠じて曰はく、

山櫻みれど心はなくさまず
　花にもあまるうき身なりけり

まことに長嘯子その人は德川氏謳歌の世には花にも餘る憂き身にてありしな

りけむ。

近世の巻二

勅銘の櫻

櫻はわが國花として古來上下を通じてもてはやされしことは今更いふまでも無きことなり。近世に至りては後水尾天皇特に櫻の御賞翫深くましまして勅銘を賜はれる名櫻少からず傳はれり。

文政年間に廣瀬花隱が畫ける花隱櫻譜(故三好學氏藏)は三十六種の櫻花を描寫せるものなるがそのうちに「勅銘」と記せるものは次の七種なり。

勅銘　常磐　四種　勢州白子浦觀音寺
勅銘　玉　三種　城州醍醐櫻之坊
勅銘　曙　三種　洛鞍馬口閑臥庵

勅銘　御園　二種　南都興福寺
勅銘　法輪寺　洛西嵯峨法輪寺
勅銘　三吉野　二種　禁中
勅銘　暁　四種　洞中

以上、七種のうち、第一の常磐は上にいへる白子の不斷櫻なり。玉は醍醐寺の名櫻にして、寛政の頃描きし三熊露香の「倭花名品」（醍醐寺藏）にもその寫あり、同じ人の描きし櫻花藪には、清國人錢宇文が、その跋に、此の玉櫻の由來を說きて、讃美せり。なほ坂本浩然の櫻花寫生、宮崎玉緒の畫にもその寫生圖ありといふ。

曙櫻は京都鞍馬口閑臥庵に存したるものにして三好學氏は大正十年四月二十一日にその地に赴きて寫生圖をつくれるが、その圖は西野猪久馬氏の描く所にして、三好氏の著たる「櫻」に載せたり。京都坊目志閑臥庵の條に

新御靈口町北側二番戸にあり、瑞芝山と號す、臨濟宗黃檗派萬福寺に屬す。

といひ、又

堂前には有名なる曙櫻あり、後水尾帝の御愛樹にして御製の和歌あり、

霞ゆく松は夜ふかき山の端に
　あけぼのいそぐ花のいろかな。

といへり。花は淡紅色八重にして徑約一寸五分許にして見事なるものといふ。この櫻、後次第に衰へて、今は枯れたりといふ。

法輪寺は京都嵐山の虛空藏にて名高き法輪寺の境內に在りし名櫻なり。これは三熊花顚の櫻花帖をはじめ、その後の櫻譜にはいづれもその寫生を載せたり。その花は三好學の櫻花圖譜に載す。然るに、今はその寺に無しといふ。然れども、その花の古來もてはやされしが爲に、東京の荒川堤に植ゑたるものありて、幸にその品種を絕たず。

その他の三種、卽ち、奈良興福寺の御園、禁中にありといふ三吉野、仙洞御所にありといふ曉は今それの存するか否かを知らず。

嶺の白雲

歌仙といふは、そのはじめ藤原公任の三十六人撰にはじまり、次ぎて中古三十六歌仙、新三十六歌仙、女房三十六歌仙等の名あり。ここに二十一代の勅撰集以後の歌仙三十六人の詠を集めたるあり。之を集外歌仙といふ。これは東常縁をはじめとし、松永貞徳を終とし、室町中期より江戸初期にわたりて地下歌人の名ある者三十六人の詠を集めたるものにして、實に後水尾天皇の欽撰にかかるものなり。これもと中宮東福門院の御懇望に基づくものといふ。而して、その各の歌一首づつを採りて、宸筆を下したまひ、狩野蓮長に命じて作者の像を畫かしめられたるが、これには寛政九年江戸萬屋にて出版せる本あり。

この集外歌仙の一人として佐川田昌俊といふものあり。この人通稱は喜六といひ、默々齋、又臥輪と號す。本姓は高階、後修して高といふ。先人某下野國足利莊早河田村を邑とするによりて佐川田氏を稱す。喜六幼くして越後長尾家の將木戸玄齋の養子となる。玄齋和歌を好むによりて隨ひて學べり。後永井直勝に仕へて家老となり、直勝の子尚政山城淀の藩主たる時にもなほ家老たり。文武兩道の達人として當時に名あるのみならず、經濟の道にも長ぜる人なり。寛永十五年疾にかかりて、息俊甫に家を讓りて致仕し、一休禪師の遺跡、山城國薪村の酬恩庵の境内に默々庵を結びて幽居し、禪に參じ、茶を友として悠遊す。性風流に長じ、連歌は昌琢に學び、漢學は林羅山に就き、書は松花堂を師とす。或る人昌琢に向ひて「當時連歌に冠たる人は誰れぞ」と問ひしに、昌琢は「西におのれあり、東に昌俊あり」（これは當時永井氏下野に在りしによる）と答へたりとぞ。寛永二十年八月病みて歿す。年六十五、墓は酬恩庵の境内に在り。

和歌は養父玄齋に學びし後、近衞家に就き、中院通勝卿、木下長嘯子等と交を結べり。その集外歌仙に入れる歌は當時人口に膾炙せるが、それにつきての嘉話諸書に見ゆ。續近世畸人傳に曰はく、

昌俊若きときよめる歌に

吉野山花待つ頃の朝な〳〵

心にかゝる峯の白雲

これを飛鳥井雅康卿の傳奏にて

後陽成院の叡覽に入れければ、深くめでさせおはしましけるが、後寛文の皇后、集外歌仙を撰ばせ給ふ中に入りて忝く宸翰を染めさせ給ふとなん。

といへり。この歌が叡感に入りし際の事は翁草に當代奇覽を拔萃せるうちに曰はく、

一同頃(家光の時なり)山州淀の城主永井信濃守(尚政後に信齋と號登城有しに、御持被遊し扇に御手づから歌を一首書せ給ひしを、信濃守拜領して退出有り、家來佐賀和田喜六を召れ、其方は日頃和歌に心を寄せ風流を好めば、今日拜領の物を拜見させるなり、是は此頃の秀歌なりとて、都より御到來の由、則御自筆に遊し被下しと、彼御扇を見せ給ふ、喜六畏て押戴き拜見するに

吉野山花待頃のあさな〳〵

心にかゝる峯の白雲

喜六泪を流して申けるは、拙々冥加に叶ひ、上聞に達候段、身に餘り難有仕合生前の大幸、何事か是に增り候はん、此歌は則愚詠にて候。當春中院大納言通村卿(正保四年內府に任)へ詠草を差上げ御添削を奉願候ひし、此歌も其一卷の中に御座候由申て、則其詠草を差出す。信州大に愕き此趣上聞に達せらるれば、尤も御賞不淺となり。此喜六は、其の頃和歌に名高く、其の上倭漢の才あり、參學を好みて、晩年薪上里の酬恩庵に引籠り、瓢瓢居士と號し隱遁の身となり、宇治の佛德山興正寺(永井尚政再興)に、墓に法名を記さず何でもない事〳〵と有が、此居士の墓なり。云々

とあり。ここにいふ所と畸人傳にいふ所と、その傳奏せし人の名を異にせるを見ればいづれを正しとすべきか遽かにいひがたしといへども、その叡感に入り、又集外歌仙として採られたりしことは事實なり。げにも朝な朝なかかる峯の白雲こそ花まつ人の心をそそるものなりければかくは地下の人をして白雲の上まで名をあげしめたりしなれ。

那波道圓の櫻譜

那波道圓は播磨の人活所と號す。かの長嘯子と交りて心の友なり。藤原惺窩に學び、業成りて肥後の加藤侯に仕ふ。然れども間もなく國除かれて去り、年四十一にして徳川頼宣に仕ふ。道圓性剛直にして苟も會はさず。任に就きてよく謇々諤々の節を盡す。君よくこれを信任す。

徳川頼宣は家康の子にして一の俊傑なり。かつて吉野に遊び終日花を賞しき。夜に入りて雨いたく降りぬ。頼宣侍臣と聯句を催す。濱田道迪、

不意盧山雨　爲君漂萬花

と唱へたれば頼宣之に聯ねて、

堪斟盤谷水　對客喫新茶

とうたへりといふ。

其の君勇武絶倫にしてその佩刀の利鈍を必ず自ら人に試む。かつて備前長光の刀を得、罪人を執へて立どころに之を斬る。左右辭を極めて讃す。道圓獨り言ふことなし。君問うて曰はく、支那に亦かくの如き刀の鋭利と刀を執るの妙とありやと。道圓曰はく龍泉、太阿、干將、莫耶の類は彼の邦の名器にして鋭利之に讓らず。又人君にして手づから人を斬りて快とする者古の人にして之を行ふもの夏の桀殷の紂これなり。本邦も亦之を職として罪人を斬りよく之に堪たる者あり。これ最も至卑の者なりと。その貴人默思久うして曰はく、卿が言極めて善しといひて厚く褒賜せられき。貴人又嘗て曰はく、吾不幸にして良臣を得ずと。道圓曰はく、ああこれ何の言ぞや。惟ふに今君の部下智勇の士乏しからず。而して未だ足らずとせらるるは但君が知られざる爲のみ。といへりしかば貴人大に感悟せりといふ。その忠直剛毅實に尋常儒士の比にあらざるを見るべし。

道圓性櫻を好み、櫻譜をあらはす。その載する所の種類十五種にしてそれらの特徴を漢文にて略説せり。本邦に櫻の專書あるは實にこれをはじめとす。鯁直忠誠日本人の典型とすべき學者にしてはじめて櫻花を傳ふるに足るの事

實ここに明らかに證せられたりといふべきなり。

道圓の櫻譜は櫻の專書の魁をなすに止まらず、櫻の品種の記載として甚だ貴重すべきものなり。吾人はこれによりて江戸時代の初世に既に幾多の品種の存せしを知るなり。その種類十五種の目、次の如し。

桐谷、楊貴妃、虎尾、鹽竈、普賢象、伊勢櫻、熊谷櫻、彼岸櫻、婆櫻、泰山府君、絲櫻、庭櫻（この庭櫻は櫻の種にあらざるべし）毬櫻、眞櫻、山櫻

有馬涼及が櫻痴

寛永の頃京都に有馬涼及といへる醫あり。世々國手の名あり、されど放膽にして奇行少からず。後水尾天皇特に徵して侍醫とせらる。ある時御惱の折召されて拜診せしに、我れよく治し奉らむ。されど衆醫の議を經べしとならば藥を奉る能はずといひて肯んぜず。止むを得ず、その意に任せられしかば、手づから調へ煎じて奉りしに速かに恢復ましましけりといふ。

或る日嵯峨の角倉氏に治療に赴く。途中にて大樹の櫻を見て、これを得まく欲し、價を問ふに甚だ高かりしかば、角倉氏に請ひてその金を借り、數多の人を傭ひ、荷はせて我が家に歸りぬ。さて、庭に橫だはせたれども植うべき地なければ、人々如何にせ〻ましと惑ふに、涼及は駭く景色もなく、「よしよしさながらおけ、寢ながらみる櫻とせむ」といひけりとぞ。

その櫻を愛する狀寧ろ痴に近しといふべきに似たり。しかもその人識見卓絕、尋常凡流の比にあらず。かくの如き人にして眞によく櫻を愛するを得べし。われはその痴態を愛す。

碁打の花見

きさらぎ中頃四方の花ざかりなりとて京中の男女老たるも若きもいさみあへる、我も友びとに誘れ、先東山の花と急ぎ四條河原鳥戸の前をゆくに、上下となく立こみてゆくとも歸るともあしもとをしられず。からくくぐり出て祇園の

樓門に立やすらひをくれし友を相待けるに、我よりさきだちていづくともしらぬ人ふたり心しづかにみえて打かたらひゆけり。ひとりは色白なる男とひとりは色黒き人也。井垣のもとにまだつぼみたる花あるをながめ入て色白なる男のいふ、

ひらかざる花のかたちや重か半

跡に先に諸人のゆくを見て黒き男

我がちにつゞきて出る花見哉

林に幕をうたせける人のあるを見て

幕串はすみかけてうて花の下　白

ふしぎなる事をいふ人々かな。此句作をきくに皆碁の手の詞也。日ごろ碁の友にて遺恨は有ながら、互ににくからぬ中なれば、げふは打つれ出つるか、かかるいひすてまでもはげむにやと推したり。そこにて彼二人がつれたる供の者どもをよびて、汝らは清水山に行て花の陰に待べし。芝居は何人のをさゆるともをしてとれ先をとらるるなといひて

花によき所をとるや先手後手　黒

人々の入こまんに幕を打てしたをはうて出入せよといひつけて

遊山する地をやぶられな花の陰　白

おかしき事と思ひ猶跡をしたひてきく程にかたはらに幕打まはし、大勢ならびゐたる中におさなき人影も見えてうたひまふ聲しければ

兒や花のぞき手もがなまくの内　黒

花見にはせめあひなれや順の舞　白

中手こそならぬ花見のまとゐの場　黒

此二人の知たる人ひとりたど〳〵しくゆくを見付て聲をかけゝれどしらず、過ければ、

手をうつをしらざるは何花の友　白

つひには此人もあいつれて

見をとしをせぬやなみ木の花ざかり　黒

あれを見んこれをといふをきゝて

四町にやかいりがましき花の友　白

清水の花はけふを盛也。其中にかつ唉殘りたるもあり、又枯て時しらぬもまじれりけるを

所〳〵だめをさいるやはなざかり　黒
いたみてやまだ目をもたぬ花の友　白

鹽竈といふは大かた散過たるを

あげはまとなるしほがまの櫻哉　黒

爰に垣ゆひまはしあたりへ人をよせざるあり。色ことさらにみえければ

守るてふ關はやぶらじ花盛　白

山に行て爰かしこに酒宴しけるを

さしかはす花見の酒やかたみ先　黒
よわからぬ相手もがもな花見酒　白
花にゑひて皆持となるや下戸上戸　黒

あまりに呑過して歸るさうたてかるべし、ひかへられよというて其のむ人にかはりて

興さむるかためはいかに花の醉　白

此三人もおのが芝居に入て盃さし出けれど、ひとりは下戸とみえて、さかづきをもとりあへねば

さかづきは打て返しよ花の友　黒

あれなるを一枝をりて笠づとにせまほしけれど、人の見るめおとなげなし、をらじといへば、後にあひたる友のいふ。これ程たくさんなる程なれば、何のくるしかるべき、たゞ〳〵をられよといへりければ、

花の枝は助言のごとく切てとれ　白
知る人にはねかけよかし花の露　黒
よそを見る顔してをるや打かひ手　白
折えたる花や梢の猿はひ手　黒

花守のとがめたらん時には

手を見せよをるかをらぬか花の枝　白

花守やをるを見付て追おとし　黒
見とれては目あり目なしよ花の色　白
花あらば這ても見まし岩根道　黒
打はさめちる二またのはるの雪　白
高みより飛手にちるな花の枝　黒
木ずゑまでわたり手もがな花盛　白
手づから茶をたてて
こうたてゝ見るは花なる白茶哉　黒
家の内にてちひさき枝を見るさへうれしきに、まして此遊山はとて
花少しいけてだに見ん竹のふし　白
けふ此山に打むれたる人々いくらにやといひて
もく算のならぬ群集や花の山　黒
種や人まくに及ばぬはるの山　白
夕日にはぴかへど花はひかし山　黒

けふ此二人のをかしき手あひをみてこなたには何事も思ひよらず、あまりほいなさに

斧の柄は朽ぬにもどる花見哉

寛文二年三月中句　　立圃

以上は大田南畝の一話一言に載する所の雛屋立圃の戯作にして「碁打花見」と題して傳へらるる一篇なり。

立圃は俗名紅粉屋庄右衛門といふ。本姓は野々口氏、名は親重、松翁とも號す。丹波の産、もとは武士なりしが、京都にうつりて雛をつくるを業とす。狩野探幽に學びて畫を能くす。書は探幽の師たり。俳諧中興の祖松永貞徳の門に入りてその高足たりしが一年同門の士、松江重頼と俳諧につきて論爭をなして師貞徳の氣色を損じて破門の姿となり別に一流を起せり。門人少からず。著書は多くして三十一種に及べりといふ。寛文十二年二月十七日歿す、壽七十五とも七十一ともいふ。その句集は立圃句集、花月千句等を名高しとす。この人花に親しみ深かりしことは

抱かれし時よりみたるさくらかな
さくら咲て花十分の日本かな
又こえむ花の中山七十二

などの句にて知るべし。

さても後年大田南畝が上野の花を詠じて

一めんの花はこばんの上野山
黒門前にかゝる白雲

といへるは蓋し、立圃の彼の碁打の花見に基づくところあらむ。この頃、上野公園聽鶯莊主人この南畝の詠を得て、之を石に壽し以て上野公園黒門の址に建つ。

京都の花

この頃の京の花は如何に。日次紀事二月の條に曰はく、

彼岸中一重櫻花必開、世謂之彼岸櫻。知恩院中光照院婆櫻此花開時花未生葉與齒倭語相同、老婆無齒故稱婆櫻。同德林院絲櫻、建仁寺與雲庵絲櫻、本國寺妙覺寺絲櫻世人之所稱也

といへり。又三月の條に曰はく、

凡春三月有櫻花處東方則白川、吉田、黒谷、若王寺、禪林、粟田口、神明山、山科、毘沙門堂、知恩院、丸山、安養寺、長樂寺、東漸寺、雙林寺、祇園林、建仁寺、觀勝寺、高臺寺、靈山正法寺、清水寺、大谷勝久寺、若宮八幡、豐國山。南方則泉涌寺、稻荷、深草、藤杜、墨染寺則有墨染櫻、宇治平等院、同與正寺、同白川金玉山。洛西南壬生寶幢寺、遍照心院、東寺、久我、鶏冠木、向日明神、粟生光明寺、大原勝持寺、世所謂花寺是也。小鹽山、三鈷寺、善峰寺、西岩倉金藏寺、山崎、離宮及寶積寺、石清水八幡。西山則北野、平野、鹿苑寺、眞如寺、等持院、龍安寺、妙心寺、御室仁和寺、鳴瀑妙光寺、福王寺、三寶寺、栂尾、槇尾、高雄、月輪山、愛宕山、嵯峨清凉寺、小倉山二尊院、往生院、三寶院、大覺寺、野宮、天龍寺、寶幢寺、臨川寺、三會院、法輪寺、嵐山、千光

寺、太秦廣隆寺、法金剛院、梅津長福寺、西方寺、松尾。北山則下賀茂、松崎、山鼻一乘寺、修學寺、赤山、長谷、花園、岩倉、八瀬、大原、鞍馬、貴船、巖屋、上賀茂、西賀茂、鷹峰、千本。其中一重櫻花以知恩院爲最。八重櫻花仁和寺、清水寺、大谷、高臺寺爲壯觀。凡每年清水寺堂前八重櫻花與與和州吉野一重櫻開落同時、是寒暄異處故也。南都春日社竝八幡宮、興福寺、東大寺櫻近年爲觀。

といへり。當時京都内外の櫻花の所在殆んど盡きたりとすべきに似たり。さるにてもその盛りの頃は滿都こぞりて香雲中に在るの觀を呈せしならむこと想ひやるべきなり。

次にはこの京都の花のうちにても特に著しき御室の櫻と平野の櫻とを稍くはしく說かむ。

御室と平野

京の花にして、その名古より聞えたるもの少からぬが、近世になりて著しくその名知らるるに至れるもの少からず。そのうちにつきて、御室の櫻と平野の櫻とを著しとす。

平野の櫻とは官幣大社平野神社の境内の櫻をさし、御室の櫻とは京都の御室仁和寺境内の櫻をさす。この二者いづれも德川時代の初期に植ゑはじめられて名高くなりて今に至れるものなり。

平野神社は京都市上京區平野宮本町に鎭座まします。この神社は桓武天皇遷都の時大和國より遷し奉られ、爾來廿二社の一として皇室の御崇敬はもとより、源氏、平氏、高階氏、大江氏、清原氏、菅原氏、中原氏、秋篠氏八氏の氏神として崇敬せられて、古來盛んなりしが、應仁の大亂にはその位置戰闘の中心地ともいふべきところにあたりしが故にそれらの爲に大に荒廢せりしが、寬永年間勅許を得て再興し、元祿年中に大に修繕を加へて、稍尊嚴を維持するを得るに至りしものといふ。今の櫻はその寬永の再興の時に神主西洞院時慶の植ゑしものに基づくといふ。その事は同社に藏する時慶の日記に見ゆといふ。その記事は寬永五

年に平野社に繼木せしことを載するよりはじめて、寛永十六年にわたりて植ゑたりしがそのうちに桐ヶ谷、普賢堂等の名見えたり。延寶四年の日次紀事にこの社の櫻の事を記せるは上にいへり。その後は秋里籬島軒の安永九年に出版せし都名所圖會にこの社の境内に櫻の花を多く描き、文政の頃には賴山陽が母を奉じて、この社に參詣して花見を催ししこと度重りきといふ。文久三年に版せし京羽津根にはこの社の條に

彌生の頃境内の櫻を夜櫻とて灯をてんじ騒客宴ず

とありて平野の夜櫻といふこと世に名高かりしが、明治のはじめに誤りてその神苑の東部を開墾して茶園とせしを明治六七年頃宮司近藤芳介再び之を復し、櫻品の蒐集につとめしによりて、明治二十年頃よりその名櫻の品種の多きと夜櫻とを以てまた世に知らるるに至れり。明治三十六年の頃には品種八十餘種に及び、時によりて盛衰あるが、明治四十五年には四十六種を算せりといふ。現存の名櫻中著しきものとして香山益彦氏の報ずる所次の如し。

突羽根、手毬、楊貴妃、旭日、富士山櫻、手弱女、妹背、寢覺、旗櫻、江戸櫻、素櫻、衣笠、白雲、嵐山櫻、鹽竈普通にいふ鹽竈櫻と異にして、單瓣なり、牡丹櫻、虎の尾

仁和寺は光孝天皇の仁和年間に創立せられたる寺なるが宇多法皇のましましが爲に御室の名を得たることはいふを要せざるべし。この寺は應仁の大亂に兵燹にかかりて本寺は一時廢滅に歸したりしが、寛永年中に再興ありしものといへば、その櫻もその後のものたるものなるべし。當寺の役僧の日誌に寛永十九年三月二十一日に「馬場之花盛」とありといふ。日次紀事の事は既にいへり。貞享元年の雍州府志には

近時寺中多植櫻。依之於今御室清水爲二一賞一。然清水東方而和暖故花之開也速矣。御室西方而寒冷花之開也遲矣。

とあり。享保三年の貝原益軒の京城勝覽には

春は此御境内の奥に八重ざくら多し。洛中洛外にて第一とす。吉野の山櫻に對すべし。毎年花ざかり十餘日の間はな見る人多くして日々群集せり。酒食をたづさへ幕をはりて遊宴をなすもの多し。高塔あり。花をめ

でん人は始中終三度行きて見るべし。木多き故さかり久し。

といひ、都名所圖會には

夫當山は佳境にしてむかしより櫻多し。山嶽近ければつねにあらしはげしく枝葉もまれて樹高からず屈曲ためたるが如し。彌生の御影供は猶更花の盛には都鄙の貴賤春の錦を爭ひ幕引きはへ云々

といへり。爾來花の名所として今に傳はれり。ただこの地の櫻は都名所圖會のいふ如く、「矮生にして其根元より數十の枝を生じ宛然躑躅の如き奇異なる狀態を呈す」といふべきさまなるを特色とす。その名櫻としては

車返、有明、鬱金、見櫻、殿櫻、普賢象、桐ヶ谷、御衣黄、蝴蝶櫻、乙女櫻、大内山櫻、淺黄櫻、護摩櫻

等なりといふ。

ここにこの平野神社が、その神紋として八重櫻の紋章を用ゐ、仁和寺が櫻に二引の紋章を寺紋として用ゐ、又櫻の文字を法被の紋章として用ゐることを見るは櫻の上に著しき緣故を有するものといふべし。

今これに因みて櫻の紋章を顧みるに、その一重の花を紋章とせるには、一重櫻、山櫻、細川櫻といふあり、又櫻井櫻、葉敷櫻といふありてこれも一重の花を基とする特殊なる紋章なり。又八重櫻あり。枝をつけたる枝櫻といふあり。花三輪を用ゐるあり。九曜櫻とて、大なる花一輪を中央にして周圍に小なる花八輪を描けるあり。これらは主として清和源氏の流れと、藤原氏の支流秀郷流などの用ゐるものたり。

徳川光圀の愛花

徳川光圀は水戸黄門の名にて知られたる偉人にして純日本人の典型たり。この人の櫻花に傾倒せしはいはずして知らるべし。かつてその後樂園にて儒臣と共に櫻花を賞せしことなどありて櫻に關する光圀の事は頗る多く傳へられたり。次にその二三を述べむと欲す。

光圀かつて冬櫻を得て詩を作れり。その序に曰はく、

曾聞、駿府有冬櫻予渇望也久、府吏大久保君分惠一根、培之灌之、旦視暮撫、今冬始華不堪愛玩賦五言一律以戲簡之

と。晩年に西山に閑居せしが、一日侍臣に語りて曰はく、小幡驛に櫻の老木あり。この頃は花まさに咲きぬらむ。往きて賞せむといへりしが、雨いたく降り出でたり。光圀雨中に花を賞するも亦一興なりとて、蓑笠きて徒歩して出づ。小幡に至れば花は眞盛なり。光圀大に悦び、終日遊びてかへりきといふ。又かつて八牟知山に遊びしが老櫻兩株ありて花まさに盛なりしかば大に悦びて名づけて一木二木といふ。その後士人往々ゆいて賞するものあるに至れり。

光圀また花を賞する詩に「今日催櫻會」といふ句あり。これ古の醍醐、加茂などの櫻會の史を知りしによるなり。光圀また燈をともして花を看る詩あり。曰はく、

白櫻樹下倒金尊　天爲幕兮地爲席
惜花終夜移燈看　不知東方既將白

と。

光圀の櫻を愛すること至れるかな。當時佐々十竹といふものあり。上野清水堂の傍にて、

立ちよれば花の木かげも假の宿に
心とむなと吹くあらしかな

とよめり。光圀この歌にめでて之を召抱へ二百石の祿を與へたりといふ。十竹名は宗淳、性忠篤にして史館に職を奉じ、最も史籍の採訪に力を盡したりしが、光圀西山に隱居せし後は、その左右の事を掌らしめたりといふ。一首の和歌によりて、君臣水魚の契を結ぶに至りしもの亦櫻花の致す所なり。

朱舜水と陳元贇

德川光圀一日儒臣を後樂園に召して櫻花を賞せしことありしに、朱舜水櫻花の賦をつくれり。その中に

輯群櫻作廻廊、蹀躞芬芳聯數里

といふ句あり。

朱舜水字は文恭明の宗室なり。明の亡びんとするや援を我邦に得んとして來朝し、志を果さざる中に明亡びしかば、終に本邦に止まりし人なり。光圀之を聘して師として事へたり。本邦に來りて後櫻を愛して、庭に數十株を植ゑ、花咲く毎に之を賞美せり。かつて門人に謂つて曰はく「吾が國に之有らしめば當に百花に冠たるべし」と。この事安積覺の湖亭涉筆に見ゆ。曰はく、

文恭酷愛櫻花。庭植數十株、每花開賞之謂覺等曰、使中國有之當冠百花。

廼知或者認爲海棠可謂櫻花之厄。義公環植祠堂旁側存遺愛也。

と。卽ち舜水歿せし後、光圀その祠堂を建てて、その側に櫻をめぐらし植ゑて以てその靈を慰めしなり。中村顧言かつてここを過りて詩を賦して曰はく、

獨對山櫻感歲華　東風咸々舊烟霞
川棠洛牡皆遑氣　故愛扶桑第一花

明室孤忠の遺臣と扶桑第一の櫻花と肝膽相照すものあるを想ひ見よ。櫻花豈にただ日本人の象徵たるに止まらむ。純忠至誠これ櫻花の精神にあらざるなからむや。支那人朱舜水にして櫻花に共鳴すること上の如し。

陳元贇も亦明人なり。國亡び亂を避けて本邦に歸化し、尾張侯の召に應じ江戸に來往して諸の名人に交りて文字の遊をなし、最も元政上人と善し。元贇拳法をよくし、これを本邦に傳ふ。今の柔術と稱するものこれが遺法たり。元贇亦櫻花を愛せり。その詠に曰はく、

滿樹婀娜簇淡英　梨花是友桃是兄
粉紅淺帶微醺色　湘碧全含別樣情
羅奇香嬌長樂女　珍寶實飽上林鶯
凭軒坐對芳叢下　落照斜窺艷信生

その上野遊春の詩は當時の花見の狀を想見せしむ。その下聯に曰はく、

人樽醉藉眠芳草　風送櫻花落角巾

と。櫻花の人心に共鳴する處、人種、民族の差別を超越するを見るべし。

三宅觀瀾の櫻花詩

三宅緝明は觀瀾と號す。淺見絅齋に學ぶ。かつて楠子の墓を拜する詩を作る。光圀これを見て召す。よりて仕へて史館の總裁に至る。正德年中幕府に召され儒者となれり。

觀瀾かつて櫻花詩を詠ず。其序また櫻の爲に知己の言たり。略に曰はく、

紅者呼爲桃也、白者呼爲梅也、爲李爲杏各隨其名所在。而獨謂之花、人皆知其櫻者專而予之也、櫻之美斯可知矣。神代之初大山祇女降在此樹因號木花開耶姫。人皇之世履中帝泛舟內池此花飄入手杯因號其居爲稚櫻宮。而平城帝賦詩賞以光照四方笑亘三陽。嵯峨帝始爲之設宴、後冷泉帝新爲之起殿。其降種子秋津洲而受賞于大宮人蓋亦尙矣。而歌人墨客爭賦競吟或比雪者、或擬錦者又不知其幾萬言。方夫都士女探春求芳豪家名苑梵宇神祠烟野之曠、崎嶇之絕、無貴賤無遠邇翦車輿之所到隨杖鞋之所赴圍幕縱酒如狂必及其散而後已。嗟亦足以揚上都之至盛而飾太平之餘華也。獨怪造化之功精華之發專鍾其美於吾土而異邦所生稱者絕少。

その詩に曰はく、

艷陽欲醉九重霄、無數櫻花春正饒、濃學曉雲偏簇簇、嬌依午影自搖搖、杯中誤惹君主喜、階左笑迎臣士朝、日暮東風三月雪、漫傍紅袖散飄姚。

と。當時櫻を詠ずるの詩中出色のものとす。その序また當時櫻を賞するの狀を想ふに足る。

櫻之辯と櫻品

三宅觀瀾かつて韓人と唱和せし時、韓人甚だ感じて「子が學術誰に從つて此の如きか」と問ひし故に、「闇齋の門に出づ」と答へきと傳ふ。蓋しその師絅齋が山崎闇齋門の高足なりし故なり。

山崎闇齋は一代の鴻儒なり。朱子の學を奉じて晩に神道の學を唱へ、垂加の

一流一世を風靡し、贄を執る者前後六千人に及びたりといふ。闇齋又「櫻之辯」を著す。闇齋本邦の大道を宗旨とし、孔孟の道を羽翼とす。本邦の儒學ここに於いて樹立せり。その櫻花に共鳴すること宜なりといふべし。

闇齋の學統の櫻花に於けるものは松岡玄達に及びて大なる結晶をなせり。玄達は通稱恕庵といひ怡顏齋と號す。京都の人にして闇齋に學びて和漢の學に通ぜり。博覽にして古を好み、儉素にして淳樸なり。大なる倉を二つ建て一には漢籍を藏め一には國書を藏めたり。恕庵もと本草學者にあらざれど、古典に載する名物の識り難きに困み、稻生若水に從ひて本草を學び、その識若水の門下の專門學者を凌駕せりといふ。かつて櫻品一卷をあらはす。

櫻品はその當時京都その他に存在せる櫻の種類六十九をあげ、これを圖にてあらはし說明を加へたるものにして櫻史中重要なる著作なりとす。その卷首に師闇齋の「櫻之辯」を載せたり。この書は恕庵の歿後（延享三年歿）十二年にして刻成せられたり。

これより先櫻の品種を載せたるものに那波道圓の櫻譜あり。玄達と前後して寺島良安の和漢三才圖會あり。載する所の櫻の種類五十三、これを那波道圓の櫻譜に比するに殆ど四倍に至らむとす。櫻花の品種の激增せるを見るべし。而して櫻品に至りては更に增加して櫻譜の五倍に達せむとせり。今その增加したるもののうち著しきものをあぐれば次の如し。

兒櫻(三)　芝山櫻(鷲尾)　逆手櫻(三)　帆掛櫻　駒繫櫻　小櫻(三)
白櫻　雪山櫻　一文字櫻　薄墨櫻　江戸櫻　法輪寺(三)　樓
間櫻　海棠櫻(三)　千本(ヒト)櫻　九重櫻　淺黃櫻(三)　樺櫻　爪紅
櫻　有明櫻(三)　糸括櫻(三)　提灯　昭君櫻　匂櫻(三)　緋櫻(三)
外山櫻　曉櫻　瞿麥櫻　鳳來寺　名島櫻　不斷櫻　殘雪櫻
江戸法輪寺(三)

右の下に「三」字を注せるは和漢三才圖會に出づるものなり。なほ三才圖會に載せて、櫻譜櫻品に載せぬもの次の如し。

菊櫻　奥州櫻　述懷櫻　南殿櫻　八重一重　車返　八重垣
櫻　西行櫻　小菊櫻　深山隱　天狗櫻　香芬櫻　豐國

常陸櫻　索靼濱櫻　本紅櫻　練絹櫻　桐壺

これらのうちには從前よりありて名を記載せざりしもあるべけれど、また時世の進みにつれて、新に生ぜし品種も多かるべし。そがうちに著しきは、櫻譜に載せたる毬櫻が三才圖會に

大毬　中毬　香毬　紅毬

の四種になれることにして、これなどは、まさに分化の著しき例なりとす。要するに江戸時代の中頃に至りては櫻の品種の著しく增加したるを見るべし。

江戸のはじめの頃の櫻

以上に於いて吾人は江戸時代のはじめの武士、學者などの櫻に對する事蹟を略叙せり。ここに當時の庶民の櫻に對する狀況を述べむ。

慶長見聞集を閲するに

花折る咎に繩かかる事

といへる一條あり。その梗概を次に述べむ。

春三月五日の事かとよ、湯島の傍に櫻花盛に見えたり。これは江戸御代官の花とぞ後に知られたる。三浦淨心湯島の寺に所用ありて童を遣ししに、この花道のほとりに咲き亂れたるを見て家苞にせむとや思ひけむ、一枝手折りけるに、花守に見つけられて捕へられ、散々の目に逢ひし後、その童和歌をよみて命だけを助かり、終に主淨心をも呼び出し、事面倒に及びしが、湯島天神社の別當の執成しにて赦されたりといふ。されば、この頃江戸に櫻の花盛りにして走り童もこれをめでしを見るべきなり。

同じ書に又、

江戸町衆花をあいする事

と題せる一條あり。其の略に曰はく、

見しは今江戸の町人とめるもまづしきも心やさしくありけり。わづかなる庭のほとりにも花木を植置詠め給へり。一花ひらくれば、四方の春長閑にして紅花の春のあしたこうきんしうのよそほひかや。げにも花故に里

もひなびねば江戸はさながら花都匂ひふん〳〵としてあふさきるさに花のすゝ衣色香に染ぬ人もなし。若、俄に山風野風吹來て妙なる花をやちらさんと硯薄紙を懐中し、花の下の狂人雲に似靄の如し。心々に詩を嘯き歌をずし給へり。誠に人の心のうき立つ物は春の氣色なり。

これらの文にてその狂態を演ぜしさまは知るを得ざれど、花見に上下の心を傾けしさまは知られたり。

江戸の櫻花は今一々その起源を知ること難くして慶長以前のことは詳かならざれども、寛永年間には上野附近には山櫻又は里櫻を多く植ゑられたる證跡あり。殊に上野の寺中には彼岸櫻及び枝垂櫻の大木多かりしは是等の櫻を圖せる巻物類の今日に遺れるによりて知るべし。又寛永年間、忍ヶ岡の林春齋の野墅に櫻の多かりしことも口碑に殘れり。又淺草に今並木町といふ所あり。此處に、古は櫻の並木ありしが故にこの名ありしが、後に木は失せたれど、町の名に名殘を止めたるなりといふ。俳人芭蕉の發句に

觀音のいらかみやりつ花の雲

花の雲鐘は上野か淺草か

とあるもの、その並木の櫻の存せし頃の詠なりといふ。又品川御殿山には寛文の頃吉野山の櫻の苗を植ゑしめたるが、花見の名所とはなれり。又深川八幡には芭蕉の門人歌仙女が櫻を植ゑたる事蹟もあり。この上野深川などの事は後に委しくいふ所あらむ。かくの如くにして、江戸も漸くに花を多く有することとなり、後には花のお江戸といふ語を事實にあらはすに至れりと見ゆ。

金王櫻と衞門櫻

和漢三才圖會を見るに櫻の種目の中に金王櫻と衞門櫻とをあげたり。その金王櫻の記事次の如し。

金王櫻、大白、八重特、大挑灯、花盛日久、

これ大挑燈櫻の次に載する如しといへども、もとこれ名區の花をさし、櫻の品種にあらず。この花は江戸澁谷金王八幡宮の境内にある名木にして相傳へて

いふ、左馬頭源義朝の舎人金王丸といふものの植るしものなりと。この花關東の名花なりし由は當時の諸書に見えたり。しかるにその樹或る時枯れしかば、人ありて植る嗣ぎしもの、今に傳はれりといふ。その事は紫の一本にいはく、

澁谷金王丸が植るしにより金王櫻といへり。此櫻の實を紀伊大納言賴宣卿の御母養珠院殿聞し召し御內の侍澁谷是入と云ふ者を召し、汝は金王が子孫の由聞し召す、今金王櫻枯れて名木絕ぬ。幸我庭に實植の櫻あり。餘人の植たらむよりは子孫の汝植たらむには先祖の孝にも成るべしとて此櫻を是入にたびたまふ。是入謹で頂戴し、則其櫻を植る。今の金王櫻是なり。

と。かくてその著者がその櫻を實見せし記事に、

卯月廿八日目黑詣でのかへるさに遺佚と陶々齋と立寄て見侍るに若木の櫻は九尺許生のびて枝もさかえず。枯木はなかば朽て七尺ほどものこれり

といへり。

然るにここに不審あり。花壇全書には金王丸の植るし花は一重の大輪なりといへり。かくて三才圖會の文は八重の大なる白花なりとして大挑灯の種類とせり。三花手控には亦重辨にして色濃く大にうるはしといへり。三書三樣にしてその實を知らむによしなし。而して世に別に金王櫻といへる品種ありと傳ふ。その花は「單辨にしてうるはしき花なり。葉すくなく大木なることかたし」といへり。これそのはじめの金王櫻の種なるべきか。今八幡宮內にあるは三花手控にいへるにおなじ。

さて三才圖會の衞門櫻の記事次の如し。

衞門櫻　中白八重　花，莖短開　狀如總系

といへり。而してこれも亦櫻の品種の名にあらずして江戶柏木圓照寺內にありし名木の名なり。この木の事も紫一本に載す。その文に曰はく、

圓性寺といふ寺の內にあり。花の色勝れ匂ひ深し。柏木の名木なる故にや右衞門櫻と名付る。花の盛はよの花よりも餘ほどおそし。匂はうゑきやうに似たり。花を折らせじとの爲に櫻の廻りに竹の垣をかこふ。

といへり。この花の由來につきてくさ〴〵の說あれど、すべて證據のなき事なり。惟ふに紫の一本の說の如く源氏物語に名高き柏木右衞門督の名より思ひ付き、古、誰人か柏木の地にある故に右衞門櫻といへかしといひしに基づくに止まるべし。この花につきて古今要覽稿に、

楊貴妃の變種とおもはるれど、蕊の下にむかふを異なりとす。

といへり。

和漢三才圖會は全國にわたりてあまねく、事實を記述せるものなるは勿論なりといへども、著者は浪華に住せし人なり。而してこの關東の二名木を櫻の品種中に混じ揭ぐる所以は、そが江戸にて名高かりしに基づくとはいへ、この二木が如何に天下に知られてありしかを想ひ見るに足る。

紫の一本には江戸の櫻の名所を載するもの、この外に東叡山あり。谷中感應寺にしだれ櫻、淺黃櫻ありし由を記せり。淺草觀音にも櫻あり。四谷自性院、芝大佛にも櫻ありし由を記せり。

上野の花

當時江戸に花は到る處にさま〴〵多かりしかど、上野の花を以てその第一とせしものの如し。この上野の花につきては既に述べし如く大田南畝の狂歌ありて人口に膾炙する所なるが、なほその他の一二をいはば、幕府末造の頃の著名なる津藩の儒齋藤拙堂は曰はく、

江戸名花首レ屈レ指、飛鳥山墨沱川然、形勝既不レ及二嵐山一而游人猥多、又頗爲二殺風景一。唯東叡山廣袤數里、雖二游人衆一不レ損二風景一。山盡早櫻又多二老杉古松一、殿閣宏壯。麗而不レ靡、皆足レ與レ花映發一矣。京師以二早櫻一名者、華頂山爲レ最、亦未レ能レ比二此地一也。

山舊爲二我藩別墅一、故或稱二上野一而清水、黑門車坂等名又皆襲二伊賀上野一云。

と。これその地、もと、津藩主藤堂氏の邸ありし由なれば拙堂特に親しみを感じてかくいへりしならむが、その花見のさまの清らかなりしは江戸第一なりしことは爭ふべからず。これ一は上野の地は輪王寺宮のおはしましゝが故なるべ

し。

上野の地は伊賀の上野に似たるより名づくといふは拙堂のいふ如く古來の傳說なり。されど永祿二年の小田原北條家分限帳に島津孫四郎および圓城寺左馬助等江戸知行の中に上野の地を加へ、又坂本村の天正十九年の水帳に上野鄉とありといへばこの地を上野といふことも古きことなり。されば、藤堂氏ここに邸を構ふる時伊賀の上野とその名も地勢も似たるより、伊賀の上野に准へて、清水、黒門、車坂等似たる地名を與へしが、今も殘れるならむか。

元和年中に藤堂氏はこの地を返して、染井に移り、幕府よりその跡に工事を營みて寺を建てたり。その成れるは寬永四年にして大僧正天海を以てその開基とす。これ卽ち東叡山寬永寺なり。元祿十五年に至り後水尾天皇の第三皇子守澄法親王を請じて天海の法嗣とし、正保四年入室せられ、爾來代々法親王の門跡となりて明治元年に至る。山內には根本中堂、文殊樓、吉祥閣ともいふ雲水塔、輪藏をはじめ三十六坊ありて、江戸に於いて一二を爭ふ壯觀なりしが、明治維新の際、かの彰義隊がここを本據として官軍に抗せし爲に兵燹に罹り、樓閣堂舍殆ど盡く烏有に歸して、昔時の壯觀夢の如くに消え失せぬ。されど櫻のみは依然として傳はり今に至りてもなほ花の名所なり。

上野臺の最南端今西鄉隆盛の銅像又彰義隊の碑ある邊一帶の地を櫻が岡といふ。もとは櫻が峯とも山王臺ともいひし所なり。その山王臺と名づくる故は、ここに山王祠のありたるによるなり。この山王祠は寬永寺造立の時にその鎭守として祀りしならむが、この臺にはその山王祠と清水觀音堂もと摺鉢山にありしを元祿頃うつすとがありしを戊辰の兵燹に祠は亡び、觀音堂のみ殘れるなり。この地につづきたる車坂の方の一帶はもと寬永寺とは別に林道春の邸のありしなり。道春ここに學舍を開き弘文院といふ。尾張侯徳川義直その爲に一宇の堂を營み孔子及び四配の像を安置して釋奠の禮を行ふ所として先聖殿と稱す。元祿三年その弘文院及び先聖殿を湯島臺に移す。これを湯島の聖堂といふ。これより後上野臺すべて寬永寺の地となりしなり。

上野の花はいつの頃よりありしか。拙堂の文によれば、藤堂氏に緣故あるが如くなれど、明かにはいはず。ただその櫻の早晩の種なるをいへるを見る。こ

れ、實にその言の如く、東京の花信は今もなほ上野の彼岸枝垂を以て魁となすなり。さても印明記といふものに傳ふる所によれば、この櫻は實に天海僧正の植うる所といへり。曰はく、

大師常に櫻、松、紅葉をば好み給ふとて將軍自ら吉野の櫻を本坊なる本覺院の庭に植ゑ給ひて、永く末の世のみしるしにし給ひしなり。今に其木を本として山の中三か處といふまでに植置たり。

とあり。卽ち、櫻は本覺院に、松は輪王寺に、紅葉は寒松院（今の動物園の地にありし坊）に植ゑたるを本とせりとなり。本覺院は天海僧正の本坊として住せし所にして世々東叡山の執當の職を帶す。その坊亡びたるが、今の美術協會會館をその舊地とす。卽ち、將軍家光の命によりて吉野の櫻を移し植ゑしめたりといふなり。かくて、それらを基としたるならむが舊山王臺の櫻はそのはじめ、林道春の植ゑしめたるものなる由鵞峯文集に見えたり。

この上野の櫻は彼岸枝垂、彼岸櫻、吉野櫻、山櫻、八重櫻など種類少からぬが、なかにも彼岸枝垂卽ち絲櫻を著しとす。上野にては之を大師櫻といふ。かくいふ故は天海僧正の諡を慈眼大師といふ。その慈眼大師の愛せし根本の櫻なるを以てなり。この大師櫻は今も動物園前の廣場（元の寒松院の櫻）府立美術館食堂入口の左にある老樹なりといふ。

東叡山頭花似氛、東叡山下雪紛々、
筐歌千隊齊聲唱、那得暫時停白雲　　徂徠
ちる花の都のふじやいかならむ東の比叡は雪とこそなれ　　眞淵
木のもとに汁も膾も櫻かな　　芭蕉

花見小袖

當時京都の花見の狀如何。日次紀事に曰はく、

凡京俗春三月每花開良賤男女出遊、是稱花見。其時多新製衣服、俗謂花見小袖。男女每出遊必折花枝而歸。市中兒童追跡而慕之。各高聲謂之曰須賜花一枝、欲與啼兒、等賜之則可賜好花。是華洛兒童之諺而遠境鄙里之所不

識者也。織田信長公春三月入洛始聞新言大感之謂實都下兒童之詞也。然歸江州安土城則敎城下兒童而唱之云。

と。花洛風雅の遊これにて知るべし。

江戸に於いて當時花見の盛なりしは東叡山と淺草との二と見えたり。しかも淺草は花よりも人を見るべき狀なりしは昔もかはらざりしが如く、上野の花見こそ當時の花見の代表と目すべかりしなれ。紫の一本に曰はく、

東叡山　黒門より二王門の並木の櫻の下には花見衆なし。東照宮の御宮の脇後松山の內清水の後に幕はしらかして見る人多し。幕の多き時は三百餘あり。少き時は二百餘あり。此外連立たる女房の上着の小袖男の羽織を辨當からげたる細引に通して櫻の木に結び付けてかりの幕にして毛氈花むしろ敷きて酒飲むなり。鳴物は御法度にて鳴さず。小歌淨瑠璃仕舞は咎むる事なし。町方にては女房娘、正月小袖と云ふは仕立ず。花見小袖とて成程結構に手をこめ伊達なるもの、數奇に好みたるを着て出るなり。花より猶見事なり。花の頃は空くもりて大形晝過より雨降る。然れども傘をもささず、小袖ぬらし歸るを遊山にも又手柄にもするなり。

といへり。江戸の昇平の象と町家寬濶の氣風とは花見小袖に象徵せられたりといふべし。かくてその群集の狀は、

花の盛りにどんどろめきの石橋からはなかなか先へは行かれず。仔細は江戸下町の者共は筋違和泉橋を渡りて廣小路へかかり來り、湯島小石川小日向筋の者は池のはたの町へかかり來る。黒門前からは下谷からの見物、谷中筋よりの人四方からの集りなれば、ひしと詰りて動きはたらきもならず、車坂からも上り、屏風坂からも上れば上野の込合夥しき事なり。

といへるにて雜閙の狀想ひ見るに堪へたりとす。中には又、

いつの間にか仕度したりけん。大佛の後の窪に櫻の花盛りなる其下に水風呂を立て其湯へ花を入れて「溫泉水滑かに岸洗ふ」とたはごとつきてあかをすり居たり。

といふ如き狂態を演ぜるものありきといふ。江戸中期の花見のさま目に見るが如し。

櫻づくし

櫻の品種の漸く多くなりしは上に述べたる所にて明かなり。ここに「松の葉」といふ書あり。元祿十六年の版にして三味線の本邦に傳來してよりの世上に行はれし小歌を集めたるものなり。その第二卷「長歌」のうちに「櫻づくし」といふ一曲ありて櫻の種類をあぐることあり。曰はく、

飽かでのみ　花に心を盡す身の　思ひあまりに手ををりて　かぞふる花の品々に　わきて楊貴妃　いせ、こまち　たがこ櫻　百の媚ある婆娑櫻　われやこふらし面影の　花の姿を先だてて　ゆくへわけこしみ吉野の二上りくも井にさける山櫻　霞の間よりほのかにも　みそめし色のはつ櫻　たえぬながめは九重の　都歸りの花はあれども　馴れしあづまの江戸櫻　名に奥州の花には　誰もうき身をこがす鹽がま櫻　花のふりそで八重一重　したにはむくの緋櫻や　樺にあさぎをきませて　わけよきぬひの絲櫻　ひく手あまたの身なりとも　せめてひとよのたはふれに　ゑひをすすむる　くまがへの　たけき心は虎の尾の　せんりもかよふこひのみち　しのぶにつらきあり明櫻　きみのなさけの薄櫻　よしや思ひを桐がやつ　うきよをすてし墨染櫻　昔をしのぶ家櫻　花のとぼそのさびしきに　月のかげさへ遲櫻　やみはあやなし紅梅櫻　花のしら露春ごとにうちはらふにも千代はへぬべし。

又「松の落葉」といふものあり。寶永年間に成れり。それが首卷にも「櫻づくし」を載す。これは江戸半太夫節の歌謠なり。その初に曰はく、

年のよはひは十三四五なるちご櫻　みめは楊貴妃　桐がやつ　めもとにこぼるるしぼがまや　召した小袖は何々ぞ　あさぎ櫻にかば櫻　もみかうばいの緋櫻を　召しかへ〳〵なさるる時は　しづが心はさみせんのほそり三のいと絲櫻　待つ夜は君が遲櫻　忍ぶにほゆる犬櫻　ごせはすこしもねがひはせねど　墨染櫻　普賢象　かの敦盛にうき世をすてし熊谷櫻奈良都の八重ひとへ　京九重はひろしといへど　またとあるまいあ

の君を　花のしんに立おいて　我下くさとぞ成にける。

これらを以て如何に櫻の品種の世に知られてありしかを察すべきなり。

ここにこれらの歌謡に因みて歌舞伎に櫻のあらはるるものを見む。歌舞伎の所作事として櫻に因めるものの著しきは江戸長唄の京鹿子娘道成寺と、河東節の助六所縁（ゆかり）の江戸櫻と常盤津節の積戀雪の關屋（せきのと）との三曲とす。娘道成寺は枝垂櫻を舞臺にあしらひ、花を欺く妙齡の白拍子の舞を見せ、助六は吉原の花の下道を俠客助六の濶歩する姿を演じ、關屋は墨染櫻の精が美人としてあらはるることを骨子とす。いづれも櫻の國にふさはしき劇として人口に膾炙せり。

秋色櫻

延寶天和の頃にもやありけむ。一年の花見の折に東叡山の清水觀音堂の後なる櫻の枝に

井の端の櫻あぶなし酒の醉

といふ發句を記したる短冊を附けたるあり。時の輪王寺法親王文雅の道を好ませられ、花の頃は日々山内の櫻に附けある詩歌俳諧を取り集めて啓上せしめ、これらを見て樂まれしが、この發句御目に止まり、御感のあまり句の主を尋ねしめられしに、當時十三歳の少女にてありき。

この少女名はお秋といひ、江戸小網町菓子商大目氏寒玉の女にして幼より風雅の道に志ありて其角の門に入り號を秋色といひき。この事ありてより秋色の名都下に宣傳せられ、その櫻をさして秋色櫻と呼ぶに至りぬ。

俳諧にて櫻をよめるもの極めて多し。人口に膾炙する貞室の「これはこれはとばかり花の吉野山」より芭蕉の「奈良七重七堂伽籃八重櫻」に至るまで名句また少からずといへども、秋色のこの句の如く花の名にまでなれるもの古今に絶えてなし。句の巧拙をとふことなかれ、われ秋色を以て櫻花史上近世の一大女性と目するに躊躇せず。關雪江の秋色櫻を詠せる詩に曰はく、

花覆井欄風力輕　垂枝嬌嫩太多情　咏歌人去歳華杳　春色依然秋色櫻

秋色は又の名を菊后亭ともいふ。享保十年四月十九日に歿す。享年詳ならず。

或は云はく五十七なりと。

秋色櫻はもと大般若櫻といふ櫻にしてその清水堂は今の摺鉢山にありし頃の事なりといふ。柳亭種彦の還魂紙料に載する圖を見て知るべし。然るに江戸名所圖會には

清水觀音堂　秋色櫻

秋色櫻は清水堂の御供所構のうち井のかたはらにあり。花は一種にして虎尾と稱するもの是なり。中頃江府の商戸何某の女秋色といへるもの花のころここに來り「井戸ばたの櫻あぶなし酒の醉」といへる秀句ありしよりかく名づくるとなん。

とあり。而してここに圖せるものは元祿十一年に移されし後の觀音堂なり。されば秋色櫻の地も亦かはりしならむ。

歌仙櫻

われ先に秋色櫻を叙せし序を以てここに、なほ當時婦人の櫻にめでし物語をせむ。

伊勢の神官渡會氏の女に園女といふあり。性風流を好み、和歌を善くし、俳諧に巧なり。初め山田の人杉本光貞の妻美津女に學びしが後には芭蕉翁を師とし、翁歿して後は晋子其角を師となせり。

園女長じてはかの名高き岡西惟中(大坂に住す)に嫁し貞淑の聞えあり。集會の席といへども曾て男子と並び坐せることなく、夫歿して後は江戸に來り、ついで京都に遊び、後また江戸に歸り住めり。晩年佛道に入りて知鏡と號す。世事には疎かりしかど、禪機に通ぜしにや、その雲虎和尚に答ふる書中に曰はく、

不求眞不求妄は大道の根源誰も存ずる所憚ながら珍からず候。一心源頭に上ての所作、柳は綠花は紅ゐ、その儘にして常に句をいひ、歌を綴て遊申候事に候。無益の口業ならば、一切經も無益の口業にて候。法臭き事は嫌にて我平日の行は念佛と句と歌となり、極樂へ落るは目出度し。

とその悟道のさま見るべきなり。

園女かくの如き人にして櫻を愛すること常人に超えしにや、江戸にあるとき、深川に住みしを以てその地の八幡宮の境内に櫻を植うること三十六株、これ蓋し三十六歌仙の數に因みしなり。碑あり。題して、「園女歌仙櫻」といふ。

園女享保十一年四月廿日歿す。壽七十四と傳ふ、又曰はく六十三と。その俳句中花をよめるもの二三を次にあぐ。

山松のあはひ〳〵や花のくも

花の前に顔はづかしや旅衣

ねむたがる人にな見えそ朝櫻

この歌仙櫻も後には枯朽せしかば、後人これを惜みて再び植ゑたりきといふ。

丈草が吉野賦

僧丈草は蕉門十哲の隨一なり。俗姓内藤氏。世々尾張犬山の臣なり。故ありて出家せり。資性孝順にして氣宇曠達。榮辱の何物たるを知らず。その芭蕉翁に師事すること至れり。この人師の歿後三年の間一石一字の法華經を書寫してその居、粟津の佛幻庵の邊に經塚を築けりといふ。寶永元年、齡四十二にて歿せり。

丈草が俳文に「芳野賦」といふあり。その要を次に抄出す。

よし野を御吉野といふは、皇居の地なればなり。山、川、里、嶺、嶽、高根、尾上、山の井、花園を詠ず。すべて二十一代の歌數三百七十餘首。猶家々の集、物語類、詩連俳諧のたぐひ、佐川田喜六があさな〳〵、貞室老人のこれは〳〵までかぞふる中々いとまなからん。（中略）上市よりは飯貝にわたり、下市をこえては六田よりのぼる。妹背山をへだて、高取の城にむかふ。ちもとの櫻、日本が花、櫻田の谷、さくらが嶽、關屋の花、瀧ざくら、雲井櫻、布引の櫻、花矢倉、花籠の水、（中略）櫻木の宮、金精（コンセイ）の明神、力乞の不動、同り地獄、尊算の御影堂には花供養の餅をまき、五臺寺、櫻本は當山の先達也。（中略）さくらは吉野に名たかく、よしのは櫻にて名擧げたり。麓より奥の院まで左右の山々前後の谷々、ただ雲を攀上り、ただ雲をくだるがごとし。海道の吹だめには落花の浪を揚、

木の間の嵐は寒からぬ雪をふらす。麓ははやく、奥はをそし。開落山の淺深によれり。春此山に上り、いづれか花のさかりならぬ所はあらじ。夫櫻の名目は伊勢櫻、江戸さくら、火櫻、樺ざくら、うば櫻は葉のなきをいひ、しほ竈とは濱に咲といふ事にや。熊坂といひ、楊貴妃といふ。世に色なき杜若は八橋と名付、よく垂る萩を宮城野と號す。さればむかしより、ただざくらの名に吉野といへる花をきかず。ただ吉野とも櫻とも理窟をつけぬこそ高みなれ。

芳野山の花の眺め、この一文にておしはかるに足れり。俳文たりといへども、佶屈聱牙の漢文にまさること萬々たり。

日見櫻と元日櫻

この頃の人西川求林齋が長崎夜話草によれば、當時長崎より二里許の處櫻谷寺といふあり。その境内に日見櫻といふ巨樹ありしなり。その大さ圍一丈一尺。大枝八方に分れ傘をひらきたるやうにて、東西十五間、南北十三間、高さ十間ばかりなりきといふ。花は普賢象に似て、花盛にはただ山なす雪を見る心地せりといへり。この木は天正の頃南蠻人の植ゑたるなりと傳ふ。花の頃は長崎の男女群り行きて二里の山路に袖つらね、唐土人なども行きて之を賞し、詩よ歌よとさまざまの興を催し絲竹のあそび、唐土人の酒盛など頗るさわがしかりきと傳ふ。然るにこの櫻枯れて無くなりきといふ。

さて又世に長崎櫻といふものあるはこの日見櫻にあらで、往々八重一重交りてよき花にあらずと傳ふ。かくて長崎には櫻樹甚だ稀なりといふ。その故を問ふに、當時在留の支那人往々寺院に往きてその園中の花を見ては必ず大なる枝を折りて歸るが故に町家には多く植うることを好まざるが故なりといへり。支那人のかくするは其の花の能く開き美事なるを賞してすることにて彼れの本國にてはかくするが禮なりといひきとかや。あるべからぬことなるをかく口實を設けしものならむ。さるにても、その櫻を深くめでしことは推して知られたり。

長崎の地かく櫻多からねど今に傳はる名木あり。これを國幣中社諏訪神社の境内にある元日櫻とす。この樹は元祿年中よりの老木は天保の末頃に枯れたれど、名高き花なれば接ぎ傳へて今も存す。今の木は圍三尺、高さ一丈三尺許、齡八九十年なるべし。これは嚴寒の頃に花咲くによりてかく名づくるものにして古來名高きものなり。社記にいはく、

元日櫻トテ早咲キノ名木アリ。櫻ニテ衆ニ先チ梅ト等シク獨リ冬ノ寒サヲ冒シ、年ノ端毎ニ咲キ出デ花盛リノ節迄ハ葉少ク雪ノ積リタルカト珍ラシク見エテ、誠ニイミジクアハレムベキ花ナンメル。云々

と。かくめづらしき花なれば、昔より和歌にも詠ぜられたり。今境内にこの櫻を詠ぜる池原香穉の歌を刻せる碑を建つ。その面に刻する所次の如し

池原香穉翁詠元日櫻長歌並短歌

敷しまのやまとの國にさきにほふ櫻の愛はくにからしうるはしからし、花からしまくはしからし、たまちはふ神の心のとつくにになしとこそきけ、ここにのみありとこそきけ、その花のここたのなかに、まかやく玉圍山にうしはく神のいかきにあらたまの年たちかへる初春のむ月を時と淺みとりそめたる空を朝かすみたなひく空をのとけくもしめてさく花たくひなきはなのなかにもたくひあらめや、

初春のむつきを時とさき匂ふ
　花のこころぞうれしかりける。

池原香穉は長崎の生める學者にして、明治十七年七月に歿す。この碑を建てたるは大正三年七月なり。以上の碑の文は塚田十一郎氏の示す所なり。

隅田の堤

東京の淺草と隅田川を隔てて對したる隅田の堤をば向島とぞいふなる。ここも亦近世の櫻の名所として世に知られたり。此の地は古、在原業平が、「いざことととはむ都鳥」と詠ぜしによりて名高かりし地なるが、德川氏入國以來櫻の名所とぞなれりける。その初をきくに寛永年中德川四代將軍家綱この堤上に

風致を添へむとて常陸櫻川より移し植ゑたるに基づくとかや。さてもその後八代將軍吉宗の時に到りて吉野の櫻さては吹上の櫻苗などを享保二年と同十一年との二回に補ひ植ゑしより櫻の名所として著しくなりしものとおぼえたり。かくてその保護の爲に花守を置き、制札を立て濫妨を禁ぜしかば春の花見にはまづ向島といふ事とぞなりし。春風一たび、隅田川の上にわたれば、げにも爲村卿の

筑波ねの峯吹きおろす春風に
　隅田川原の花ぞほころぶ

とよまれし如く、花の眞盛となりぬれば、香雲天地を被ひ、遠近殺到して、人花に醉ひ、花人に醉ふの趣ありきとかや。されば江戸名所花暦にもいはく、

隅田川は江戸第一の花の名所にして此花は享保の頃台命に依て植し所の物にして今も枝を折ことを禁ずるは諸人のしる所なり。堤曲行にして木母寺大門に向ふ所左右より櫻の枝おひかさなりて雲のうちに入るかと思ふばかりなり。

と。この花はこの後水戸侯其の他志ある人々の企てによりて屢々補ひ植ゑられたりといふ。

飛鳥山の花

飛鳥山は武藏國北豐島郡王子に在る岡なり。これを飛鳥山としもいふ由は、元亨の昔豐島景村が領内の淨地を相して紀伊國の總鎭守熊野の神を勸請したりしときその境内の一として飛鳥王子といふ神をまつりし地なりしよりなりといふ。文明十年豐島氏沒落の後は世の變遷につれて祠もくづれ、雜木生ひ茂りて在るかなきかのはかなきさまに荒れはてにきとぞ。

寛永の頃德川三代將軍家光この地を過ぎり、その荒敗せる樣を嘆き、飛鳥の神祠を本社熊野神社の境内に移したりしかば、爾來飛鳥山は名のみありて祠なき地とぞなれりける。

この飛鳥山が櫻の名所となりしは八代將軍吉宗の時よりなりといふ。その

由來を尋ぬるに、吉宗將軍となりて後、王子の地に鷹狩せしとき、己が本藩の地なる紀伊の熊野神を勸請したる祠あるを見て、大に感じ、命じて社殿を改築し、附近を開拓し、吹上の櫻苗を移し植ゑしめたりといふ。この櫻を植ゑられし年は享保五年なりしことは德川實紀によりて知られたり。曰はく、

吹上の御庭に櫻楓の苗多く叢生したるを御覽ありて小納戸松平專助當恒によくやしなふべしと命ぜられしにより、別に花欄を設け懇につちかひ水そそぎけるにいくほどもなく其苗五六尺ばかりになりしかば、廣尾隅田川のほとり又は飛鳥山に植ゑられし、其中にも飛鳥山は享保五年九月より植ゑはじめ、凡そ櫻二百餘種楓百本松百本植ゑられしに、櫻はわきて年を逐て枝葉しげり、花の時は燦爛として美觀をなせり。

これより後、翌六年には千本を植ゑ、享保九年には三千本を植ゑつぎ、なほ修築怠ることなかりしかば、ここに新なる櫻の名所を現出したるなり。

享保十五年の比、將軍命じて曰はく、

此の山官地なれば、人怖れて花見に來る者も無し。かくては民と偕に樂むといふ聖人の敎へにもかなはず。今より後、庶人此の山を遊樂の地とせよ。とてまづ「その事始にせよ」とて近侍、坊主、陸尺等をここに遣して自由に遊樂せしめたりといふ。

かくて後元文二年三月十一日花の盛りを期し、將軍親ら觀櫻の行を催せり。從者は若年寄以下旗下家人數百人、一統に酒饌を賜ひ、將軍親から社內を徒步して櫻を賞し一日の淸遊を盡したり。この日の醉興のさまは、近侍三人が、將軍の命によりて淸人の獻ぜし服を着し、中にも成島道筑はその服を下賜せられ命により、その淸服のまま二里餘の途を家路に就ききといふにて推しはかるべし。

この日將軍更に命じて曰はく、「この山官地たれば、庶民なほ憚りて遊樂を恣にすることなきならむ。かくては衆と偕に樂まむと思ふ本意に適はず。今より後はこの山を別當金輪寺に下賜し、熊野神社の神地とすべし」と。

これによりて以後この地永く都人の最も自由なる花見の境となり、今に至るまで老幼醉歌亂舞の境として世に認められる所なり。そのはじめを思へばこれぞ吉宗將軍の賜なる。我が國に公園といふものの實ここに起れりといふべ

し。

元文二年八月廿五日將軍命じてこの山上に碑を建てて由緒を記せしむ。十一月成る。儒者成島道筑の撰幷書にして當時學者間に喧傳せられしものなり。この碑今なほ存せり。

元文四年勅使冷泉大納言爲久下向の時成島道筑、この山の櫻を折りて贈りしかば、いたく賞でて、

折枝の色香を見ずば飛鳥山
　花の所の春も知られじ

といふ一首の歌を酬いしが、この事をきき將軍いたく歡び、この花勅使の詠に入りし上は、古の名所に準じて然らむと仰せありきと傳ふ。爲久この花をながく忘れざりしにや、明年再び下向の時、一首の歌を贈る。曰はく、

さきぬとも告げぬ飛鳥の山櫻
　去年の言葉の色や忘れし

これ今年は飛鳥山の花を見ざるを遺憾とする旨を諷せるなり。道筑急ぎ金輪寺に意を傳へて一枝の花を得、これを進して品川宿にて一覽に供せりといふ。

飛鳥山の櫻はかかる優なる物語を傳ふる花にぞありける。さてもその庶民の行樂のさまや如何なりし。江戸名所花曆に曰はく、

王子權現より南の方芝山なり。八重一重の櫻數千株を植ゑさせられ、花盛の頃は木の間に假の茶店をしつらひて群集す。

その狂態を演ぜしは戲作「八笑人」などにても知られたり。

花の小金井

小金井の花の美觀は東國第一にして、吉野とその美を競ふに足ると唱へらる。この地は武藏國多摩郡小金井村にあり、舊玉川上水の岸の兩側二里餘に亘りて櫻樹を植ゑたる所にして花の眺めはげにも壯觀といふべきなり。或は、

開花のとき小金井橋のうへより是を望めば、岸を挾む櫻繽紛として前後つくる所をしらず。

といひ或は、

小金井橋より西は眼もおよばず、兩岸花咲つづきて白雲の中に遊ぶがごとし。實井橋、留橋、車田新田兩岸果てしなくみな櫻なり。

と江戸名所花暦にいへるはただその一斑を述ぶるに止まれり。

さてもこの壯觀はいつよりとかする。抑も玉川上水の出來しはじめを思へばその古からぬを想像しうべし。

玉川上水の開通せしは承應年中なり。當初はこの上水の兩岸に松杉等を植ゑしが、元文二年この地の代官川崎平右衞門定孝の企てによりて櫻を植うる事とはなりしなり。

この櫻を植ゑし山は文化に建てし碑の記によれば二の目的ありと見えたり。その一は卽ち「衆根深く堤の中に入りて長く壞闕の患無からむことを欲したり」と見えたり。これその深謀、櫻を植ゑば花見の場となり衆人到りて堤をふみ固むる便あらむとてなるべし。他の一は「且又吾東方の醫家一二方函、櫻筥及び花を總べて解毒の劑に用ゐる。則水毒も亦解すべし。」といふにあり。

櫻が水毒を消す効ありや否やは醫家ならぬ吾人の知る所にあらねど、古來櫻を井の側に植ゑしことは歷々として證あるのみならず、全國に「櫻井」といふ地名の少からぬにても知るべし。

さてもこの時に植ゑし櫻は何處よりその種を傳へしぞ。碑記には「芳野及び諸邦の名種を採る」と記せるが、世に傳ふる所は享保年中將軍吉宗命じて吉野山の櫻と常陸櫻川の櫻とをうつして一萬餘株を植ゑたりといふ。これ東西の名におふ花を集め植ゑたるものなりとす。この後も亦屢植ゑ繼ぎしものと見え、樹の大小一定せねど、概ね大木となりて見事に生長せり。

この花寛政の頃まで世に知られざりしが、享和の頃より漸くその名世に聞え、文化二年三月に佐藤一齋が、林大學頭衡と共に之を觀むとて赴き、觀櫻記を作りて之を賞美したりしより頓に名聲を天下に轟かし文人墨客爭うてこれを賞するに到れり。これ人と花と相待ちてこの盛大を致ししものなりといへども、なほその源なくばあらず。蓋しこの頃、その植ゑはじめより後六七十年なれば樹老い枝榮え花の盛は壯觀となりしが故にもあらむか。かくて文化七年に到り

ては武藏野八景の一とかぞへられて碑を建つることとなり、天保年中には將軍家齊の遊覽ありて東國第一の名と實とを完くするに至れり。

上に述べし隅田の堤といひ、飛鳥山といひ、小金井といひ、いづれも八代將軍の保護奬勵によらぬはなし。幕府中興の英主は又わが櫻の保護者たりしなり。人は武士、武士の統領たる將軍と花の君たる櫻とげにも奇しき緣なるかな。

花見の御幸

これより先京都にては享保七年三月十三日靈元法皇修學院離宮に御幸あり。その次いでに一乘寺、曼殊院にも御幸ありきといふ。月堂見聞集に曰はく、

三月十三日法皇御所修學寺へ御幸。行裝如二去年一。但御道筋荒神口より川原表へ御通り、御所司代御供。出御還御、此外町筋自身番御觸等同前。

とあり。これ去年九月廿七日始めてこの寺に御幸ありて紅葉を賞せられしが、本年は花の時を期して櫻を賞せられむが爲とぞきこえし。凡そ花見の御幸は應永年中かの北山殿行幸の事ありし後絶えたりしが、今茲にこれを再興せられしなり。花のめではやさるる時はかくの如く東西時を同じうせり。大平の世相櫻花を以てトすべきに似たり。

佛行坊の花見

佛行坊の僧都名は敬己。もと比叡山無動寺善住院の住職なりしが中年に院を辭して、坂本に隱居し、律儀を保ち專心佛事を行へり。しかも風月をめづる情やまず木草の花を愛するのみならず、俳諧をも好み、その道にては「都不覺」とぞ名をつきし。

或る年の三月、比叡山の僧多く打ち群れて佛行坊が庵を訪ふに、櫻盛なりしかば、皆々此をめでたれば、此の花のうつろはぬ間に今一度見に來給へかしといふ。衆僧その約を忘れず、他日又誘ひつれて行きたるに、ひねもす唯茶を出せるのみにて何のもてなしとてもなし。長き日も暮れかかりければ、さるにても今日は

花見として招き給ひしものなれば、ただにはあらじと思ひしに、思ひにたがひたる事なりといひしかば、佛行坊顔をしわめて曰はく、「さてもにがにがしき山法師かな。かかる花を見ながら尚心の飽き足らで飲食を求むるやうやはある。かく足る事を知らぬ心にては山王や大師の冥加もよもあらじ」と戒めきとかや。

げにも面白き花見かな。出家脱俗の花見はかくこそありたけれ。さるにてもかの花の興もさめ果ててひだるき腹をかかへつつ、さしも険しきかの坂をすごすごたどりかへりけむ賣僧の後姿の如何にをかしかりけむ。

花の一枝

原雙桂は京都の人。伊藤東涯に學びて儒門の一奇傑たり。かつて吉野に遊びて花を賞したりしが、恍惚三日去ること能はず。終に一枝を折りて携へ歸りしが、花散りて後も之を措く能はず。杖につくりて終身これを持てりといふ。

又黄金もて櫻花を彫らしめたるを大小兩刀の柄の飾に用ゐたりといふ。その櫻花に心を入れたること、殆ど痴に似たりといふべし。しかも、かれ學の上に一隻眼を具するもの、尋常學士の比にあらざりしなり。

池田正式は郡山藩の臣なり。世に俳諧を以て知られたり。かつて吉野の花を見むと欲すれども、公事にかかづらひて間近き境なれども遊ぶこと能はざるを嘆きたり。侯これを聞きて憫みて休暇を賜ふ。正式且つ感じ且つ悦び、遂に往いて縦に觀たりしが、歸るとき一枝の花を携へ到りて之を獻ぜり。侯悦びて和歌を賜ふ。其歌、

あし垣の吉野まぢかく家居して
　とふべき花にとはるべしとは

風流の譚これに盡きざるべし。今儒家、俳人共に一枝の花に深き心を寄せたるを感じてここに之を傳ふ。

大雅堂が花見

池無名、大雅堂の名を以て世に知らる。京都の人にして本邦南畫の大家たり。性恬淡にして寵辱を以て心を動かさず。かつて大阪に行かむとて家を出でけるが、その妻玉瀾見れば夫は筆の包を忘れて行けり。さてはとて急ぎ追ひ行きて建仁寺のほとりにて追ひつきて筆を忘れたまへばとて渡せば、「よくぞ拾ひて賜はりし。忝し」とおしいただきてその己が妻なるに心づかざりきといふ。

性旅行を好み、富士山に登ること三度、加賀の白山、越中立山にも登り、みづから三岳道者と號せりといふ。その第三回の富士登山ぞ面白き。頃は寶暦十一年、西國の武士の江戸に赴くもの眞葛原の大雅が室をおとづれて辭しかへるを送り出し、道すがら富士の物語を爲しつつそのまま駿河まで同行し、その時は一人にて富士山に登りきといふなり。その風流おもひやるべし。

大雅堂或る時大阪にあり。人に頼まれて大和屋といふ文字を看板にかきはじめしが、いつしか姿は見えずなりけり。さては何處に行きしぞと人々案じたりしに數日にしてかへり來りぬ。如何にせしと問へば曰はく「大和とかきたれば、芳野山の花盛を思ひ出でたれば、花見て來たり」とてやがて「屋」の字を書き加へきといふ。われこの物語の實否を知らずといへども、その人の面目躍如たるものあるを覺ゆ。かかる人を得てこそ花もはえある心地したりけめ。

太申櫻

寶暦の頃江戸三十間堀に材木商を營みし和泉屋甚助といふものありき。姓は藪内といひ、號を太申といひき。家富みて、風流を好みしが、その弊は虛名を賣るに汲々として笑を後世に殘せるもの少からず。或はひそかに時の書家烏石葛辰に千字文を書せ、之に太申書と落款して墨帖として世に賣り、或は太申の字を用ゐて紋として布帛を染め之を太申染と名づけて、吉原の妓に與へ、又芝居役者中村傳九郎に與へなどして之を弘めんとせしなどさまざまに心を擂きしが、

多くの黄金を費すのみに止まりて、世の物笑となりぬといふ。この太申さまざま虚名を賣らむとて企てしうちに、龜戸天神に連歌堂を寄進し、高辻中納言の額を申受けしこと、淺草觀音の境内に櫻を植ゑしことは虚名の爲とはいへ、傳ふべき事といふべきなり。

さても太申は金龍山淺草寺の境内に多くの櫻を植ゑて寄進し、之を太申櫻と名づけて例の虚名を博せむとせり。かくて彼は芝居に賴みて太申櫻といふ淨瑠璃を作らせ、又道中の雲介に金子をあたへて「お江戸の、ナ、太申さまは、さくらがおすき」といふ諸をうたはせしこととありとも傳ふ。又時の儒者井上蘭臺に太申櫻記といふ文を草せしめ、之を石に刻して觀音の境内に建て、之を梓に壽して世に頒ちたり。その文に曰はく、

太申櫻記

太申乎太申乎、當時風流皆歸乎太申、而太申名聞於世矣。太申豪爽高朗、任氣喜俠、搢紳先生莫不稱太申才幹勇力焉。太申素喜詩賦、然謂蕞爾小技壯夫不爲也、太申濶達皆此類也。其客造予盧曰、子獨不聞太申風流乎。某昵於太申有年矣、然猶未偏窺其風流也。某等所觀蓋特小者耳。侍兒歌舞優倡爲戲而前雜座宴飲娛目歡心之物備矣、北里佳麗風流尤甚、太申爲之翩翩未厭也、好事者其形而傳之又作詞行於世、太申風流愈益聞於時焉。太申愛花樹蓋其所愛及此其風流之餘也。花樹盛開而發造化之精者爲、太申邪非邪、吾大東神明之域陰陽和調雨露煦育造化之精封旗花樹事美於斯矣、其溫柔閑雅之狀亦惟君子所居而地氣敦厚使之然也。太申花下之遊張幄設座絃歌如沸風流極矣、其樹以千數郁郁斐斐焉諸佳麗人與花成群媚於其富厚也、此乃太申春時風流。其他富麗散財巨萬、無冬無夏傳畫作夜亦何限。然而世人言風流必言太申、言太申必言花樹、未嘗不慕太申也。諸寺觀奉詞者莫不皆栽櫻樹而祝太申蕃社老壽焉。優倡爲戲必承太申文意爲其衣帶以象之、此亦太申之優孟固其所也。織染丹漆之工爲太申成則少年競慕而服焉。乃今共苑樹且尚如此、太申名聞於世而人莫之禦也。余聞之喟然歎曰、客爲太申盛惟一時風流而顯其侈靡又焉是道邪。唯太申花樹足以歡其風流之遠也。王子猷之竹、陶弘景之松、姑毋論已。抑亦丞相松梅中郎杜衡此其所愛則後人思之愈深也。數百載下太申

花樹其能及此乎。太申東都人名信熊字恒夫姓藪内氏太申其別號也。と。その石、明治時代まで淺草寺境内に存せしかど、今その所在を知らずといふ。

太申の虚名を好むに至りては、われ復、卑めむと欲して、終に卑むること能はざるに至りぬ。それ狂人を追ひて走るの徒はやがて狂人ならむ。堯舜を學ばむものはいつしか、堯舜の徒たらむこと必せり。堯舜にして之を學ばむ徒をしてその徳に薫化せしむる能はずば、何の聖人の徳あらむや。櫻にして之を愛するに擬する徒をして信に愛するに至らしむるを得ずば豈に花の王たるの徳ありとせむや。この故に余は太申が櫻の事を以てここに載せて世に傳ふるを恥ぢとせず。昔時孝をよそひて賞を得むとせしものを褒美せし名侯ありきと傳ふ。わが志まさにここにあり。太申が學わが櫻を愛するに至りて美化せられ、その虚榮心も亦わが櫻を愛する時には淨化せられて眞の三昧に入りしなるべければなり。

蘭山の花鑑と圖南の花錦

小野蘭山は近世本草學の大家なり。通稱を喜内といひ、名は職博、字は以文、朽瓠軒と號せり。京都の産なり。學を松岡恕庵に受け、出藍の譽あり、漸くにして盛名一世を壓するに至りぬ。寛政十年、齢七十に達す。百百法眼俊道即ち筵を東山に張りてその壽を賀す。蘭山十品考を著はして之に酬ゆ。この年十月幕府蘭山を徵す。蘭山即ち翌年三月江戸に來り、醫官に列し、醫學館に於いて本草を講ず。幕府之を遇するに御納戸格を以てし、七月はじめて將軍に謁せり。文化七年、八十二歳にて歿せり。その著す所多きがうち花彙、本草綱目啓蒙、衆芳軒雜錄、朽瓠子格物徵等を著しきものとす。

寶暦癸酉三年四月蘭山正に二十五歳。師說によりて花の名を綴り、二十一首の和歌を詠ず。名づけて花鑑といふ。曰はく、

山櫻ひとへにさきていろたへの花のかずそふみよしのの春

咲にほふ花の中にもさきがけはひがんのやへにさける熊谷
枝たれてさく彼岸こそ糸櫻くゝりて白く見ゆる有明
をそく咲葉にて見るべき鹽竈はしは打よれる八重の小輪
大輪の逆手櫻のいろなくて五つはとのよむつは芝山
枝ごとに單まじはる桐が谷八重のみさくを廊閒とぞしれ
八重に咲ちらでうつろふ江戸櫻かさね富るは法輪寺なり
大原の寂光寺なる花はこれ外に稀なる匂ひぞふかき
伊勢櫻おはりにあふて早咲や紫の八重そこ白き花
千重の菊姿稀なる楊貴妃のふかくぞもゆる火櫻の花
花白くひとへに咲て綠萼にうつるを人は淺黄とぞみし
黄櫻といふは茶色に大輪の八重に開ける花とこそきけ
秋の野にさける虎の尾それならではごとにしげき上溝の花
陸奥の南殿はふげんみやこにはただうばみぞをさしてこそいへ
中輪の淡紫の八重ざくらこれを南殿といふ人もあり

九重の御はしの花はむかしより吉野鎌倉たかひにぞ植
普賢象花の中にもあるものを葉なくぞさける姥櫻かな
ひとへなる若木の櫻む月より秋まで絶ず咲もめづらし
千本よりかずもすくなき兒ざくらともに李の花にいとひとし
彼岸伊勢よし野芝山殿櫻桐ヶ谷江戸法輪寺とらの尾
ひと品を實うへにすればいろもかもかはねも名さへかはりこそすれ

詠ずる所の櫻の品種三十。而してそれらが園藝品種なることをその最後の一首にて明示せり。彼は百七八十年の昔に既にこの智識を有せりしなり。

蘭山の同門の士に淺井圖南あり。通稱賴母、名は正直、敬齋と號せり。名古屋の人にして屋張藩の儒醫たり。本草に達し、又畫をよくせり。天明二年八月、七十七歲にして歿せり。圖南又櫻花三十三種を百三句の長歌に詠す。名づけて花錦といふ。曰はく、

紅の　一重のはなは　小ざくらや　枝は柳の　いとざくら　はみるはも
なき　うばざくら　八重さきがけは　くまがへよ　底の白きは　伊勢な

れや　しぼめる花の　五つむつ　たれつつ蘂は　ふたつみつ　青芽まじれる　普げんこそ　陸奥國なる南殿ぞよ　もゆるばかりの　緋ざくらと薄けはひせる　楊貴妃は　としに菊にや　たぐへまし　大輪の花のかずく〳〵を　ひとへになして　いとくゝり　かこと譲れる　小手まりや匂ひざくらは　をろそかに　白き一重は　山ざくら　さらにしげきはよしのやま　睦月に咲て　花までも　たへぬ若木は　いとけなく　李に似たるちござくら　五葉つくりの　とのざくら　猶おぼいなる　しばや　まや　六出にひらく　わしの尾よ　みどりの夢に　うつるにぞ　浅黄とはみし　さかてとは　遠くみやれば　酔るなり　たれかはめでん　うはみぞは　かゝげし花の　穂をなせる　これぞ南殿や　いぬざくら　この　かへ名とや　樺ざくら　花びら細き　眞ざくらは　七重や八重の　江戸ざくら　莖みじかにて　かさねとみ　ちらで移らふ　いとめづらし　似て大なる　法輪や　ひとへもまじる　きりがやつ　すこしゆづれと　まじはらで　江戸にたぐふは　樓間なり　ほの〳〵みゆる　有明は　ひとへに咲ぞ　げにおぼき　はまで見るべき　しぼがまは　しは打よれる花にこそ　立枝あらけき　とらの尾は　本末わくる　ひまもなし　直ならぬえだ　ながきくき　これぞ府君よ　二三十　千重にかかれる　提燈も　大出の茶色　黄ざくらや　夫と名を得し　そのたねも　うゆればいづれ變るとをしれ。

也有が飛鳥山賦

飛鳥山の事既に之をいへり。この地、江戸の春時近郊櫻の名所として春時都人士遊樂の巷となりて賑ひし事は今更いふまでもなかるべし。ここに天明の俳文家として名高き也有が飛鳥山賦あり。曰はく、

けふはこの事かの事にさはる事。あすは飛鳥山の花みん〳〵と心に過る日數もやゝ彌生の廿日あまり、尋し花は名殘なくちりて染かはる若葉の其色としもなきを、春を惜む遊人は我のみにもあらず。爰に酒のみ、かしこみ

うたひて、此夕幕に歸るさわするゝも、中々心ふかきかたにおもひなさる。

ちり殘る茶屋はまだあり花のもと

山下千里のまなじり、さはる物なく、うらゝらと霞わたれる田野村落の詠えならず。きせるをくゆらすこと暫時あり。

雲雀より田打へ遠し山の上

殘花を慕ひ、行く春を惜む情紙上にあふれたり。これまことに古今の通情といひつべし。

也有は横井氏、通稱孫兵衞、名は時般又幷明といふ。也有はその號にして又暮水とも號す。尾張侯の世臣にして祿千二百石を食む。大田南畝がものせしその傳に曰はく、

少壯留意武事無二技不一通。受二學侗齋小出氏一亡レ論二經史子集野乘裨史一、涉獵殆遍賦レ詩屬レ文、又咏二和歌一篤好二俳諧連歌一最善二戲文一偶爾所レ筆傳稱二善謔一亦寓二微意一云爾。中歳勇退致仕卜二居于城南前津蕭然如二一野翁一。天下好二俳諧連歌一者無レ不レ知二尾張也有翁一。所レ著有二蘿葉蟻封二集及鶉衣一以二天明三年癸卯六月一終、歳八十二、葬二藤瀬西音寺一。

と。實に尾張藩の參政横井孫左衞門を知る人は多からざりしならむも、鶉衣の著者半掃庵也有の文名を知らざる人は稀なりしならむ。彼は實に俳文に於いては比類なき大家なり。その文溫雅にして滑稽に富み、往々諷刺を寓し、しかも、苛刻卑俗に陷らず。眞に君子者の諧謔といふべし。狂歌狂文の鬼才大田南畝、そのものせる借物辨を讀みていたく感歎し、生前交を結ぶこと能はざりしに關せず、その文集「鶉衣」を刻して世に行へり。

也有が文中櫻に關するもの多からず。蓋し、之を諧謔の材料に供するを得ざりしが爲ならむ。ただ一首「櫻の句小序」と題するものを見る。曰はく、

松井氏壽庵の主のここに千もとの櫻を植る心ばや

只遊人の興を誘ふのみならず、おのづから精舍にたよつて佛緣をもむすばしめむとするにあり。剩四方に櫻の句を請集て永く寶前にとどめむとす。其志なるに及て予に小序の需あり。我きく、後京極攝政殿のうたに、むかし誰かかる櫻のたねをうゑてよしのを春の山となしけむと。是を以てしる、

萬世の後も花見む人の植にしもとのぬしを慕ふことを。よしのにはその人を知らず、ここには其人いちじるし。されば不朽の名をううるといふべし。我が短才なる他のいふべきことを知らず。只此一句を擧て願主の勞の後の世に傳てむなしからざることを賀す。是を以て小序といはばいふべし。

今植る櫻や世々の春の雲

これによつて見れば、當時尾張に松井壽庵といへる愛花の風流士ありしを知る。

花顚三熊思孝

古、清少納言は「さくら」をば「なでしこ」「やまぶき」などと共に「繪にかきておとるもの」といへりき。げにも櫻花は箇々に繪にかきては實物よりは劣る觀をなし易きものなり。然るに、ここに、その劣るべき櫻の繪をばおのが一生の事業とする花顚こそ出で來たれ。花顚とは何ぞや。古、白樂天の詩に酒顚といふ語あり。顚は癲なり。癲狂なり。花顚は花の氣狂なり。自ら稱して花顚と號す。その人、眞の昌平時の一痛快男子たり。花顚か、花顚か、わが櫻の會は眞に花顚の會といふべし。果して然らば、吾人は先づ祖たる花顚を忘るべからざるなり。

花顚は三熊氏、通稱主計、名は思孝といひ、介堂と號す。京都の人、御室の家臣三熊藤八郎の二男なり。西鳴瀧に住す。幼きより畫を好み、肥前長崎の畫人月湖の門に入り、南蘋風の畫をよくす。業成りて自ら思へらく、「凡麟鳳および龍虎獅象のごとき、見もしらぬものをゑがくは唯一旦の眼をよろこばしむるのみにて、世に益なし。古き代の公事民間の有さまをうつし傳ふるやあるひは今の世の人物調度眼にふるる物を圖して後に示すこそよからめ」とて、專ら是をつとめたり。

思孝の上の思想の事實となりて世に出でたるは有名なる近世畸人傳なり。この書は天明八年になれるものなるが、その創意は思孝に出づ。思孝思ふ所ありて近世人の傳ふべきものの模像を畫き、閑田盧主人伴蒿蹊にその傳をものせ

むことを請ひしに蒿蹊かねてその志ありければ、之を諾し、力を併せて成りしものなり。その書すべて五巻、傳ふる所五十三人、附載する所若干。思孝また續編を撰むことを思ひ立ち、こたびは自ら傳をも起草せり。思孝晩年に及び、病にかかり、但馬の溫泉に病を養ひしが、その寓居に於いて草稿を整頓し、寛政五年冬一旦成稿せしを、翌年春京都にかへりて後之を修理せしが、八月十三日その稿本を蒿蹊に託し、十六日終りぬ。時に年六十五。蒿蹊即ち之に補訂を加へ思孝の妹露香その畫を補ひて世に公にしぬ。所謂續近世畸人傳これなり。その書同じく五卷、傳ふる所八十六人、附載する所若干、附錄として前編に補ふ所五條あり。思孝の特行世に卓立せりといへども、その傳ふる所多からずといへども、その花に顚するに至りては自ら傳ふる所少からず。

思孝花を好む。この故に花顚と號す。かつて思へらく、

櫻は皇國の尤物にして異國にはなし。是をゑがくは國民の操ならむ。はた枕の草紙に畫に書き劣りするものにさくらをのせたるはむかしよりよくゑがく人なかりけるにこそ、いでこれをつとめむ。

と。かくて彼は生ける花を描寫せむと企てしかば花時には屢吉野山に到り、又諸の花ある所には遠近を論ぜずして屢訪ひぬ。すなはち花時にはその寫生の爲に殆ど寢食を忘るるに至りぬ。かくの如くにしてはじめて花顚の實を見るべし。その寫すこと年を積むにつれて其の妙を得るに到りぬ。描法雅致に富み、氣韻掬すべし。識者從來未だかつてかかるものを見ざりきと賞す。天明六年京都文錦堂よりその作れる櫻花袖鑑といふ一枚繪を出版せり。これ當時の京都の花の案內圖にして、先づ「初櫻」と題して熊谷、小櫻、江戶彼岸、等八種をあげ、次に「花盛りの時」として、山櫻二種、桐谷、江戶櫻等九種をあげ、終に「遲櫻の類」として、普賢堂虎の尾有明等七種をあげ、一々畫によりて之を示せり。寛政五年花顚また三十六品の櫻を描き櫻花帖と名づく。六如上人之に題して曰はく、

梅竹蘭菊、傳照遁眞、擅名當時、固不乏人。櫻花乃奇種、我邦之最所宜殫精究巧、而振古未聞其人。穠者豔過肥、疎鬆者太瘦、忍使國色死于拙工乎、不亦寃乎。

富麗中一段氣韻爭豪髮於環旋之間者舍三熊生而將安求焉。余曾題其幅曰、

櫻花已來凡馬空。具眼以爲信然。嗚呼千古年來、天機之妙獨儘此花者一旦

而逝出。生之貧且病豈或屬造物之怒與。少陵所云、但看古來盛名下、終日坎壈纏其身、吁亦異哉。雖然齊侯千駟身後灰滅、此雖小技、名足千秋、我已保之今日。三熊生亦可以少慰矣

と。眞にこの言の如く花顚の名は櫻と共に朽ちず。わが櫻の會と共に益々盛ならむとす。花顚また「吉野の栞」といふ書一冊を著せり。寛政十三年に版せり。これ花顚の紀行にしてかねて遊覽の栞とせしなり。これによりて當時の吉野の花の盛觀をしのぶべきなり。

花顚の花に熱中せること此の如し。而して歿するに臨み、遺言して曰はく、

たのむぞよ析骨にして櫻の木

と。この析骨とは何ぞ。定めて佛家に說ある事ならむと諸の學匠に問へども知る人なし。ここに於いて知己の人々東山にて荼毘に附せし遺骨をばただちに携へて嵯峨に行き、となせの瀧の前の流に沈めぬ。此處は櫻のいとおもしろき所なれば、同じ河の中にもここよかめりと常に戲れいひしによるなり。かくて又日野の外山に平生用ゐたる禿筆及びその書畫の反故をうづみて一樹の櫻を栽ゑ、一片の石碣を建て六如上人の銘を錄す。これその妹露香の素願にして、山縣蕪亭共にはかりてその志を遂げしめしなり。花顚たる所以ここに至りてその極に達せりといふべし。花顚なるかな、花顚なるかな。

花顚の女弟露香また畫をよくし、好んで櫻を寫生せり。その圖する所往々世に傳ふるがうちにも兄の櫻花帖の世に稀なるを惜みて、之を臨寫して二帖を作り、一を紀州侯に呈したりといふ。その櫻花帖今に傳へたりや否や。露香又別に三十六品の櫻花を寫せる帖ありて醍醐寺又吉野山の喜藏院に藏せり。寛政の末に歿すといふ。享年を知らず。露香の門人に織田瑟々女あり。またよく櫻の模寫につとめたり。

次に露香の描きたる櫻花帖のことの大田南畝の一話一言に載せたるものを摘出して大方の一粲に供す。曰はく、

植木八三郎（藝者）京都在番より携へ歸し一帖

櫻花帖目錄

一外題　　岩倉三位殿

一畫題　花山院大納言殿
一かな序　廣幡大納言殿
一かな跋　芝山權中納言殿
一眞字跋　林泉院六如上人
一かな序　閑田子伴蒿蹊
一眞字跋　皆川愿先生
一櫻花銘　畠中胴脉先生
一眞字跋　唐人錢宇文撰
　同　陳國振書
一三十六品　三熊海堂思孝妹
櫻花畫工　露香女
　以上

一櫻花模寫三十六品者京師三熊海堂本朝の櫻花のまことをゑがきはじめたり。海堂はもと御室の家臣三熊藤八郎の二男にして、弱冠をのづから雅韻あり、仕官をいとひ生涯妻をも具せず。常に諸州を巡歴し諸畫に妙を盡し、又文學も通ずる也。海堂ひと日思ふに、我國櫻を以て諸花に冠たり。しかはあれど本邦古今の畫師櫻花を畫きたれどもただ婦女の翫びのみにして其眞を得ざることを歎き、又松岡玄達先生の櫻編を見るに甚だ多端にしてわかりがたきを深く考へ、凡四十年の春毎に京師はさらにして遠き國々へまでもよく櫻花の正僞をあきらめ、彼は何々のみはへこれは何々の變化、傍ら晴雨寒温を以て花の狂ふとはやきと遲きとをもよく〳〵考へ、歳々之を詳かにわかち、ただ櫻畫の一すぢに心をこめ都て三十六品を撰びて、櫻編の繁きを省き根本を正して世に名をしらるる者也、ここにおいて世の人これを賞翫しこぞつてこれをもてはやす、其妹露香女其畫法を傳へつぎて櫻畫は兄の海堂にまされり。其露香女も寛政の末に死し今其畫法を傳ふるものなし。をしむべし。はた露香在生三十六品を畫がきて世に全うするものは紀州侯へ一帖奉り、幷に此帖と二品より外に我國になし。又此櫻畫帖はただ人のもてあそび物ならず、みな正花を以てうつし得たれば春毎に櫻を愛する人の鏡とも見るべし、

海堂幷に露香の小傳は畸人傳續畸人傳に委く見えたり

書三熊露香畫櫻花三十六品帖

三熊氏、以其兄平素好描櫻花、因傳其法、亦臻巧妙、爲世傳賞。頃又畫櫻花三十六品、各細盡其形狀、以爲一帖。携以詣予、請作題辭。予嘉其以閨閣之質、而善識其棣萼之美也。因爲書。

寛政丁巳季冬廿九日　　皆川愿題

櫻品甚多、今擇其尤者三十六種寫生、以爲一帖、三熊氏女露香所製也。其兄思孝以畫櫻擅名。露香常侍側、遂學得其法。思孝沒後、世人視露香、猶其兄也。思孝無兒而有若妹亦可以無憾焉。

六如杜多

三熊華顚子此花におけるあまり畫に書おとりすてふふることを口をしとてさま〴〵心をつくし、其まことを寫をしえり。されば人も又たぐひなきをめでてきそひてこれをこふに、いかゞはせん年比なやみてつひに泉にかへりぬるは時かも。こゝに醍醐の山縣蕪亭ぬし親しきあはひながら之を得ざるをしみて其いろとなる露香女をして此帖をうつさしむ。常にこのかみにとひきゝてやゝ趣をえたればとてさてしも端にことくはへんことをもとめ給へれば、たゞありのまに〳〵しるす、おのが辭の花なきはうつしゑの花にけおとされてともみゆるされなんかし

洛南閑田庵嵩蹊書

櫻畫三十六品者兄三熊思孝圖也

丁巳春　　露香女臨寫

櫻畫三十六帖は故三熊思孝の圖にしてそのいろと露香女のうつせる也。このかみの筆の匂ひをとりつたへてよくそのをもむきをえたり。此畫にむかへば陽春の心地せらるゝのみならずよきてふけともあつらへすあすは雪とぞともかこたずいつも心のどかなれば津の國の難波のうらみなきものといふべし。されば名だかき人々の唐のやまとのことのはを加へてそうくわんかぎりなし。愚老にもことがきせよとある人のもとむるに辭すれどもゆるさゞれば、おもひいづるまゝをつくろはずして禿筆をはすることとしかり

前權中納言持豐

覃云縉紳不事國文如此其文宜在嵩蹊下

櫻華叢　通齋書

雪とよみ雲と詠めしは櫻のほまれにして、世々に名だたる山多しといへども今更述るにいとまあらず。爰に醍醐燕亭といふ者あり、花を愛すること尋常にすぐれて咲を待散ををしむ、志四時あらむことを欲すれどもあめ地の氣候かぎりあれば力なくや侍らん。さいつ頃三熊思孝といふもの花を愛して四十の春を送りぬ。ことに丹青をこまやかにして我邦に始て櫻の三十六品をわけ寫す。其いもうと成者又よく畫法を傳ふ。燕亭彼品々を畫がかしめ一帖とす。畫中の妙艶思孝が遺力顯然として匂ふが如くるめるがことし。かゝる色香も人しらぬ谷の埋木と朽ん事本意なければあらかじめこゝにしるしぬ。

うつしみる心の色のあさからぬ
　花はちとせも香ににほふらし

ひつじの春　亞三台源前秀

朝日に匂ふ山櫻花

わが國と櫻とは形の影に於ける如きものなり。わが皇國の學をなさむもの誰か櫻を忘るべき。近世國學の勃興は、國家の隆運に赴きし結果とも見ゆるが、その頃より櫻に關しての研究の著しく興れること亦偶然にあらざるべし。

加茂眞淵は國學四大人の第二とし、又歌人として盛名世を壓せし人なり。かつて櫻を詠じて曰はく、

うら〳〵とのどけき春の心より
　にほひ出でたる山櫻ばな

又吉野山の花を見てよめる歌の反歌に曰はく、

もろこしの人に見せばや三吉野の
　よしのゝやまの山ざくらばな

と。その櫻を春の心より生れたりとし、山櫻を大和心の象徴とせる思想、以て見

るに足るべし。

この思想はその門人本居宣長に至りて一層發揮せられたり。鈴屋の大人宣長の事蹟學術は人皆知りぬ。われ亦ことごとしく之を論ずるを要せず。われはただ伊勢松坂の人にして、國學四大人の中堅として、鈴屋大人の門下天下に治かりしことをいひてやまむのみ。この人享和元年九月、七十二歳にて終りぬ。

宣長は國學者としてわが國史上重大なる地位に立つ人なるが、わが櫻史に於いても決して逸すべからざる人なり。

宣長の父小津三四右衛門定利はじめ子なかりしかば同族定治を養ひて嗣子とせしが、なほ實子を得まく欲りしかば、大和國吉野の水分神は世俗に子守明神と唱へ、子を與へて守り給ふ神なりといふによりて此神に祈りて男子を得しめ給へと願ひしかば、生れしなりといふ。彼かつて詠じて曰はく、

みくまりの神のちはひのなかりせば
　これのあが身はうまれこめやも

明和九年、吉野の花見にとて出立ちし際の紀行を菅笠日記といふ。そが中にそのかみの事を委しくかけり。かくて彼生れて十一歳にして、父を亡ひしかば、母なる人十三歳の時にはその願はたさむとてここに詣でしめしが、この明和の旅はそれより三十年を經て彼四十三歳の時にぞありし。この菅笠日記よ。げに宣長が、その友五人と打つれて、吉野の花をめでむとて、三月五日に松坂を出で、八日に吉野に着き、道々も花をながめ、吉野にては口の千本より奥の千本までくまなく求め、めぐりし折の日記なりけり。かれは行く〳〵風雨にあひては

春雨にほさぬ袖よりこのたびは
　しをれむ花の色をこそ思へ

と心もとながり、名もなき里の絲櫻にめでては

絲櫻くるしき旅も忘れけり
　立よりて見る花の木蔭に

とうたひ、多武峯に思ひもよらず花のさき匂へるを見ては、

谷ふかく分いるたむの山ざくら
　かひある花のいろを見る哉

とおどろき、さて吉野に入りて、はや青葉になりぬるに口をしく思ひしかど、分け入るにつれて奥ある花はなほさかりなるに心おちゐて、

みよし野の花は日數もかぎりなし
　青葉のおくもなほさかりにて
高根より程もはるかの谷うけて
　立つづきたる花のしら雲

とうたひしが、家にかへりつきては、

ぬぐもをし吉野のはなの下風に
　ふかれきにけるすげのを笠は

とうたひけり。

櫻の山にます神に祈りて授けられし子なる宣長はある意にて櫻の化身といふべきなり。されば彼の歌に文に櫻に及べば、一しほ力を込めてうたひもかきもせるはさる事にて今一々之をあぐるに堪へぬがうちにも、傳ふべきは吉野百首と枕の山なり。吉野百首は寛政十一年春吉野山に至りし折の詠なるが、今そを委しくいはむ遑なければ、枕の山にうつるべし。その歌にいはく、

今年秋のなかばも過ぬるころ、やう〳〵夜長うなりゆくままに老のならひのあかしわびたるねざめ〳〵にはそこはかとなく思ひつゞけらるゝ事の多かる中に、春の櫻のことをしも思ひ出で、時にはあらねど、此歌よまむとふとおもひつきて一ツ二ツよみ出たりしにこよなく物まぎるるやうなりしかばよき事思ひえたりとおぼえて、それより同じすぢを二ツ三ツあるひは五ツ四ツなど夜ごとにものせしに、同じくは百首になして見ばやと思ふ心なむつきそめて、よむほどに、ほどなく數はみちぬれど、此何かしをおもふとて、のどかならぬ春毎のこゝろのくま〳〵はしもつきすべくもあらで、猶とさまかくさまに思ひよらるゝはかなしごとどもをうちもおかでよみいでよみいでするほどに又しもあまたになりぬるを、かくては二百首になしてむとさへ思ひなりて、なほよみもてゆくまゝに、又其數もたらひぬれば今はかくてとぢめてむとするに、又しも數おほくつもりてすずろにかくまでには成ぬるなり。

かくて之を「枕の山」と名づけたるは、

いねがての心のちりのつもりつつ
なれる枕のやまとことのは

といふ歌にて知るべし。時は寛政十二年十月十八日なり。この「枕の山」は題して櫻花三百首といへれど、實は三百十五首の詠をのせたり。そのうち二三をあげむ。

鳥虫に身をばなしてもさくら花
さかむあたりになづさはましを

日ぐらしにみても折てもかざしても
あかぬ櫻を猶いかにせむ

春ごとににほふ櫻の花みても
神のあやしきめぐみをぞおもふ

この「枕の山」を著者の手づから清書して、紀伊侯に奉りし本、後世に出で、今まさしく安倍午生氏の許に傳へられたるをわれ親しく見たり。櫻の爲にはこよなき記念なりと思ふ。

宣長かつて、おのが像をかけるうへに門人の請ふままに題して詠ずらく、

しきしまの大和心を人とはば
朝日ににほふ山櫻ばな

これかれが心をさながらに寫し出せるものにして宣長その人が歌と姿をかへたるものともいひつべく、又わが大和心の姿を耳にきかせ目に見せむとて詠じたるものといふべく、千古以來人のいはむとしていひ得ざりし所、しかも亦櫻の爲には之にすぎたる歌やあるべき。わが大和心の眞髓を捉へ得たる人にしてはじめてこの詠あるべく、大和心と櫻と宣長と所謂三者一致してはじめてこの詠ありといふべきなり。

宣長の櫻に心を入れたることはかの花顚に劣らず。彼かつて、その墓所を豫め山室山の上に定めて、さて詠じて曰はく、

山むろにちとせの春の宿しめて
風にしられぬ花をこそ見め

と。その歿するや、門人謚して、「秋津彦美豆櫻根大人」と稱へ、その手馴したる櫻木にてつくりたる笏を靈牌として之に謚を記して家に祭り、その山室山の塚の上に山櫻を植ゑてその志をはたせり。

あはれ、わが鈴の屋大人櫻の山の神の御靈のふゆによりて生れ、朝日に匂ふ山櫻の如く、世に匂ひわたり、死にての後も櫻木と化して世にとどまれり。この大人物がわが櫻の歴史の上に逸すべからぬ人たるをわれは喜ぶものなり。

浴恩園とさくら山

松平定信は近世の賢侯にして樂翁の名、今に人口に膾炙す。徳川家三卿の一たる田安中納言宗武の第三子にして出でて白河侯松平定邦の嗣となれり。天明七年御老中の上座を命ぜられ、天下の大政を掌り、翌年將軍の補佐職となり、寛政六年までこの職にあり。同九年老中の職を致し、隱居して樂翁と號す。時に年五十五。文政十二年五月逝く。享年七十二。定信性謹嚴閑雅、政をなすに肅にして刻ならず、一時寛政の治を稱す。その封内に施くに忠孝の教を以てし、又至治を以て傳へらる。學を好みて、自ら著す所少からず。又よく文雅の士を保護してその驥足を伸ばさしめし事多くその美蹟一々あげてかぞふべからず。而してこの人の櫻に對することまた傳ふべし。

江戸築地五の橋に侯の下屋敷あり。ここに園池あり。之を修めて浴恩園と名づけ、公暇來りて心を養ふ地とせり。よりて柴野栗山に囑して記を草せしむ。又佐野侯堀田正敦の浴恩園の記あり、和學所北村季文の和歌あり。園内の名所五十二、その花に因めるものをあぐれば、

花の下道。櫻が淵。花のかけ橋。

などなるが、ここには名ある櫻の優品を數多く集め植ゑたれば、げにも櫻の花の匂ふ園といふべきなり。侯は親族又雅人を引きて共に樂むの地とせしが、致仕の後は主としてここに住みて自適せり。大塚の下邸を六園といひてここにも櫻を植ゑ、又深川入船町の海濱にある別業には南岸に普賢象その他の遲櫻の名花を集め植ゑたり。花時に至れば先づ浴恩園の花を見次に六園の花見をなし、

終に浴恩園の池中より船に乘りてこの深川の苑下に集り、詩歌管絃の清遊を試むるを例とせり。かくて侯はそれらの三處の櫻をば當時著名の畫家谷文晁に命じて之を寫生せしめしが、文政五年に至り之を花之鑑と名づけ、二軸の卷子とせり。これに載する品種實に百二十四種あり。世に之を浴恩園櫻譜といふ。その復寫侯の裔なる松平子爵家に傳ふ。

侯は又封地白河の城北金勝寺の地景勝に富めるを愛し、ここに別莊を營み、そのあたりに櫻を多く植ゑ、又桃を植ゑて果實はその邊の人の取るに任せたり。此地の櫻は花紅を帶びたれど、香氣乏しければ、江戸より種をとりよせ、苗木を仕立てて多く之を植ゑたるなり。この地をば名づけて櫻山と名づけ、その別莊を一遊亭と名づけて衆と共に樂むの地とせり。又城東の山には楓を植ゑて紅葉の山と名づけ、城南の大沼をも修めてこれらをも衆と共に樂むの地とせり。樂翁の樂は櫻を樂むの樂にして、又衆と共に樂むの樂なり。花巓といひ、宣長といひ、樂翁といひ、わが櫻史はまさに爛漫の域に入れりといふべし。

櫻宮の勸進

花顚出でて櫻を描きしよりその流絕えざるのみならず、益々その盛大を致せり。花顚の妹露香の事は既にいへり。花顚の門人に廣瀨花隱あり。花隱はよく櫻の描寫に努めよく師の筆法を傳ふ。その描く所の「三十六櫻譜」又六々櫻譜と稱へて世にもてはやされたるが、その三十六品を描くことは花顚の櫻花帖に倣へるものなるべしと思はるれど、その品種は花顚のとは異にして當時都鄙の名花を描けるもの見え、しかも一定せりと見えたり。

花隱の櫻花帖につきては松浦靜山の甲子夜話に記せる文あり。曰はく、

○此春北村師の方より櫻花の繪一帖を示して曰ふ。此畫は京人名和花隱と云ふ者なり。〔割註〕此人は名和長年の裔孫なりとぞ。」　櫻花を愛すること年あり、且この花の眞寫に妙なり、因て花の數品を圖し各家の歌を募り、廼その花筵の圖を併せ贈る。予も亦その選に與れば蜂腰一首を詠ず。

花筵幷詠歌の圖

〈禁中左近櫻〉 押花

〈櫻町卿眞像〉

〈洞中廊間櫻〉 押花

〈觀櫻畫三十六品御作〉

櫻花三十六品寫生各軸展觀儀附

(補)以下卅六品陳列の圖あれど上圖と同樣なれば略す。但其品名を掲ぐ原圖は掛物に書てあり。

元日櫻　小櫻　手枕櫻　枝垂櫻　山櫻　艶櫻　三吉野櫻　衣笠櫻　虎尾櫻　芝山櫻　香櫻　御園櫻　路頭櫻　廊間櫻　曙櫻　八重單櫻　地主櫻　夕榮櫻　爪紅櫻　樺櫻　鹽竈櫻　玉緒櫻　筑波根櫻　伊勢櫻　八重櫻　曉櫻　漣櫻　入相櫻　玉櫻　法輪寺櫻　小絲櫻　淺黄櫻　普賢像櫻　薄墨櫻　有明櫻　常盤櫻

(補)此傍に諸儒家聯書、官筆短册、諸國詩歌連俳短册などゝ記あれど、詩歌共に記せず。左の一首幷に附言を記載す。

さくらさくころは空さへ心して
　風しづかなる花の夕榮　　靜山

夕榮の二字は原より其圖に題せるなり。

(補)原書は句首のさくらは櫻花の畫にして下より上へ散し書きしたり。

彼は櫻を愛する餘り、櫻宮造立を思ひ立ち、文政七年京都より江戸に下りてこの事を勸進せり。その略に曰はく、

櫻町正二位中納言兼民部卿藤原成範卿は……此卿天性櫻を愛して里第の內外にあまたの櫻を植て春每に其木蔭を立去り給はず、花の盛り久しからざる事をほいなく思ひ給ひて其壽を延ん事を泰山府君に祈誓し給ひけるに、府君も卿の精誠を感じ給ひてけるにや、三七日が程いづれの花も散ることなかりしとなり。……かかる德行といひ、榮花といひ、此君の高運正しく

府君の應現ならんと。よつて薨去の後は此君を神と崇め、泰山府君を本地として、洛東聖護院村に櫻塚を築き神號を櫻宮として開運延壽を祈るの靈社となせる事年久し。然るに應仁の兵亂起りて洛中洛外平野となりてもろもろの舊蹟悉く失たり。されど櫻塚のみ殘りあれば、此神の靈驗のいちじるしき事を思ひ出て、愚翁も數年櫻花を愛する事、此神の御心ばへと同じければ深く此神靈を尊み既く洛北高尾神護寺に秘藏せる此神の尊像を得て、是を乞寫して、今度彼塚のほとりに庵を結び社を建立し、此尊像を安置して側に櫻を植て神靈を永世に傳へんと思へど隱處の老翁力およばず云云。

と。かくて彼は文政九年成範卿の六百五十回の遠忌にこの志を遂げむと欲し朝野の助成を乞ひしものなり。今その志を遂げしか否かを未だ知らずといへども、かれはその塚のほとりに花園を開發して睡足園と名づけ、その中に櫻宮と稱して安置し奉らんと欲し、その庭に三十六品の櫻を植ゑ、例年此卿の忌日三月十六日に己が寫ゑし三十六品の寫生の軸に九十餘種の變花を辨別したる寫生、また各其生花を押したるをも展し來りし由なり。而してその三十六品の櫻は、實にかれがものせる櫻花譜にあぐるものにして、その數とその品種とは一定せるものの如し。かくて考ふるにその三十六種は卽ちこの櫻宮の睡足園に植るむとて選定せしものなりけり。されば、その數と品種との定まれるも亦うなづかる。而してその三十六種は上にあげたるものこれなり。

花譜の眞盛

花癡の一派とは稍方面を異にして同じく櫻の愛護に努め、大なる功績を殘し人あり。之を近江仁正寺の藩主市橋長昭とす。この人星峰と號し、佐藤一齋につきて儒學に達す。古來の櫻愛護者中の巨人にしてその品種の蒐集と甄別とに熱中し、多く日光奥州關西等の諸地方より櫻の種類を集めて之を研究し、畫人櫻井雪鮮に命じてそれらを寫生せしむ。雪鮮は繪事に巧みにして、描法精緻よく各品の特徴を捉へて忠實に之をあらはし、花顚の圖に比して別に一天地を

開けりといふ。描く所の櫻すべて二百三十四種。大本五冊に分ち、題して花譜といふ。その第一冊は享和二年に成りしが、全く成りしは文化の頃なり。本邦の花譜中最も大成せるものにして、しかも又最も貴重なるものにして後世櫻品甄別の標準となれり。この書帝室圖書として現に圖書寮に尚藏せらる。

文政天保の頃幕府に類書編纂の議あり。屋代弘賢命ぜられて之が總判となり、文政四年より天保十三年に至るまで二十二年の間に五百六十巻の書を編して上る。之を名づけて古今要覽稿といふ。蓋し、その豫定する所大凡一千巻なりしが、未だ成らずして終りしかば稿と名づくるならむ。この書巻第二百六十五乃至巻第四百六十七までを草木部とす。就中、巻第二百七十四より巻第二百九十四まで二十一巻を櫻にあてたり。そが内に載する櫻の種類百三十四種附載する所なほ數種あり。而してこれらの多くには各麗しき圖を載せたり。しかもその圖は、松岡玄達の櫻品と、上にいへる市橋の花譜の圖とを轉載したるに止まれり。弘賢又別に花圖說二冊の著あり。その載する品種すべて六十四種。その畫は畫人横田如圭の描く所にして一々寫生にかかる。しかも蜜腺の如き細微の點までも現はせるは、此時代の櫻の畫中見る所稀なりといふ。弘賢一々之が名と說明とを加ふ。その成れる年代は詳ならねども、文化文政の交なるべしといふ。

以上の如くにして櫻譜はいよいよ出でて愈々精になり、寛政より天保の頃まで、五十年間に知られたる品種約二百五六十種に達し、一々圖ありてその特徴を傳へたり。まことに百花爛漫の盛時といふべきなり。かくて、かの市橋の花譜以後之にまさるの圖譜なく、かの花顚の後之にすぐるの花顚なきかといふに、ここに櫻顚出でてその品種を集め、浩然出で之を圖し、ここに天保の盛時をかざれり。今項を新にして之を傳へむ。

櫻顚、浩然

之より先天保の頃幕府の富士見寶藏番に安富軍八といふものあり。いたく櫻を好み、飯田町二合半坂の邸中に多くの櫻品を集め栽たるあり。櫻の愛好者

の漸く多くなりしを證す。かくて櫻顚は之に倣ひて、更に力を盡したれば、當時長者ヶ丸の櫻園と稱へて世に喧傳せられたることは、この時代に出版せられた花鳥曆名所案內記の類を閱して知らるべし。しかも櫻顚はその好む所頗る高く、常人の喜ぶ八重の櫻を田樂櫻と名づけて之を卑めすべて希世の名花のみを集めたり。その品目は櫻番附として一枚摺にして之を誌せり。百三十六種あ・りと稱すれど總計百四十種に達せり。圖中の櫻花滿開の時に門內に入れば目馴れぬ花のみにて一見櫻とも思はれぬもの最も多かりきといふ。そのうちにも御衣黃と名づけし櫻は淺黃の單瓣にて自ら紅粉の香を發せしといふ。これ實にこの國の特產にして今も稀に世に傳はりて賞美する所なり。

櫻顚は久保帶刀といふ人なり。名は勝章、又白櫻亭と號す。幕府の臣にして天守番を勤め江戶靑山長者ヶ丸に住居す。文久元年五月歿す、年七十五。性甚しく櫻を愛し、自ら櫻顚を以て名づく。

時に、靑山權田原の植木屋に金太といふものあり。植木屋中の奇傑たり。增田繁亭と稱ふ。金太この長者ヶ丸櫻園の花を後に傳へむと欲して畫家坂本浩然に囑して一々之を寫生せしむ。その成れる櫻譜を長者ヶ丸櫻譜と名づく。

坂本浩然、名は直大、字は櫻宇、浩雪又香邨と號し、別名嘗草林處と號す。和歌山藩の醫官にして、醫術の傍、本草の學に通じ、又畫を嗜む。畫ははじめ狩野派を學びしが、後に華島雪亭に就きて專ら寫生をつとむ。而して櫻花を描くを以て最も得意とし、その畫法に一新機軸を出したれば、其技神に入り、其花蘂より自然に香氣を放つものとして當時好事家の賞譽して爭ひ求むる所なりきといふ。嘉永六年八月五十四歲にて歿せり。

さても、かの金太が浩然に囑して描かしめし長者ヶ丸櫻譜はかの百三十六種を載せ、一々の櫻の特徵は筆者の靈腕によりて遺憾なく發揮せられ、櫻史の考證上頗る重要なる地位を占むるものとす。金太はその一圖毎に當時著名の俳人鳳朗、梅室等に花の句を題せしめ、浩然の圖と對照せしめ之を帖にしたり。この帖今、理學博士三好學氏の架中に藏せらる。

文久元年信濃須坂の藩主堀良山は「叒譜（ジャクフ）」を選めり。此書は寫本として行はれたるが、其の着色せる二百五十の櫻の圖の來歷に關しては良山の序文に筆

者の明かならざる由を記せり。かくこの書は屢諸書に引用せられたるにその圖の出處の考證を缺けるが、理學博士三好學氏の研究によりてその圖が市橋の花譜より出でたるを明かにし得たり。（この項多く既刊の「櫻」誌により、又三好博士の研究を轉載せり）

櫻花五百詠

文政の頃幕府の醫官池原以文といふ人あり。諱は良章、雲山と號す。性櫻を好み自ら櫻顚と號す。かつて櫻花を詠ずる詩五百首を得て、櫻花五百詠と題せり。古より櫻を詠ぜる詩歌少からねど、一人にしてよくかくの如きは稀なり。これにつきては林逃齋、林檉宇の序跋に委細を述べたれば、次にあげむ。その序に曰はく、

櫻花五百詠叙

詩以詠物爲難、而一物百詠爲更難、乃操觚之士逞技誇才、往々以百詠相競、而梅菊林々輩出、然其典故盈篇、猶或有所資焉。獨至胡蝶三百首、世已以詞壇獨歩稱之。余今覽池原以文所著櫻花絕句、分題各詠用一韻、累五百有餘。則蓋爲難之極也。其所驅使典故亦寥々可數、而率皆取諸胸中無盡藏焉。愈出愈奇、愈變愈巧、無窘無滯、殆乎不可思議。卽胡蝶三百亦將避三舍。況乎其他僅々百詠誰能出於其上乎。則謂之詞壇獨歩可矣。惜夫、以文已爲白玉樓所促妙齡以逝。抑天之秘神才也、夫謂之何哉。以文以醫承業、此其刀圭餘技云。乃者同僚武田義甫示諸家翁索題言。余廼得旁觀爲題詹言。闕逢涒灘季夏中浣書於九香北窓下。林皥。

その跋に曰はく、

書櫻花五百詠後

名花之易凋謝而才人之難長久、今古同一慨慨吾不知造物果何意也。池原以文才人也、一朝罹病逝矣。其友人武田義甫携遺詩櫻花五百詠見示。會長夏無事反覆吟玩之。一體疊韻逾出逾奇、頓覺千葩萬葩燦發目下、此非詩之能體物豈至如此耶。則謂之詩才之豐艶綺靡與夫名花相輝映可也。嗚呼花雖凋謝而後有同春、人則無還期矣、吾爲之掩卷歎惋。以文諱良章雲山爲世襲醫官、

沒時年三十八。生平研精家學、所著有傷寒論大疏幷衍義、累數十卷、詩筆特其緒餘耳。義甫以同院之好整頓遺書。此冊亦因以不致散佚、其敦友誼可以歛衽焉。文政甲申晩夏　林衡

これらによりてその人となりを見るべし。この詠の成りしは文政三年に在りしものと見ゆ。そは著者の自らものせし題辭に見ゆ。曰はく、

櫻花五百詠題辭

余性愛櫻入骨、每花時朝玩暮撫未嘗少措也。稍有會心處寓諸吟、積若干首載在拙集、每當氣宇皆倦之際披卷朗誦一過則覺身猶在乎嬌霞艷雪芳芬馥郁快心醒目塵襟爲之灑々然也。蓋花之開落不出旬日、而其瓌姿瑋態惟詩可以寫之、其芳魂香魄惟詩傳之、羅浮一夢竟不附之月落參橫也。今玆又有所詠演至五百雖未足盡櫻花亦可以見余癖愛之厚矣。客曰五百之詠皆以塵新春三字爲礎其亦有說乎。余曰有之、其時則春矣、其花則新矣、而其詩則莫不塵也、不安宜哉。客笑而頷是爲題辭。

文政三年歲在庚辰三月朔櫻花方盛、爛漫一面、而窻几間香風勃々觸人詩興、喜而書也。

これによつてその櫻に溺るるまでの人たりしを見るべし。その詩もとよりこの紙上にあげ盡すべからず、その題また多端なりといへどもこの詩古今に稀なるものなれば、煩を厭はずして梗概を次にあぐ。

その最初にあるは絕句七十首なるがその第一首に曰はく、

白玉爲膚無點塵　霞蒸露沐更鮮新
名花不許傳殊域　天與扶桑一種春

その第四十一首は明曆年間に歸化せし閩人僧道本の櫻詩に對して詠ぜるものなり。第七十一首より或は櫻の品種を題とし、或は櫻に關する景等を題として、或は一首或は二三首を詠ず。その計五百五十首に及べり。その題次の如し。

緋櫻　黃櫻　淺葱櫻　墨染櫻　山櫻　庭櫻　垂絲櫻　不斷櫻　若木櫻
香櫻　機櫻　虎尾櫻　鹽竈櫻　南殿櫻　彼岸櫻　普賢象櫻　牡丹櫻　楊貴妃櫻　櫻苗　稍長未花櫻　始著花櫻　年長年花櫻　已茂成林櫻　半枯櫻　枯櫻　櫻材　結蕾櫻　未開櫻　半開櫻　全開櫻　漸開櫻　驟開櫻

未開遍櫻　已開遍櫻　未謝櫻　已謝櫻　櫻花老　櫻花飛　櫻花落　櫻花盡　結子櫻　春月著花櫻　夏月綠葉櫻　秋月紅葉櫻　冬月落木櫻　早櫻　晩櫻　春盡晩櫻　夏初晩櫻　日出櫻　日中櫻　日入櫻　初夜櫻　中夜櫻　後夜櫻　日櫻　月櫻　煙櫻　雲櫻　霧櫻　露櫻　風櫻　雨櫻　曇櫻　晴櫻　暗夜櫻　月夜尋櫻　月夜殘櫻　雨中櫻開　雨後櫻開　雨中尋櫻　雨中尋櫻櫻纔開　雨後尋櫻櫻已殘（ソコナハレタリ）　雨後殘櫻　尋櫻遇雨　夜雨思櫻　曉晴看櫻　風雨哭櫻　春雪映早櫻　春寒櫻花遲　春暄櫻花早　櫻花一朶先開　櫻花一枝後開　探櫻先期　探櫻後期　思櫻　待櫻　問櫻　買櫻　栽櫻　移櫻　賞櫻　訪櫻　折櫻　擔櫻　簪櫻　惜櫻　別櫻　乞櫻　贈櫻　謝人贈櫻　寄詠櫻人　寄畫櫻人　詠櫻示人　畫櫻示人　題畫櫻花壽人　芳野嵐山櫻花圖幅　東都探櫻雜興　三十首

山寺觀櫻　再山寺觀櫻　三山寺觀櫻　櫻下觀妓　櫻下送別　櫻下讀書　櫻下賦詩　櫻下裁文　櫻下獨酌　櫻下會飲　櫻邊酌月　櫻邊醉步　櫻邊醉臥　櫻邊卜居　卜壽藏之地栽櫻花　對櫻無詩　對櫻無酒　病中思櫻　病後訪櫻　美人翫櫻　美人折櫻　美人簪櫻　美人踐櫻　紫宸櫻　舊都櫻　城頭櫻　官廳櫻　孔廟櫻　菅廟櫻　觀音廟櫻　古戰場櫻　城墟櫻　廢宅櫻　廢寺櫻　古家櫻　遠山櫻　高山櫻　深山櫻　幽谷櫻　茂林櫻　僻地櫻　閙地櫻　山家櫻　市家櫻　田家櫻　樵家櫻　漁家櫻　獵家櫻　富家櫻　貧家櫻　顯貴家櫻　幽隱家櫻　武弁家櫻　遊俠家櫻　儒家櫻　道學家櫻　醫家櫻　占家櫻　詩家櫻　文章家櫻　琴家櫻　棋家櫻　書家櫻　畫家櫻　酒家櫻　茶店櫻　花肆櫻　花圃櫻　藥圃櫻　蔬圃櫻　田畦櫻　驛路櫻　客舍櫻　僧房櫻　尼庵櫻　官櫻　閨櫻　青樓櫻　聲妓家櫻　供佛櫻　家櫻隣櫻齊開　隣櫻　出墻櫻　隔簾櫻　遶舍櫻　門櫻　簷櫻　窓櫻　逕櫻　井櫻　俯水櫻　夾水櫻　隔水櫻　舟中觀櫻　轎中觀櫻　竹櫻　杉櫻　楓櫻　柳櫻　櫻與雜花混　櫻與雜樹混　櫻與櫻草混　早櫻與晩梅映　櫻花黃鳥　櫻花蜜蜂　櫻花胡蝶　狂花櫻　峯花櫻　接櫻　紅白共接櫻　盆櫻　瓶櫻　剪絲櫻　刺繡櫻　彫刻櫻　畫圖櫻　水墨櫻　影（カゲノ）畫櫻　壁上畫櫻花　屛風上畫櫻花　團扇上畫櫻花　櫻木杖　櫻木杯　櫻皮篤盒

櫻皮酒　櫻花露　櫻花酒　櫻花湯　掩藏櫻花　書中乾櫻花　衣中乾櫻花　摺扇間櫻花腊　櫻花點池　櫻花點杯　櫻花點硯　櫻花點枕　櫻花點詩卷　櫻花點燕泥　櫻花之形　櫻花之質　櫻花之態　櫻花之色　櫻花之香　日下櫻影　月下櫻影　燈下櫻影　窓上櫻影　水中櫻影　杯中櫻影　硯中櫻影　鏡中櫻影　賣櫻花聲　護櫻花鈴　春日夢櫻　夏日夢櫻　秋日夢櫻　冬日夢櫻　對櫻有感　題手植櫻

げにも林檉宇のいへる如く、五百詠の擧は、古來稀なる所、しかも各首悉く一韻、しかも同字を用ゐてこの詠を爲せり。その巧拙は姑く措き、その櫻を愛せるの度實に古來稀なりといふべきなり。余、この人の事の世に傳へられざるを歎くこと久し。こゝにわが櫻史によりて、之を永世に傳へむとす。

水戸の花

常陸國水戸に櫻町と名づくる地あり。傳へて曰はく「古へ垂絲櫻あり、姿艶にして比び無かりき」と蓋し地名の基づく所なり。然れど今已に存せずと櫻史新編にいへり。而して新編の著者曰はく「唯金町の市人歳毎に垂絲櫻の形を造りて、東照宮の祭事に供す。これ卽ち櫻町の花を模造するものなり」といへり。

文政年中有栖川宮の五女登美宮吉子女王德川齊昭に降嫁したまふ。その關東に下らむとして中和門院に謁して別離を告げ奉られしに、中和門院左近櫻の種なりとて鉢に植ゑたる櫻を賜ふ。吉子女王之をもたらして關東に來り、之を後樂園に植う。後齊昭弘道館を建つるに及びて、其櫻を弘道館の玄關の左に移し植ゑたり。

はじめ、この花の江戸に來るや、世に珍しきものなりければ、人々いたく之をめではやし或はその實を蒔き、或はその根生を移しければ、その種の花やうやく東國に多くなり行きぬ。水戸にても弘道館の外に之を傳へ植うるものあり。その櫻の下に吉子女王卽ち文明夫人手記の碑を立つ。その文に曰はく、

今はむかし御いとまをしに、うちに參りたれば、東のつとにせよとかたじ

けなくも南殿の櫻實生を物にうつさせたまひけるを、たづさへもてくだりて、やがて後樂園にうつし植けるが、歳月を經ていみじく盛に、花も實もおのづから多なりたり。そを小澤敏行ひと本を得て、いつきかしづきつゝわれに歌よみてとこひければ

あまさかるひなにはあれど櫻花
雲の上までさきにほふらん

あはれ禁中の花まづ東國に移り來り、その盛ゆるに及ぶころ、東國また帝都となれり。櫻花また國運を豫め示すものか。奇しき事といふべきなり。

瀧櫻

櫻はもとより國の花なれば、都鄙をとはずして榮ゆるものなることはいふをまたざれど、都の花は世にもてはやされて、天さかる鄙の花は如何にすぐれたりとも、世に喧傳せらるること少きこそ是非なけれ。されどここに陸奥の片田舍に在りながら名をば雲井に轟かしたる花こそあれ。そは何ぞといふに、三春の瀧櫻これなり。

磐城國田村郡三春町の附近に瀧村といふあり、瀧櫻はこの地にありて、古より名高く、今に存せり。その樹は紅の枝垂櫻にして樹齡數百歳に及べりといふ。

この櫻の事は天保七年の春にものせし瀧佐久良の記櫻第五號附錄に見えたり。曰はく、

奥州田村郡三春の城下より一里隔りて瀧村といへる有。此むらの畑中に絲ざくらの大木一株ありて、花のころはえもいはずよきながめなれば、人々木かけにつどひつゝ、むれ遊ぶとなむ。領主正保二年こゝに封を移したまひしころもすでにめづるばかりの樹なりしとかや。折しもこのあたり櫻が爲に除地となされて今は已に二百年を經たり。されば生出し初はいつの世にかしられず。瀧の有べき所ならねど瀧村とよべるもの佐久良のあたりを見たててたき櫻といひそめしが、やがてむらの名にもをふせたる成べし。（下略）

と。げにも絲櫻の瀧の張り落つるさまなるより、瀧櫻といひ、瀧櫻の村といふによりて瀧村ともいひそめけむ。かくてその折その瀧櫻を詠ぜし和歌九首をあげ「なほ五十首ばかりの歌」ありしをもらしつといへり。その九首のうち一二首をあぐれば、

大炊御門內大臣經久公

みやこまで音に聞えし瀧ざくらいろ香をさそへ花の春風

加茂縣主季鷹

みちのくにみちたるのみか四方八方にひゞきわたれるたきざくらかも

この花、かく都にも名高き事となりし由は河田迪齋の瀧櫻記によりて知られたり。その文次の如し。

瀧櫻記

瀧櫻者在二東奥三春城東南里餘瀧村一。其幹圍二丈三尺強、高三丈九尺、東枝二丈八尺強、西枝三丈六尺、南枝四丈二尺強、北枝三丈二尺強、東西通計六丈五尺強、南北枝通計七丈八尺強、輪囷鬱茂、縱橫扶疎、不レ知二其經一幾百年一也。春風拂拂、萬藥齊開、則如二雪山之嵬峨一、如二白雲之靉靆一、可レ謂二一大奇觀一矣。然以二其在一阪也一、識之者亦鮮矣。曩者三春藩士草川次榮之遊二京洛一也、詫二瀧櫻之巨大一、搢紳相語以爲二佳話一、一時喧傳、遂升聞二光格帝聖聽一。帝曰、定天下之奇觀也、宜レ其收以入二諸國名所部中一矣、仍詔使レ錄レ之。於レ是搢紳好奇之客、相競詠二國歌一以寄レ之。次榮隨レ得摺集持以歸。藩大夫安倍季春亦有二雅藻之嗜一、憾二其裒集之未一レ徧、乃更集二諸州名士之詠數百首一裝爲レ卷、且令二畫工某圖一櫻樹形狀一以附二卷首一。問者君佾二村上豈夫一請二序於余一。乃記二其顚末一以送レ之。嘉永己酉午節後二日。

卽ちこれによりてその光格天皇の叡聞に達したりしを知るべく、かの「瀧佐久良の記」もその折に何人かの記したきし、文章の今に傳はれるなるべく、五十首ばかりの詠も、かの草川次榮の得たりし歌と同じものならむか。三春の地われらは三春駒の名によりて世に傳はれるを知る。しかも百年の古、既に天下の名所として知られたりしなり。

この樹、天保七年に記ししものは、

太さ　根廻り土際生じ三丈四尺五寸　中ほどの廻り　二丈一尺五寸

たかさ　九間
枝のはり　東より西　六丈三尺　南より北　七丈九尺　艮より坤　七丈七尺六寸　乾より巽　七丈二尺
總廻り　十一丈八尺六寸

とあり。之を「瀧櫻記」の記載に照すに、多少の出入ありといへども、二者共に大體に於いて信をおくべきものなるを知るべし。

われ、各地の古櫻を記せずしてこれを記すはその夙く叡聞に達せしことを世に告げ、以て櫻の面目をおこさしめむと欲すればなり。

やまとこころ

本居宣長の敷島の大和心の詠は人口に膾炙するところにして、朝日に匂ふ山櫻花こそは眞に大和心の象といふべきなれ。ここに、博多人二川相近といふ人あり。通稱は幸之進、松蔭と號す。幼にして穎悟十歳にして詩を作り文を綴る。

夙ら書道の研鑽に心を傾け當時無比と稱せられたり。明和四年に生れ、天保七年に歿す。年七十。この人常に浮華の文字を卻け、實用を主とし、忠臣の遺徳を欽慕し、ことに吉野の櫻樹を移し植ゑて愛賞せり。天保年中菊池寂阿の五百年忌に當り、此櫻樹をその墓に分ち植ゑ、詩歌を獻じて勤王の志を表せり。詩歌共によくせしが、忠君愛國の氣その表にあらはる。又今様歌をよくして、詠ずる所少からず。かつて詠じて曰はく、

花よりあくる　みよしのの
春の曙　　みせたらば
からくに人も　こまびとも
やまとごころに　なりぬべし

と。これその自筆の詠として傳ふる所にあり。然るに、世に往々この詠を賴山陽の作とし、而して少しく辭句をかへたるものを傳ふ。これもとより訛傳なりといへども偶以て、この歌が、わが日本人の胸臆の琴線に觸れて鏗鏘の音を發するものなることをさとるべきなり。かくの如き國民的歌詞を詠ぜる相近はそ

れ蓋し凡人にあらざるべきなり。

櫻賦

櫻賦は幕末の先覺佐久間象山の撰なり。象山は人も知る如く、信濃松代の藩士にして、儒學にも詩文にも和歌にも達し、又常に西洋の學術に意を注ぎ蘭學を學び、砲術に達し、開國の說と勤王の說とを以て一世の木鐸たりし人なり。安政元年吉田松陰の事に坐して蟄居を命ぜられ、その藩地に幽居すること九年なりしが、その第七年萬延元年三月にこの櫻賦及び觀櫻賦は成りしなり。その文に曰はく、

櫻賦

有皇國之名華、鍾九陽之靈龢、翳列樹之苯蕚、嚲樛枝之交加、稟妙色於自然、煌妍茂而無瑕、冠群卉而特秀、亙終古而不差。故詠浪津於皇嗣、命開耶於邦媛、國舅忘老於染殿、王孫發感於渚院。既乃惠風微動、沖氣淑清、庶艸始綠、百鳥和鳴。於是、紅苞舒榮、皫蘂吐芬、光色炫耀、肸蠁豐醇。霑丹霞之晴輝、散白日之景炘、滋鮮麗於晨露、斂絢采於夕曛、遠而望之、爛如鄉雲垂翠微、近而睇之、璨如珍珠綴林陂。赫乎曄々、焜乎猗々。爾其帶雨罩煙飜風嚮月、綢繆褥繡、縹緲髣髴、紛旖旎以陸離、郁晻薆而馝馞既的皪以氷淨、復縈盈其如雪、至於雜松柏之葱菁、覩峰巒山之歡唫、吐朱閣於遠卉、靄翠樓於高林、沿水流而蔚映、繞井閭而垂蔭、固千象而萬趣、差難得而備譚。於是康樂公子、佳麗季女、瓌姿綽態、嫺都妖冶、曳綺羅於西林、步驌驦於東野、憾春光之不長、憐芳菲之易墮、折纖枝以相授、弄殘葩而心寫。若廼崇堂曲榭、騷友詞賓、尊貯冽醑、盤登素鱗、珍饋咸具、副薦畢陳、面嘉樹坐錦茵、金斝揮羽觴巡、奮藻思以鬪麗、馳妙辭而競新、顧餘霞之散綺、竢雲月之飛輪、又有天涯遊子、深閨少婦、感和氣之絪縕、驚陽節之喧煦、惜珍麗之徒芳、恨歸期之屢誤、羨黃鸝之耦飛、妬粉蝶之雙舞、陟夷岡以徒倚、憑華陰而搔首、望所思而不見、愾長喟而遠慕。更有慷慨之志士、倜儻之豪俊、晞芳野而大息、哀皇業之不振、臨奧關而彷徨、欽上將之烈駿、嘉高德之刊榦、題片言而暗進、雖忠誠之未報、永無慚乎王藎。方華蘂之盛時、知

物候之流運、對落英之繽紛、增感慨而自奮。是以都鄙尊卑、老少智戇、觀斯華者、莚莫不目愛而色悅、神感而情動。若夫勝地所宜、有寧樂故都嵯峨嵐山醍醐白河小倉大原與夫武之金井總之墨川、比皆都人之所周覽、士女之所遊觀、逮于動磯霞浦之澳岐蘇足柄之巓、亦有慕名賢之風雅、足優奬而盤桓、夫何玆樹之奇植、泯景響於蒼漢、挺芬蕤於日域、攢壯觀於神甸、資豐壤之粹澤。應皇化之煥、寔儀光之獨異、空寓內而莫先、散譜類而夷考、豈桃李之足算。

仍作頌曰。

貞樹徠服、育神州兮。受命特立、終不流兮。瑩潔無瑕、豈不喜兮。
窈窕自持、章天地兮。澹然不衒、喜賓聚兮。帝宮神寓、無弗可兮。
深林窮谷、膺天光兮。闃其無人、自芬芳兮。

この賦を撰する時、象山幽囚方に七年、蓋世の抱負も施すに途なく、文筆に託して胸中の鬱塊を披瀝せしものとぞ思はれたる。この賦一度世に傳はるや、象山の名と共に喧傳せられ、終に天聽に達し、孝明天皇の乙夜の覽に入るに到れり。象山之を拜聞し、感喜に禁へず、詩五首を賦してその榮幸を記念せり。曰はく、

恭聞所作櫻賦蒙天覽不勝榮幸慶喜之至、爲五絕句。

居然山澤一腐儒　廢錮九年形迹孤　多謝三春白櫻樹　微言因汝達天都。
一篇賦就入天墀　想見君王帶笑披　曾用顏家田舍樣　禿毫縱意寫纖詞。
細賦櫻花日易消　多年蟄居太無聊　天顏應笑非壯士　篆刻彫蟲學六朝。
櫻花頌上紫雲霄　榮幸何人能得超　皇國他年有蕭統　選中亦自不寒寥。
親舊相傳亦喜欣　前來向我慇懃云　陪臣詞筆膺天覽　昌俊後塵今有君。

と。かれが喜べるさま以て見るべし。「昌俊後塵今有君」といへるは、中村敬宇の評に、

匹夫著作蒙天覽者前有佐川田國歌、後有先生此賦。三百年間唯二人、可謂無上之榮。

といへると同じ趣なるなり。佐川田喜六昌俊のことは既にいへり。誠に匹夫にして、その詩歌の叡覽に入りしものは眞に三百年間二人に止まるものといふべし。而して、その製にこそ和漢の差はあれ、孰れも櫻を詠ぜるものなるに於いては奇なるが如くに思はるべけれど實は奇ならず。櫻を詠ぜしものなればこ

そかかる作も出で、櫻なればこそ世にも喧傳せられ、櫻なればこそ天聽にも早く達したるなれ。櫻が日本人の精神と相觸るることの緊密なることこの一事にても知らるべし。かくて、象山更に又長句を賦せり。曰はく、

相如絕藝莫能追、希逸惠連庶可爲、嘗學六朝作櫻賦、孰知託興在湘纍、湘纍當年頗橘樹、自喻志節不容移、文章爛煥類有道、紛縕修姱足可師、我致忠悃遇嚴譴、幽囚廢錮九年茲、憂憤空效長沙哭、感觸終懷郢路悲、我賦一旦生翼飛、微志因之孱天知、絕似櫻花在窮谷、天光漏處照春熙、

と。これ眞にその胸中を歌へるなり。かくてこの長句詩にいへる如く、この賦は六朝の賦に學びその頗は屈原の橘頗に據りしものなり。特にその頗は文字までも橘頗に據れる所少からざることは、

后皇嘉樹橘徠服兮。
受命不遷生南國兮。
獨立不遷豈不可喜兮。
蘇生獨立橫而不流兮。

秉德無私參天地兮。

の句と櫻の頗の句とを照して思ひ半にすぎむ。賦の中に曰はく、

更有慷慨之志士、倜儻之豪俊、希芳野而大息哀王業之不振。

と。又曰く、

雖忠誠之未報、永無慚乎王薹。

と。蓋し己が志をいへるなり。屈原は楚の王族として、孤忠を懷いて容れられず。さりとてその國を去ること能はざる情を橘樹の根柢深きに比せり。象山またその忠貞の誠を懷いて、かへりて讒を蒙り、その志を世に行ふを得ざるを慨すれど、皇國に生れたるもの、その志の遷すべからざるを櫻樹に比せるものならむ。而して、そのまに、

深林窮谷膺天光兮

といへるものその識をなせりといふべし。かくて文久二年の冬幽囚を解かれ、元治元年に上京を命ぜられ、王公の間に參り大に抱負を行はむとせしが、その開國論を喜ばざる人々に忌まれ終に刺客の手に斃れぬ。然れども、彼が志は僅か

に三年を隔てて行はるるに至れり。

象山は開國論を强く主張せし爲、攘夷論者には頗る忌まれたりしかど、その忠誠の志は疑ふべからず。自ら櫻に擬したればこそ櫻賦の大篇も成りたるなれ。凡本邦人の作れる賦は、平安王朝の盛時に少からずといへども、その莊重の辭令と雄渾の氣魄とに於いて櫻賦と肩を比ぶるに足るべきものを見ず。彼自ら文選中に入るとも遜色なしと豪語せるも宜なりといふべし。世には望岳賦と共に象山の二賦と稱せり。櫻はもとより彼が好める所なれば、これを詠ぜる詩歌また少からず。然れども今すべて割愛せり。

明治の初め象山の門人勝安房その藏する所の象山の遺墨を宮中に獻ぜしが、天皇御覽あつて金若干を恩賜せらる。安房感激已まず、恩典を不朽に傳へむと欲し、同門の人小松彰、牧野毅、北澤正誠等と謀りて、象山の眞蹟の櫻賦を石に勒して、東京飛鳥山に建てたり。而してその篆額は清人揚守敬の手に出でたるものなりといふ。かくて櫻賦はその所を得て、永世に傳はらむ。

佐久良東雄

我さきに僻地の櫻樹の天聽に達したるを述べ、ここに幽囚の士の櫻賦の乙夜の覽に入りしを述べたり。而して幕府の末造は、櫻花の襯化ともいふべき勤王の志士雲の如く起りし時なり。しかもそが中にも最もわが櫻花の化身とも見らるべきは佐久良東雄その人なりとす。

幕府の末造、天下の事坐視するを得ざる形勢を呈するに及び、君國に忠を致さむとする國民の精神は士庶僧俗を問はずして、奮起せしめたり。されば僧にして國事に奔走せるもの亦少からず。就中月照の如きはその最たり。或は又僧侶より出で俗に還り、志士の魁たりしものあり、而してその著しきは伴林光平と佐久良東雄との二人なり。光平はもと河內國本願寺末教音寺の住僧にして周永と名づきたりしが一朝奮然として志を決し、

本是神州清潔民　誤爲佛奴說同塵　如今廢佛佛休怒　本是神州清潔民。

と詠じて還俗し、王事に盡し、終に京都にて獄死せり。

佐久良東雄は常陸國新治郡浦須村の郷士、飯島平藏の子にして、文化八年に生る。幼より學を好みしが、當時官民の懸隔甚しく代官所の小吏の派出する時に村人土下座を爲して迎ふるに比して、その吏が寺僧に會する毎に待遇甚だ鄭重なるを見て、僧侶の品位高きを思ひ、僧たらむことを乞ひて息まず。父母終に之を諾し、近隣觀音寺の住職康哉に託し、その徒弟となしゝが、名を良哉とつきたり。時に年九歳なり。

康哉國典に通曉し、和歌をよくし、契沖の人となりを慕ひ、心を王事に傾け、弟子を敎育するに意を用ゐたり。良哉またよく之を守り出藍の器と目せられしが、師の命により豐山に登り眞言宗の敎學を修めたり。康哉病むに及び、良哉晝夜兼行してかへり侍養につとむ。一日康哉侍者を遠ざけ、良哉を招きて曰はく「我幼より桑門に入るといへども眞意のある處は卽ち皇道の隆運をはかり、御國の爲に盡さむと欲するのみ。汝よろしく古典を講究し、王家に竭し、列聖の洪恩に報い奉るべし。多年蓄積する所の典籍すべて汝に附す。謹んで忘るる事なかれ。言はむと欲するものこの一事のみ」といひ終りて逝けり。時に天保三年三月なり。

天保六年三月良哉眞鍋村善應寺に轉住す。當時暇あれば和歌を詠ずるに悉く勤王報國の作にあらざるはなし。神龍寺如蓮、色川三中、中島二齋等と兄弟の義を結び、又藤森弘庵、藤田東湖、杉山復堂等と往來し殆ど寧日なし。良哉毎に曰はく「凡そ人たるもの忠孝の二字に心を用ゐざらむには假令萬卷の書を讀むとも、寧ろ無學にして愚直なるに如かず。身を立て道を行はむとせば、まづ楠夫子を龜鑑とすべし」と。かつて詠じて曰はく、

久方の空に霞のたなびきて
　高根のさくら見るよしぞなき

と。その微意推して知るべし。

天保年間饑饉ありて農民困憊す。良哉蓄ふる所の器具書籍を賣りて、米穀にかへ、悉く之を頒ちしかども、なほ足らずとし、色川三中に金若干を借りて之を施せり。一日東湖來りて時事を談じ、水戸侯に仕へむことをすゝむ。良哉色をな

し、吾に主人あり、何ぞ徳川の支流に仕ふることをせむやといふ。東湖訝り、その主を問へば、良哉襟を正し、「申すも恐れ多き事ながら京都に御坐す天孫今上則ち吾主人なり」といふ。これをききてさすがの東湖も啞然として再び言ふことなかりきといふ。

良哉常に本居、平田の學風を欽慕し、僧籍に入りしことを悔いて止まず。遂に意を決し、一日諸弟子を一室に會し告げて曰はく「吾先師の遺訓を受けて以來皇室の事寢食の間と雖も忘るる事能はず。因て今日吾が宿志を果さむとす。諸子は各其道を行ひ、先師の遺訓に遵ひ皇恩の洪大なることを思ひ、苟も師の名を瀆すこと勿れ」とて、財産一切を分ち與へ、さて庭上に注連繩を引き廻らし、薪を積みて火を焼き、身に緋の衣を着け、讀經數時畢て法衣と念珠とを火中に投じ赤裸となりて水を浴び、頭に注連繩を纏ひ、寺門を出でそのまま色川三中の家に到り、七日の斷食を爲し、佛寺に食ひし汚穢を祓ひ、潔齋して鹿島神社に參り、再び神池に沐浴し、社殿の下に伏して祝詞を奏せり。蓋し、先非を悔いて僧籍を脫し、專ら皇室に盡さむとする由を採納したまへとなり。ここに又社頭にて三七日の斷食を行ひ、徳川氏攝伏を祈る。前後四週間の斷食にも神色異なることなく、勇壯自若たりきといふ。時に天保十二年二月にして年三十一歳なり。かくて色川三中等と謀り、鹿島の社頭に櫻樹十株を植ゑ、自ら名けて佐久良靱負東雄といふ。蓋し東雄は東國男子の意、佐久良は櫻花にかたどり、靱負は雪消と意通ずれば一朝事ある日は櫻花の如く雪と消えむの意を寓せしものにして、國家の爲に身命を棄てむの精神を以て名づけしものなるが、ここにその最大の象徴として櫻花を標榜せり。

佐久良靱負東雄は今や神州清潔の民に復し、四方を週遊し、大義名分を以て同志を勸誘し、終に常總間の儒者をして、學風を一變せしめたりといふ。その後江戸に出で道を說き、弘化二年に京に上らむとして、途、伊勢の皇大神宮に詣り、皇都に達するや直ちに衣を改めて皇城を九拜し奉る。京都にありては惟神の大道を說き交り玉公士庶を問はず。萬延元年居を大阪に移す。三月櫻田の變起り、その黨高橋多一郎父子逃れ來るに會す。東雄卽ち義弟島男也をして之を匿さしむ。當時幕府の志士を逮捕すること嚴刻にして水戸人に對しては特に甚し。

東雄豫め災の己に及ばむことを知り遺書を草し偶々福羽美靜來りしかば之に托す。その言慷慨淋漓今なほ吾人の肺腑を衝くものあり。かくて福羽の去るや幕吏來り捕へて町奉行所に拘す。幾くもなくして江戸に護送せられ傳馬町の獄中にて歿せり。時に年五十。東雄町奉行所に拘へられ屢々尋問を受けしかど、いつも屈せずして、曰く「今回の事件なくとも、近來の非政我を逃すまじ。ただ速に我を斬れ」といひて他をいはざりきといふ。かつて花の散るを見て詠じて曰はく、

事しあらば我が大君の大みため
　人はかくこそしぬべかりけれ

と。げにもこの言の如くに散りはてにき。この人の如きはまことに、わが邦人の模範にして佐久良東雄の名に背かずとこそいふべけれ。明治二十四年從四位を贈らせたまふ。

吉野川

櫻の化身佐久良東雄かつて詠じて曰はく。

君が爲、こしにとりはく劍大刀、我がものながらたふとかりけり

と。古より刀劍は武士の魂と呼びならはせり。人は武士といひて櫻に比せられたる武士の魂ともいはるる刀劍と櫻花とあに一脈の生氣通ずるものなしとせむや。

原雙桂、名は瑜、字は公瑾、京都の人にして漢學を以て一時に名あり。後白河侯に仕へ、明和九年江戸にて歿す。かつて吉野に遊びて花を賞し、恥戀三日なれど、なほ去ること能はず、遂に一枝を折りて携へ去る。後之を杖につくり終身手にせしといふ。その佩ぶる所の雙刀の柄の飾は黃金を以て櫻花を彫り盡かしめたり。これその花の忘るること能はざるを表せむが爲なりといふ。

又近世大和の劍工に吉道といふ者あり。刀を鍛へて、櫻花漂漾の狀を作り出

すことを創意したるが、その姿態眞に逼れりといふ。誠に絶妙の技といふべし。世にこの刀を吉野川と稱ふ。

幕府の末造に當りて刀工の名手としては當時第一流と稱せられし山浦環源清麿あり。又その門人にして彫物の上手と聞えたる栗原筑前守信秀あり。信秀の鍛へし刀に、その表に「日本心を人とはゝ」と彫り、裏に山櫻の花一朶を彫れるあり。その中心の裏銘に「明治二年八月日」とあり。これはいふまでもなく、本居宣長翁の歌意を表したるものなるが、長さ二尺三寸五分、まことに見事の作なりといふ。

信秀の師は本名山浦環なるが、性廉潔にして俠氣に富み、勤王の志も深くして、或は小楠公を慕ひて正行と號し、更に和氣公を慕ひて清麿と改めし人なり。かかる師につきし、信秀かかる時世にあひし信秀のこの作あるは蓋し偶然にあらざるべし。

櫻史新編

刀劍既に櫻花に深き緣を結べり。文事豈また疎ならむや。我はここに櫻史新編をあげむと欲す。

櫻史新編は青山延光の著なり。延光は水戸藩の世臣にして青山延于の子なり。通稱は量太郎といひ、佩弦齋と號す。父の學を襲ぎ、史館に職を奉じ、天保十四年に彰考館總裁となり、弘化二年職を免ぜられ、致仕の後は春夢と號す。明治四年九月歿す。年六十四。その大日本史の校刊に力を致せる事大なるのみならず、自ら著す所少からず。國史記事本末、野史纂略等あり櫻史新編はその一たり。

この書は花神、名區、名花、雜記の四門に分ちて、上代より近世に及び、凡そ事の櫻花に關するものを網羅して錄せるものなり。これ實に本邦に櫻史あるはじめにして大冊にあらずといへども、要を得よく、花の爲に傳ふべきを傳へたりとい

ふべく、その弟延壽の敍して、

吾邦文士愛ㇾ板者謂ㇾ上ㇾ梓、或謂ㇾ附ㇾ梨ㇾ棗、而其實皆用ㇾ櫻也。海內學者刻ㇾ無用之書、災ㇾ此樹者歲益月增不ㇾ知ㇾ其幾千百。唯吾伯兄之書則爲ㇾ此花傳ㇾ神、以行ㇾ於寰宇間ㇾ花若有ㇾ知必應ㇾ甘受ㇾ斤斧而不ㇾ辭也。

といへるも宜なりといふべし。

延光櫻を愛しかつて櫻花を詠ずる絶句二百首を賦し、名づけて名花有聲畫といへり。載せて佩弦齋雜著に在り。旌櫻寺觀花記ありて、壎篪小集に載せたり。延光は人となり溫恭、謙にして能に矜らず、世と競はず、自ら處事して澹泊、寧靜、惟惟春風和氣を以て人に接せりといふ。蓋し、駘蕩の氣爛漫の態櫻花その物の如き人ならむか。果して然らば櫻史の編あることまさにその宜しきを得たりといふべし。

現代の巻

櫻花の災厄

明治戊辰の維新は天皇親政の大業を復興し、百事維新なるの一大期を劃したり。そのはじめに當りては神武の古に復するの意氣を以て國家萬般の施設すべて改革を加へて、以て皇國の大道を發揮せむとするの氣象天に冲するばかりなりしなり。

然るに一旦開國の主義をとりて、西洋の文化に接するや、ここにその長を採りてわが短を補はざるべからざるを急務なりとする思想勃然として起り、勢の趨く所極端なる西洋崇拜の風を導き、本朝從來の文物制度は有形無象をとはず、すべて野蠻なり、舊弊なりと稱し、若しこれを守り之を惜むものあらば頑迷なり固

陋なりと稱して之を輕んじ侮り、ただ新と奇とを重んじ、苟も古物舊事は一もこれを世に存せしめざらむとする恐るべき弊風天下を靡かしたりき。これが爲に、古城は廢せられて或は囚獄となり、或は狹斜の巷と化し、古建築古彫刻は毀たれて薪となり、和漢の書籍は反古として表具屋の下張に使用せられ、古來の名畫は三文の價もなくして石版畫の如き醜陋のもの千金の重きをなすが如きに至りぬ。かの奈良興福寺の五重塔が五十圓にて拂下げられ、それを燒きすてて古かねをとらんとして附近の住民より火災の虞ありとの抗議を受けてそのままになりきといふもこの時の事なりしなり。わが美術史上稀に見る大天才狩野芳崖をして日給若干の製圖工たらしめ、糊口に追はれ、五十幅の畫を連夜路頭にさらして、辛うじて三圓の金に換ふることを得たりと傳ふるが如き悲慘事を嘗めしめしもこの時代なりしなり。

此の如き時代なれば、天下の名園は或は鋤かれて桑田となり、或は耕されて菜圃となり、更に甚しきは練兵場となり、射的場となるが如き狀態なりしなり。かの堺の濱寺公園の松を伐らむとして纔かにその生命をとりとどめ得たりしもこの時期の事なり。われはじめて吉野山に遊びしは明治二十九年なりしが、古來名高き勝地なるに拘らず、その櫻樹の如何にも若く、多くは古くとも二十年を過ぐるものにあらぬを見て大いに不審を抱き、その理由をとひしに、これを說くものは曰はく「これ明治維新後かくの如き不經濟のものは伐りて有用の樹を植うるに如かずとて伐りたりしが故なり。古は藏王權現の神木なりとて一枝をも忽にせざりしが、文明開化の威力には抗すること能はざりしが爲なり。しかも後漸くその非をさとりて更に栽るしものこれ今の樹なり」と。ここに於いてはじめてその樹の若き所以を知るを得たり。

ああ文明と稱ふる蠻風は千古に誇るべき吉野山の櫻樹にさへかくの如き災厄を與へぬ。まして吉野山ならぬ以下の櫻樹のかかる災厄にかかりしもの幾何ぞや。その纔かにかかる災厄を免れしものは多くは山間僻地にしてこの蠻風の到りかねたる所なりしが如し。若し然らずば、その櫻樹を守るものが毅然としてその蠻風を防ぎしが爲なるべし。この事を思ふ時にその櫻樹を守りし先輩の苦心を思ひて感慨の深きものあるなり。

思ふに、わが櫻の歴史より見れば、この明治維新當初の蠻風は空前の大災厄にしてわが國に於いて未だ曾て見ざりし一大恨事なりとす。卽ちわが櫻花史はこれを特筆して將來かかる蠻風愚策を再びせざらむことを警告せざるべからず。然れどもこの蠻風は時ありては形をかへ姿を異にして頭を擡ぐる事なしとせず。かの明治の末頃に内務省が企てし神社併合の如き亦その類なり。われその櫻樹に關せる例をあぐるを得ざれど、和歌山縣在田川の右岸丹生村にありし一大樟樹の如き實にその厄に遭ひし一例とす。この樹は陸地測量部の地圖にも獨立樹として記せる大樹にして、もと一小祠ありてこれを保護せしが、神社合併の爲に、その小祠を失ひしが爲に、ただの樹木として取扱れ、村民之を伐りて賣却して七千圓を得、買ひし者更に轉賣して一萬三千圓を得きといふ。而してその切株をとりて樟腦に製せしが、それを製するに一ヶ年を要しきといふ。これわれ大正十二年四月親しくその地に趣きその切株の掘り採られし迹を見て聞きたりし所なり。爲政者の方針かくの如くにしては櫻樹また再びかの災厄にかからむ虞なしとせず。櫻花の爲に、志ある者は深く思ひ、愼んでこれを保護せざるべからず。

櫻戸玉緒

明治維新後わが櫻花は古來未曾有の大災厄に遭ひしが、しかも久しからずしてその弊にたへずして國粹保存の思想また翕然として起り、再びわが固有の文物を重んずる風に復しぬ。かくて櫻花も亦愛敬せらるるの美風に復せしが、上の如き災厄の時期中にも毅然としてその操を改めず、櫻花の保護に任ぜし人少からざりき。われはその著しき一例として先づ櫻戸玉緒をあげむとす。

櫻戸玉緒は本姓宮崎といひ、通稱は大炊といひき、近江八幡の醫柳光慶の長男として文政十一年に生る。慶應三年仁和寺宮の侍醫宮崎家を繼ぎて宮に仕ふ。その本職は醫なりしかど、國學に通じ又畫をよくし武藝に達せり。はじめ仁和寺宮に仕へたる時、和歌を以て奉仕し、傍ら櫻を植ゑて宮を慰め奉り、またこれを畫きて宮に奉れり。明治五年京都平野神社の神官となりて、その神社の境内に

櫻を多く植ゑたるが、後に平野神社が櫻の名所の一となりし源まさにここに在り。居常櫻を愛してその保護と顯彰とに熱中したる事蹟少からず。明治二十九年九月京都に歿す。時に壽六十九。玉緒の櫻に關する事蹟は平野神社に櫻樹を植ゑしことと、櫻の寫生家として世に櫻の重んずべきを知らしめしことを以て最とす。

平野神社は山城國葛野郡衣笠村字小北山に鎭座まします官幣大社なり。古來櫻樹なかりしにあらざるが玉緒のこれを植ゑてより頓にその名著しくなれるなり。その植ゑたるものは幾種なりしか、われ詳かに知らず。しかもその今に存せるものは實に

芝山櫻　大島櫻　江戸櫻　八重櫻　手弱女櫻　寐覺櫻　妹背櫻　突羽根櫻　桃色枝垂櫻　富士山櫻　白雲櫻　衣笠櫻　黃金櫻　緋櫻　鹽釜櫻　貫之櫻　冬櫻　紫櫻　嵐山櫻　九重櫻　桃櫻　旗櫻　撫子櫻　素櫻

の二十四種にして、なほその後亡びたるものとしては

壽櫻　絲櫻　水分櫻　檜扇櫻　帆立櫻　生駒櫻　牙櫻　普賢象櫻　虎の尾櫻　玉の緒櫻　曉櫻　揚貴妃櫻

等ありきといふ。その名を見るに、或は品種の名と見ゆるものあり、或は產地の名と見ゆるものあり、蓋しその當時京都附近に存せし名櫻を集めたりしものならむ。玉緒の事業は十分の繼承者なくしてかく廢絕に歸せし部分もあれどしかも、玉緒のこの擧ありてより、東は祇園、西は平野の夜櫻と稱せられて、花爛漫の候には每夜篝をたきて觀客四方より至りて雜閙すといふ。

玉緒は又櫻の研究に熱中し、京都奈良吉野の櫻花の愛すべく重んべきを世人に知らしめき。玉緒はただに櫻花を愛し、これを研究するのみならず、これが眞を寫して世に傳へらむことを謀りき。その描ける品種の數は百五十餘種に達せりといふ。玉緒は近江の織田瑟々の描法に依れるものなりといひ、その寫生せる所はかの三熊花顚の描く所に彷彿たり。玉緒また和歌に長じたれば、その畫ける櫻の畫には和歌を添へたるもの多し。而して玉緒が詠ぜる櫻品詠百首といふものありて、平野神社に傳はれり。これは百種の櫻品をあげ各種につき各一首づつを詠じたるものなりといふ。

玉緒は櫻を愛するあまり、これを廣く海外に紹介すると共に皇室に於いてこれを愛賞せられむことを希ひ、櫻三百種を揮毫して、明治天皇に獻じ奉らむことを企てしが、その事を果さずして歿せりといふ。

玉緒の門人に跡見玉枝あり。よく師の法を以て櫻を畫くに妙を得たり。かつて櫻數百種を畫きて宮内大臣土方久元に託して明治天皇に奉獻し以て師の志の一部を果したりといふ。

平野知秋の櫻賦

維新のはじめ、上野寛永寺は彰義隊の亂の爲に兵燹に罹り、昔日の榮花一朝の煙と消えはて、狐狸の棲となりたりしが、時恰も西洋の風に倣ひて公園を設くるの廟議あり。その最初の選に入りて公園となりしうちの優なるものは、もとの寛永寺の境内にして實に今の上野公園なり。時正に明治六年三月なりとす。抑も上野公園は寛永寺の昔より櫻樹に富み、名だかき花見の勝地なりしかば、これより後永く都下第一の勝地となりぬ。今當時の景觀を知らむとするに、幸にして平野知秋の櫻賦の詠あり。こはこれ洋々社談第五十五號に載する所なれば、まさに明治十二年三月の事を記せるものなるべきなり。その詠に曰はく、

櫻賦

往年寛永寺大伽藍、悉罹二兵燹一、片瓦不レ存、所謂三十六房、亦皆化爲二蔓草一、蕩爲二冷風一者蓋十八九、東臺風色一時極二荒凉一矣。而至二盛世之今日一勦二理荒蕪一斫二去榛莽一作二皇京公共之遊園一。於是櫻樹數千章、喜林丹楓、依然不レ改二舊觀一、換二當年修羅之相一爲二貴賤男女燕遊之安樂土一。今玆三月三十一日余往遊焉。時櫻花盛開所レ見無二非レ花、園丁灑掃不レ懈、花下一塵不レ飛可レ謂二林園之勝冠一二皇京一也。乃作二櫻賦一一篇。

何彼幽艶兮、維神州之芳。既顯名於異域一兮、獨專美於東方。晻曖乎吐二葩兮、晻茀乎發レ香。旖旎以紛溶兮、綽約以炫煌。單瓣而純白、如二姑射之氷肌一兮。重瓣而濃郁、似二淑姬之靚妝一兮。牡丹之富貴兮、尚將二泥首讓一レ花王一、況桃李之俗艶兮、執レ鞭而在二弟子之行一。宿雨霽而朝暾映射兮、熠々然閃二彩浮光一若二夫蛺蝶之紛々一兮、來飲二鮮美之湛露一、既歎二彩翩之卷舒一兮、或疑二文繡之展布一。爾乃當レ風

雨之凄凉兮、落英飄々以幡繽又翻以翻空兮、彷彿玉屑之霏々、其舗地如千堆之雪兮、沒晉紳之馬蹄、而拂遊人之春衣。或坐山背、自花間望街衢兮、眼界豁然以無涯。乃忘沈痾在身、心一何快爽兮、定有出炎火而登春臺之思。嗟乎雖嗣業已息兮、依然尚存廟屋、長松老杉、蓊然以深兮、金碧熒々隱見于其間、以映帶花木。既知德澤之無窮。又見朝恩之隆渥。且夫我皇統之一姓兮、歷萬祀而不變更也。維萬邦之所欣慕兮、秋津洲之所由以尊榮也。宜矣彼蒼々者兮、畜清淑之氣而產斯櫻也。此非天爵之故爲淫巧也兮、惟祥瑞是呈也。

平野知秋はわれ未だその爲人を詳かにせず。その載する所の洋々社談は明治八年の創刊にして、その社員は學者の粹を集めたりと稱せらるるものにして、また當時の新智識の代表者たりといふべきものなり。かくの如き新智識者の間にこの詠ありしことまた以て、櫻花が如何にしても本邦人を離るること能はざる所以を見るに足るべし。

觀櫻の御會

櫻の愛好は漸くにして復興して、終に雲上に及び空前の觀櫻の會を現出することとなりぬ。この御會につきては男爵細川潤次郎の明治三十六年に著しし明治年中行事にいへる所あり。その言次の如し。

觀櫻會は毎年四月に行はるれども、其の日は定まらず。定まりたる日雨天なれば、其の翌日に延び、其の日も雨天なれば、其の年は行ひ給はず。當日午後時刻天皇皇后兩陛下臨御、親王大臣外國公使を始め高等官五等以上(人數を限り)並に其の夫人を召して花下の幄舍に於いて立食を賜ふ。

此御會は明治十四年四月二十六日吹上御苑に於いて始めて行はれ、翌十五年も同所にて行はれしを同十六年よりは濱離宮にて行はる。

といへり。今その濱離宮にて行はれしときのさまを平田久著、宮中儀式略によりて見む。その略に曰はく、

濱離宮の觀櫻會は大概四月中旬の花最もよき頃を以て仰出さる。當日兩陛下には午後二時三十分御出門御一列にて離宮に行幸啓あり、御苑内中島御茶屋に臨御ありて御休憩あらせらる。御召を忝うせる人々は豫め參苑し式部官の接待を受く。此頃より式部陸軍近衞の樂隊は交る交る樂を奏し、兩陛下御苑に出御あらせられ、中島御茶屋より松御茶屋脇を經て汐見御茶屋假立食所に入らせられ、參苑の諸員に酒饌を賜ふ。賜饌の際には大勳位親任官等に親しく御談話あらせられ一同と歡を共にし給ふと承る。

誠に上下歡樂の好會といひつべし。

或はいふ。この御會は明治二十二年四月二十二日より濱離宮に於いて催されたりと。余や野人未だその始を詳にせず。姑く明治年中行事の說をとりて上に揭げたり。かくて大正五年の御會までは濱離宮に行はれしが、大正六年四月の御會よりは新宿御苑にて催さるることとなり、爾來ここにて催さるること例となれり。

按ずるに此の御會はまことに明治の御代にはじめられし新儀なり。されどこれに似たるはかの弘仁、仁明の御宇以後行はれし花の宴なり。されば、宮中にて櫻花を賞して催されし御宴の先蹤は存すといふべし。然れども此の花宴も固より君臣偕樂の御意に外ならざれどその宴に與る人々は詩歌の藝に堪能なる者に限りたる如くに見ゆれば、皇澤の及ぶ所限なきにあらず。今の觀櫻御會は材藝ある者に限らぬのみならず、外國の人までも召さるるなれば、眞に偕樂の御意にかなへりと申すべし。而してこの御會と秋の觀菊御會とは外國人の間に大なる希望を以て歡迎せられ、彼等はこの御會に召さるることを深く名譽として、大なる希望と歡喜とを以てこの榮を享けむことを冀へりといふ。

蓋しこの觀櫻御會と觀菊御會とは春秋に於ける皇室の二大園遊會とも申すべく、而してこの御會は敷島の大和心のしるしたる國の花の爲に開かせられ、秋の御會は君が齡を延ぶといひ、しかも皇室の御紋章と定められたる花の爲に開かせらるるものにしていとめでたき事とこそいふべけれ。

小金井の行幸

明治天皇の櫻に幸を下し給ひし事は觀櫻御會に止まらず。小金井の行幸の如きその一例なり。

小金井の櫻は既に說きたり。この地の櫻は幸にして絶えず保護を受け來りしかば大なる害をうけずして明治時代に至りぬ。德川幕府の時代にはその地都府より距り、交通便ならざりしが爲に俗人の到るもの少くして、風雅に遊ぶ人士の主として到る處なりしが如く見え、又武士の遠乘と稱して騎馬郊外に至るものも亦稀ならざりしが如し。然るに明治維新の後は、この地に花を賞する徒も稀になりたりしが、明治十六年四月二十三日に明治天皇この地に行幸ありてその花を賞せさせ給ひしよりしてその名頓にあがり、遊覽の客漸く多くなりぬ。爾來小金井は吉野と相頡頏する所となりぬ。今この地北岸の堤上玉座の跡に竹柵を建ててこれを護る。中に二丈餘の松あり。その傍に碑を建てて以て行幸の事を記す。碑の文には曰く、

小金井堤老櫻夾流、橋頭望之、若雲若雪。維新明治十六年四月二十三日車駕臨幸。賞花賜宴群臣。洵爲昭代嘉覩矣。里人某等表玉座栽松。海岸寺僧玄恪建碑求銘。余曾爲神奈川大書記官奉引先導、咫尺天顏、忝陪宴露天盃者。乃作銘曰

玉川金井　花麗春晴　昔芳山櫻　今三里櫻
宸賞攸及　臣民攸榮　題松勤石　行幸之名

明治三十五年四月　　從四位勳四等　磯貝靜藏謹撰竝書

と。この行幸松のあたりは即ち花の眺めの最も佳なる所にして遊客の最も集まる所なり。

明治天皇の小金井を愛せさせ賜ふことはこの事にても知らるべきが、後約二十年に及びて勅ありて群臣をしてこの地に遠乘を試みしめ賜ひしことあり。時は明治三十五年四月十五日勅を奉じてこの擧に加はるもの、久邇宮殿下、內海內務大臣、清浦司法大臣、近衞學習院長、岡澤侍從武官長その他宮內官地方長官

等五十名に及べり。十五日の午前六時三十分に宮内省を發し、午前十一時に小金井に着し、爛漫たる花を賞しつつ恩賜の御饌を喫し、更に香雲の間を分ちつつ午後四時に宮内省に歸着し其由を奏上せしかば、天顔殊に麗はしかりきといふ。

これ蓋し群臣を愛せさせ給ふのみならず。小金井の花を忘れさせ給はざるにより、かねては又武備を忽にすべからざるを示させ給ひしものならむ。花下に轡を按ずるは古來勇士の風采として世の想望する所なればなり。

柳北の栽櫻

隅田川の堤に櫻を栽ゑしことは既にこれをいへり。然してより後文化の頃には百花園主人佐原菊塢の八重櫻百五十株を植ゑたるあり。阪田三七郎が天保の頃と安政元年とに合せて四百餘株を植ゑたるあり。然るに弘化年中水災にかかりて櫻樹大に損しぬ。ここに宇田川總兵衛といふもの又百五十株を植ゑたりといふ。然れども要するに漸くに衰勢を呈したり。

明治維新のはじめには顧みる人もなかりしが明治七年に俳人其角堂晋永機首唱して、小梅村の地にこれを植ゑ、水戸藩知事徳川氏亦その邸前にこれを植ゑ、明治十四年に寺島村の人亦これを植ゑたりしかど、なほ漸くにして衰へて舊觀を保つこと能はずなりぬ。

この時に當りて、徳川氏の舊臣成島柳北、詩酒に隱れ、向島に居を占め、同好を語らひて白鷗社を結ぶ。社友大倉喜八郎墨田川の堤の櫻樹の漸く衰ふるを慨き、櫻樹を補ひ植ゑむことを柳北に謀る。柳北大にこれを讃し、南葛城郡長伊志田友方と共に三人發起して、社友及び鄉黨の諸人に檄してその事を訴ふ。その文に曰はく、

苟モ東京府下ニ住スル者ニシテ誰レカ墨水ノ櫻花ヲ觀ザル者アランヤ、又誰レカ之ヲ愛セザル者アランヤ。墨水ニ櫻有ル久シ。然レドモ其樹老テ或ハ枯ルル有レバ有志ノ徒隨テ新タニ之ヲ栽培ス。今ヲ距ル三十年前土人數百株ヲ植テ其ノ空隙ヲ補ヒシコト有リシモ爾後絶テ其擧無シ。本年伊志田友方大倉喜八郎ノ二君漁史ト共ニ新タニ一千株ノ櫻ヲ墨堤ニ栽培

セント謀ル。議決シテ之ヲ官ニ請フ。官速ニ之ヲ允可セラレシヲ以テ將ニ日ナラズシテ着手セントス。墨水ノ東西ニ居ル有志者亦之ヲ賛成補助スル者有リ。然レドモ是レ皆二君及ヒ漁史ノ識ル所ノ人ナリ。其ノ識ラザル者ニシテ或ハ之ヲ賛助セントスル有ラバ其ノ栽ル所一株タルト十株タルヲ問ハズ、此ノ雅擧ヲ共ニセラレナバ幸甚。想フニ方今ハ墨堤ノ老樹猶春風ニ爛漫タルヲ觀ルモ今ヨリ更ニ三四十年ヲ經バ、今日ノ爛漫タル者ガ大半衰朽ニ就キ、而シテ漁史等ノ栽培セシ新樹ノ滿堤ノ春色ヲ專ラニスルニ至ラン。嗚呼墨水ハ東京第一ノ勝地ナリ。此境ヲシテ長ク芳種ヲ滅却スルコト無ク遊人ヲシテ茲ニ翱翔歌舞セシムルハ豈快ナラズヤ。諸君請フ此擧ヲ賛セヨ。然リト雖モ我等三名ハ既ニ決意シテ官許ヲ請ヒシ程ナレハ縱令ヒ一人ノ之ヲ賛成スル無キモ素ヨリ逡巡趑趄スルモノニ非ズ。希クハ此文ヲ讀テ彼ノ勸化募集一樣ノ看ヲ做シ給フナヨ。

この檄一たび傳はるや、これに應ずるもの少からず。かくて栽うる所の樹一千株、その功を竣へしは實に明治十六年十月なり。後にその事を後世に傳へむが爲に明治二十年墨堤植櫻之碑を言問亭の東畔堤上に立つ。

柳北は通稱甲子太郎、名は惟弘、字は保民といふ。家は世々德川氏に仕へて儒職たり。六世の祖鳴鳳は將軍吉宗の時圖書頭として令名ありき。祖父司直は東岳先生と稱せられ、父稼堂また令名あり。柳北は文筆の家より起して世職をつぐのみならずして時の新智識たり。また武事に精通するによりて、歩兵頭、騎兵頭を歷任して騎兵奉行に進み、更に政治上の手腕を認められ、外國奉行、會計副總裁に至り、幕府要路の顯職に在りしが、德川氏大政奉還の後は永く青雲の志を絶ち、風流の雅客を以て任じ聖世の逸民として世を終へし高風の士人なり。この人にしてこの栽櫻の事あり。人と事との契合を得たりといふべし。

この時に栽ゑし樹は凡て染井吉野なりしかば、墨田川堤の櫻花は景觀は往時と面目を異にするに至りぬ。かくてこの櫻の全盛期は明治三十七八年の頃なりき。然るに明治四十年洪水に遭ひて甚しく衰へたりしかど、なほこれを補ひ植うる篤志家もありしが、明治四十三年に再び水災に遭ひて、殆ど全滅に等しき害をうけ今なほこれを恢復するを得ざるは惜みても餘りありといふべきなり。

江戸川の櫻など

江戸の新に帝都となり、東京と名づけられたる當初は舊物破壞の時弊を受けて、桑滄の變を歎ぜしむる所ありしことは既に說ける所なるが暫時にして國民反省の時代となり國粹保存の風を生じたり。かくして櫻花に對する國民の歸嚮もまた復活せり。それらの事は前にも述べたるが、ことに新帝都としての東京は又新に興れる櫻の名所を有するに至れり。

今新東京の櫻の名所の新なるものとしては一々これをあぐることを得ねど、その著しきものとして、「江戸川」「靖國神社」「千鳥ヶ淵公園」等につきて少しく述べむ。

ここに江戸川の櫻といふは東京市内神田川の上流牛込小石川兩區の間を流るる江戸川の兩岸に列ね植ゑられたる櫻をいふ。この櫻の植ゑられたる區域は江戸川橋より飯田橋までの間にして、北岸は小石川江戸川町西江戸川町の二個町、南岸は牛込五軒町新小川町の二個町なりとす。この間三百二十間に亙り兩岸に悉く櫻を植ゑたるものにして、明治三十九年に新撰東京名所圖會の編者のかぞへしものは石切橋より大曲まで二百四十一本ありきといふ。大正十二年震災の後に室田老樹齋の算せしはすべて四百五十本といへり。この江戸川の櫻はその數多からず、又その植ゑられたる區域廣からずといへども江戸川の清流をはさみて、ここに一小別天地を現出せるものなりとす。毎年彌生の春に至れば滿樹これ花、雲とたなびき雪と散りて、その流水に浮び漂よへる風情まことに都人の膓を洗ふに足れり。此の故に花時に至れば、列樹の間に行燈を懸けて燭を秉りて花を賞する雅趣を搦し、或は小艇を浮べて競漕し或は中流に棹して宴樂す。まことに風流の一境地たり。俗に名づけて新小金井といふも亦宜なり。

抑もこの地は古より水清き境靜かなる所なりしが、櫻は一もなかりしなり。相傳ふ。明治八年頃誰人とも知らず、中の橋の邊に一株の櫻を植ゑたるものありと。これ實にここに櫻あるのはじめなりとす。明治十七年の春三月、當時西江戸川町に住ひたる麹町區長大海原尙義、內藏助飯田巽、米商大塚幾藏などの人

人相謀り江戸川の風致を添へむと欲し、率先して、自宅の前の川端に吉野櫻を植ゑたり。ここに於いて同町の地主、差配人等もこの擧を賛して互に相競ひてその持地先の川縁に櫻を植うることとなりて、ここにその端緒を開き、次いで、江戸川町の地主として大和町に住へる前東京市助役佐藤正典といふ人その擧に倣ひ、同町の地主を勸めて町内の川縁に植ゑ、向側なる牛込區五軒町の住人中山信興またこれに賛し、後川田小一郎が新小川町に住するに及びてまたこれに參加し、各その持地の川縁に多くの櫻を植ゑしが、人の目を惹くに至るまでには五ヶ年の日月を要したりといふ。かくして一の新なる勝地として著しくなれるは明治四十年頃よりなりといふ。この花を植ゑたる時、發起者の一人たる米商大塚氏の妻女こう子といふ人詠じて曰く、

咲き揃ふ花は名に負ふいにしへの
　川にのこりし江戸の面かげ

と。當時この歌世に喧傳せられ、花と人と共に面目を施したりと傳ふ。なほ又この川畔に住みたる一代の歌人、御歌所寄人小出粲詠じて曰はく、

いにしへの名は其まゝの江戸川も
　花のみやことなれる春かな

東京の新景勝の地としての櫻は江戸川に止まるにあらず。靖國神社の境内また櫻の一名勝地たるが、これは明治十二年頃より植ゑ付けたるものといひ、その株數震災後に於て五百五十を算すといふ。（室田老樹齋の調査又千鳥ヶ淵公園と稱せらるるは麹町區五番町なる英國大使館の前なる地域にして、これは明治の初年に當時の英國公使サア・アーネスト・サトウが、櫻を好んで植ゑたるものにして、岡部長職が東京府知事たりしとき、東京府に寄附せしものといふ。この地大正十年に公園に指定せられたり。千鳥ヶ淵の名はもと、その前面の舊江戸城の壕の名なり。

上に述べたるはただ著きし一二の例をあげたるに止まるが、その他大小の公園に植うる所の櫻樹の數室田老樹齋が調査して雜誌「櫻」第五號に發表せしもの、東京市の公園に於ける總數九千四十株あり。その他十五區内にあるもの、その道路なると宅地内なるとをとはず、これを計算したるもの合計四萬三千六

百株。更に東京府の櫻樹の數はすべて九萬三千九百六十株なりといへり。而して大正十二年の震火災によりて東京市内に於いて失へる櫻の數、公園にては七百餘株十五區に於いて二萬八千七百株を失へり。然れど復興の今日に於いては、その數は決して前に劣らざるべきなり。

顧みるに、われら花時に帝都を行くに到る所に櫻花を見る。この故に花見の行樂を企てずとも、花に飽くことを得たるなり。今上に述べたる事實を顧みればげにもうなづかるふしあり。わが帝都の地は必ず櫻樹の盛ゆるもの亦一奇瑞といはばいふべきが、これ決して偶然の事實にはあらざるべきなり。

開成山の櫻

櫻花の復興は帝都の地に限らず、各地に行れたり。たとへば、かの武藏の熊谷堤の櫻の如きも、明治十六年にその町の有志者が竹井澗如の宅に會して櫻樹復興を議したる事に端を發し、同年三月高木彌太郎、林有章の二人を東京に派し、染井の里より櫻樹三百五十株を購求してこれを植ゑたるが、その後、厄難に遭ひても届せず、漸次にこれを擴張し、延長五十町に及び、ここに櫻花の一勝地として復活し熊谷町の誇となり、後終に政府より保護を受くるに至れり。かくの如くにして吉野山はじめ到る所に櫻の復興の運に立かへれるが、又上の江戸川の如く新に興れる櫻の勝地も少からず。ここに地方に於けるその一例として福島縣郡山の櫻を說かむ。

郡山は安積平野の東部に位し、古より奥州街道の一驛たりしかど、大なる都會とは目すべき地にあらずして明治の初年には戸數は千に充たず、人口また五千に滿たざりしものなるが、今や福島縣中第一の市街となり、その發展の急激なること東北六縣中の第一位を占む。そのはじめをきくに、この地の西は所謂大槻原と唱へられし原野にして、水利の無かりしが爲に、古來すておかれしをば、明治六年に福島縣令安場保和が、二本松舊藩士の救濟の爲にその開墾を企て、二萬三千圓の資金を投じて開成社と名づくる開墾組合を組織したるに基づくといふ。かくて着々その事にいそしみしが、明治十二年には政府自ら六百萬圓を投じて

開拓に從事し、同十五年には西方遠く脊梁山脈を貫きて猪苗代湖の水を通じて安積疏水路を開きたり。これによりて、往時雜草の跋扈に委して荒蕪の地たりし原野、一朝にして米產の豐庫となるに至り、之に加ふるに東北鐵道の敷設と共にして嶄然として頭角をあらはし、更に磐越線交叉の要衝となり、電氣事業の行はるるに及びては安積疏水路を利用して水力電氣を興し、ここに蔚然たる產業都市を現出し東北の大阪と稱せらるるに至れり。而してこの新興都市は又同時に新興の櫻の勝區を有するに至れり。これ今說かんとする開成公園なり。

はじめ開成組合の成り着々その功を奏するに及びては其の事を記念する爲に、今の市の西郊なる一地を劃してこれを公園とし、明治九年にこの地に伊勢大神宮の御分靈を奉祀し、それと同時に多くの櫻樹を植ゑたり。かくてその花年年に榮え終に櫻花の一大名勝となり、毎年四月二十日前後には遠近より花見の人人雜沓して至る。この公園內に上池、開成池といふ二の池あり。櫻はその池の堤に植ゑたるものなるが、上池の西方に三層樓あり。明治七年に竣工せしものにして開成館と名づく。明治九年及び十四年に明治天皇の行在となりし所にして今なほその御座所を保存す。この池堤上より安積平野を越えて西北に安達太郎山磐梯山等の名山を望み、東方は阿武隈川に臨み、景勝の地たるを失はず。

思ふに、上述の事項はいづれもわが國民の意氣の勃興する所には櫻の伴ふものなるを物語るものといふべきに似たり。かくて余はなほ他の著しき事項にうつらむと欲す。

江北の櫻

江北とは武藏國南足立郡の一村の名なり。この地の櫻も亦明治年間に新に興れるものなりとす。

顧みるに、江戸の盛時、大名旗本の邸宅園莊に栽植せる櫻の品種の少からざりしことは既に說ける所なるが、それらの邸宅園莊は明治維新の變革と共に多くは退轉し、それにつれて、多くの櫻花園も廢滅に歸し、櫻の品種のその間に消え失

せたるもの少からざるなり。然れども、かくの如き時に於いても幸に櫻の愛護者の全く無きにあらずして、これを保存せむと苦心せしこと櫻戸玉緒の如きものありしが、東京に於いても亦かくの如き熱心家の存せざりしにあらず。その中の一人としてここに傳ふべきは東京駒込傳中の高木孫右衞門といふ人なり。この高木氏は世々植木屋を業とせしが父の代より櫻の種類の蒐集に心を用ゐ、ことに、名櫻の廢絶せむことを惜みて、これを保存せむと企て、明治二十年の頃には古來の名花多くその庭園に保存せられたりといふ。

明治十八年、江北村の村長清水謙吾、荒川の堤を修理し、それと同時に堤上に櫻を植ゑむと企てしが、幸に同志を得て、千住町より埼玉縣の堺に至るまで、約二里の間に櫻を植うる事となれり。これ實に明治十九年三月の事なり。而して同じ堤のつづきなる千住町其の他に屬せる地には、主として染井吉野を植ゑたるにあきたらずして、古來の名品を集め植ゑたりといふ。爾來年を閲すること二十餘年にして幹枝大に繁茂し明治三十五六年頃よりして櫻の名所として新に世に認められ、四月の末頃、上野飛鳥山などの花の散り方になれる頃に至れば、この地の花の盛りとなり、しかもその種類の多きが爲に、既に散らむとするあれば、新に咲くありて花候頗る長く、都人の一大行樂の地となり、花盛の頃には雜沓の街となれり。明治四十三年に編せる東京近郊名所圖會には「荒川堤の櫻」と題して、詳かに說く所あり。又彩色の大なる口繪を以てこれを描けり。

この櫻の栽植の顚末は首唱者清水謙吾の栽櫻記に明かなれば、次にこれをあぐ。

武州荒川堤、起二熊谷一至二千住一延亘十數里、俚俗所謂熊谷堤者是也。其係二江北西新井二村一者堤路凹凸行歩甚艱。予嘗欲レ修レ之獻二言當路一不レ報。明治十八年九月東京府知事渡邊洪基君巡二視管內一之次、憩二於予家一焉。乃懇請以レ所二企圖一君允二其請一。越明年起レ工。工竣。乃謂種二櫻樹於堤上一、春則賞レ花、夏則避レ暑、未二必無一レ裨二益于世一也。乃謀之郡長尾崎瑞象氏一氏稱贊不レ措。因與二同志者一胥議、醵金充二其費一、遂植二數十種櫻三千餘株一、實十九年三月也。爾來經二五葛婁一樹稍長。夫櫻花之勝西有二芳野嵐山一、東有二東臺墨陀一。然而彼則昔時帝都之所在、此則今日帝都之所在、安可レ使二此有一レ遜レ色於彼哉。衆之有二此擧一亦不二徒爾一也。嗚呼修堤之業成

於渡邊君之採納、栽櫻之功、由於尾崎氏之贊襄、而有志者之力亦與不少焉。今也稱曰東都之勝過於彼、蓋非溢美也。況數十年後方春風駘蕩之日、芳雲爛漫所謂白銀世界者必可期乎。乃記之。

この文は昭代樂事といふ冊子に載せてありしものなるが、大正十四年六月に石に勒してこれを堤上に建て、永くその功を記することとなれり。

はじめ、この地に植ゑしものは種類實に七十八種に及べり。その中數多きは、

關山　一葉　淺黃櫻　御衣黃　普賢象　楊貴妃　芳野　江戸櫻　箒櫻

にして香櫻としては、

千里香　細川香　上匂　御車還　御座之間香　瀧香　駿河臺香

等にして數多からぬは、

猩々　紅鴨　朱雀　紫櫻　人丸　糸括り　松月

などにして、その他

長州緋櫻　有明　金輪寺　白妙　大膳　天川　金剛山　鷲尾　泰山府君　嵐山　水上　麒麟　彼岸枝垂　白普賢　奈良　苔清水　牡丹　熊谷　福祿壽　增山　鞍馬山　渦櫻　大南殿　蓬萊山　秋色　祇女　寒櫻　旗櫻　大芳野　八重曙　都櫻　雨宿　法輪寺　桐谷　薩摩寒櫻　菊枝垂　大芝山　名月　手毬　日暮　辨殿　水無月　王昭君　小汐山　九重　彼岸　不斷櫻　鹽竈　大提灯　東錦　敦盛　丁子櫻　白華山　羽二重　東枝垂　吉野枝垂　彼岸枝垂

なり。然れども、俗その詳かなるを知らねば荒川の五色櫻といひて珍重せり。

首唱者清水謙吾は號を淡如といひ、學識に富みて尋常の里正にあらざるなり。その櫻を植ゑむと企て、又その品種を盡して植ゑむとせしは決して偶然の事にあらざりしが如し。清水氏は夙にかの植木屋高木氏を知り、先に自邸に梅樹數百株を購ひ植ゑしこともありし由に傳ふれば、恐らくはその品種を永く世に傳へむと欲する念と、おのが居村の地をして一の特色を具へしめむとの情とよりしてこの企てをなししものなるべし。

以上の如くにして新なる櫻の名所は出現したり。而して、その品種は後に漸く增して八十六種に達したりといふ。然るに、大正の御代に入りて荒川改修の

大工事を起すに及びて、この堤も亦この一部を壞たることとなり、大正七年後には約三十種四百八十五株はそれが犧牲となり、殘る所五十二種五百五十五株に止まるの已むなきに至りぬ。これより先明治四十年七月に清水謙吾歿して在らず。然れど志ある者はこれを惜みて、その保存と衞護とに努力するに及びて、新に築かるる堤上にも亦これを植うることとなりぬ。然れども、これが種類の滅絶を防がむには、その移植に先だちてこれを維持保護する方途を講ぜざるべからざるなり。

清水氏歿して、後その志を繼ぎ、よくこの櫻の保護と維持とに任ぜしものは同じ村の人、船津靜作とす。この人は清水謙吾に師事せしものなるが、よく師の志を體して櫻の保護に任じたりしが後には進んで、櫻につきて江北櫻譜を著し、又栽植の道に心を傾け、荒川舊堤の破壞と共にあたら名櫻の品種の滅絶せむことをおそれて、終に大正元年に至りて自ら苗圃を設けてその種の保存の途を講じ、同時にこれを弘く世に分つことを企て着々その功を奏するに至り、爾來內國に於いてはもとより、外國に輸出する名櫻も主として船津氏の苦心になれるものなりといふ。この人昭和四年一月に七十二歳にて歿せり。今東京大學植物園に存する多くの品種も、德川賴倫侯の大磯の高麗園の櫻樹も、英米さては瑞西に送りし櫻も亦この荒川の種なり。その始は清水謙吾の遠き慮に基づきたるものなるが、よくその功をなさしめしは船津靜作といふべし。二人者の功は櫻と共に永く朽つべからざるなり。

外つ國の櫻

わが國民の興る所櫻を伴はざるはなきの概あること既に述べたる所なり。今やわが國の威名は海外の諸州にわたると共に櫻花も亦それら外國人に愛せられ、又それらの國々に蕃殖するに至れり。

工學博士大竹多氣、その若かりし時歐洲に留學せしが、歸來、新編櫻花集を編して櫻の爲に氣を吐けり。その中にいへることあり。彼かつて墺地利にて里芋を見、英國にてあけびを見、山椒魚を見て故國を思ひしが、菊花についてはその上

流社會に愛玩せらるるによりて屢々見たりしが、櫻についてはただ一回見たるのみなりしことを告ぐ。而して曰はく、

只櫻花に至ては去明治二十年の春、余が英國リーヅ市約州大學校に在學中の折、校友リチャード、レイノルヅ氏の庭園に開けるを見たる外曾て見たることなし。其時氏は曰く。此樹の種は日本より得たるなり。余聞て意氣傲然たりし。

と。そのいふ所の如く、これ以外にわが櫻は全く海外にあらざりしか否か、余が寡聞なる、これを確むべくもあらねど、蓋し極めて稀なりしならむ。しかも、わが國民の意氣はこの櫻花によつて象徴せらるることは決して外國人に永く認められざることなかるべく、日本國に注意を向くると共に櫻花も亦それらの國人の注意をひくに至りしことはいふまでもなし。かかる間に櫻花が海外に於いて著しき進展をなしたりしこと二三をあげむ。

これらのうち最も著しきは東京市より北米合衆國に寄贈せるものなり。この事は櫻の會幹事井下清氏の報ぜらるる所あり。今それに基づき要を摘んで述べむ。

この事の起原は明治四十二年ワシントン市に於いて、日本に關係深きシドモア女史主唱により日本に好意を有する人々が醵金して日本の櫻をば、當時大統領タフト氏夫人の熱心に盡力せられてあるポトマック河畔の新設公園に植ゑて、日本人の精神を紹介しかねて兩國民の交情をあつくせむと企てたりしに基づく。時に水野總領事この事を耳にし、そは寧ろわが國より寄贈せば、一層國交をあつくすべしと思ひ、高平全權大使に謀り、その贊同を得て、外務省を經て、東京市にその意を通じたれば、市長尾崎行雄はその事に贊し、東京市の名を以て、樹の苗木十種二千株を送りしが、當時わが國にては樹苗の病蟲害につきての調査研究不十分なりし爲、米國の農務省昆蟲局の精細なる檢査を受けたるに病氣又害蟲寄生等の事ありし爲、法規によりて全部燒き棄てらるることとなりぬ。この事は日米兩國ともに遺憾の事とせしが、止むを得ざる事なりき。

東京市はこれを遺憾とし直ちに農商務省農事試驗場に依囑し、桑名、恩田兩技師の周到なる注意の下に櫻の苗を育て、明治四十四年二月に染井吉野の苗一千

株と、八重櫻としては、

白雪　有明　御車返　福祿壽　一葉　關山　普賢象

香櫻としては、

上香　瀧香　御衣黄

の十種二千株、總計三千株を得、これを翌年二月米國に送りしが、この度は嚴重なる害蟲檢査にも合格してめでたくポトマック公園に植ゑ付くることとなりぬといふ。かくて、大正四年に至り米國より東京市に米國特有の花木「ハナミヅキ」の白花のものを贈り、翌年紅花ハナミヅキを贈り、大正七年にカルミヤを寄贈せり。これ實に日米兩國の國花の交驩ともいふべきなり。

さても東京市の贈れる櫻の苗は米國政府の深き注意を以て保護せられ、染井吉野の一千株は公園内にある大なる池の周圍約一マイル半の處に水に臨んで、三々五々寄せては離れて植ゑられ、今や高さ四間幹の太さ二尺許に生長し、リンコルンとワシントンとの記念碑を背景として、春時紅霞をたなびかし清流に影を投ずといふ。さて又八重櫻と香櫻との二千株は池より南方の川に突出せる半島の周圍約四マイルの自動車道に沿うて並木のさまに植ゑられ、これ亦雄大の景をなすといふ。これによりて花時にはシカゴ、紐育の邊より滿開の時を期し遊覽に來るもの多く、その季節には各地より臨時列車を發し、市内の電車には「日本櫻滿開ポトマック行」と大書して觀客を運べりといふ。されば、かの市の人々は「ワシントンへ來るなら櫻の時に」と口にする事となれりといふ。盛なりといふべし。

米國に於てはこの外になほ著しき櫻あり。そは紐育にあるものにして、大部分は同市のハドソン川の上流なるリバサイトパアクに植ゑてありといふ。ここにはわが日本國には好意を寄せ、密接の關係ある大統領グラント將軍の墓を中心として日本の櫻を植ゑてあるなり。これは紐育在留の日本人會よりして紐育市に贈りしものにしてその記念として一の扁額をも寄贈し、それも將軍の墓の一隅に存す。他の一部は紐育の中央公園に植ゑあるが、これらもワシントンのに劣らず成育し、花時には士人のこれを愛賞するもの絶えずといふ。グラント將軍と櫻と何ぞその縁の深き、將軍夫妻の植ゑし記念樹たる檜と玉蘭とは

わが上野公園にありて櫻雲の間に絲を恣にし、將軍は又故國に於いて櫻花爛漫の間に永へに眠れり。ここに吾人はその奇緣に感ぜずばあらず。

聞く所によれば、米國の他の都市に於いてもワシントンの櫻花をきゝて同じくこれを得むことを思ふもの少からずといふ。吾人は日ならずして櫻花のかの土に治からむことを希うてやまざるなり。

英國に於いては我その委しきことを知らず。しかも、かの大竹氏が、明治二十年頃にこれを見きといふ。その後また多少の移植なしとせざるべし。ここに英國ケント州の紳士コリンウド、イングラム氏は大正十五年に來朝せしが、氏は二十年以前よりわが國の櫻を集め、その邸内には百種以上の品種を植ゑ、なほ盛んに培養せりといふ。而してそのうちには本邦にて滅絶せる品種も存するが如し。氏はわが櫻の會に臨みわが國人の櫻の保護の不十分なる事を指摘して警告を發せられたり。他山の石以てわが玉を攻くべしといふ諺あれど、これは異邦に於ける心ある友の忠言としてわれらの服膺すべき所ならずや。かくて又イングラム氏は更に櫻の會に委託して櫻の品種七、三十株の接穗をその郷に移せり。その目次の如し。

手毬　駒繋　一葉　福祿壽　白雪　便殿　松月

英國に於ける櫻は、恐らくはこれよりして更に一層の進展を見るべし。イングラム氏の如きは、眞に櫻の知己といふべきなり。なほこの外に、大正十四年の頃に瑞西國に櫻を送れることあり。今その盛衰を知るを得ざるを遺憾とす。

新なる櫻人

櫻は古來の國花なりといへども、生々發展止まらざるわが國民の精神を代表せるものなれば、これを愛するものは決して固陋の徒にあらざるべき筈なり。明治維新の後國民反省の時代に入りては少しく心ある人はみな櫻花に心を寄せざるものなき程なりとす。しかも新時代をこの櫻の上に導き出す程の大功をなすことは容易の事にはあらざるなり。

かの清水謙吾、船津靜作兩氏の如きは確に新なる人といひつべし。又先にい

へる工學博士大竹多氣氏の如きも、その極むる所深からずといへども、染織界の學者たる身を以て率先して櫻の專書を著したるが如きは又櫻の愛人たるを失はず。又かの常陸の櫻川をば、わが櫻花界に復活せしめし翠葉石倉重繼氏の如きも櫻史に名を止むべき人なり。かくてその著に「櫻川事蹟考」、「櫻川志」あり。その他岐阜の昆蟲王名和靖の如きも亦櫻花の愛護者としてかぞふべきなり。しかもここに特筆すべきは戸川殘花、三好學博士となりとす。

戸川氏は世々德川氏の旗本として三千石を食む。父は戸川内藏助安行といひ、母は新宮城主水野忠順の女なり。幼名は隼人、長じて達若といひ、安宅と名のり、自ら殘花と號す。蓋し、その長ずる頃、武士なる階級廢せられたれば、それを記念する爲の號なりしならむ。即ち自ら武士の名殘を以て任じたりしならむが、それと同時に名の示す如く、櫻花に深き興趣をいだき、櫻の面目を起さむが爲に努力せしこと一々あげてかぞふべからざるなり。今その詳細は略すといへども櫻花とこの櫻の會とは永くこの人の名を忘るべからざるなり。

三好學博士は我が嗤々するを要せず。されど、ここに櫻史の現代の卷に於いては第一人者としてその名は決して忘るべからず。わが櫻花を學術上より研究せし學者は白井光太郎、伊藤篤太郎二博士の如きもとより逸すべきにあらねど、專らわが櫻花の爲に徹底的に研究を施し、櫻花の價値をして通俗の世界以外學術の世界にも燦然たる光を發せしものは實にわが三好博士なり。かくてその著は櫻花の歷史上後世を照すべきなり。

櫻の會

凡そ世の樂といふ樂は己れ一人して樂むよりは衆と共に樂むを樂み多しとす。その共に樂むもの多ければ、多きほどその樂みや大なりといふべし。されば、古來櫻を愛するもの專ら衆と共に樂む事をなせり。しかもこれを樂むに亦種々の道あり。ただ盲目的に樂むと、その美を味ひ、其の趣を解し、その性を知り、これを遇するに通ずるものとして樂むとを比較すれば、その差頗る大なり。

よくその美を味ひ、その趣を解し、その性を知り、これを遇する道に通ずるもの

にして眞にこれを樂むものといふべきなり。櫻に對しての樂みも亦然り。かの花見と稱して花下に狂舞するの徒はその盲目的愛好の最も甚しきものなり。苟も事理を解する者ならばかかる盲目的の愛好に留まらず、正しき眞實の方法によつて愛好すべきものなり。かかる眞實の愛好者も亦己れ一人に止まらず、衆と共に同じく愛好せば、その樂みや一層深く大なるものあらむ。茲に余はこの意に於いて櫻に對して知識と理解との最高權威者の組織せられたる櫻の會の生れたることを祝せずばあらず。しかも今これを說くに先だち少しく櫻の爲に催されし會合の一二をあぐべし。

明治のはじめ櫻戸玉緒が櫻の會を催したりしことは既にいへり。ここに明治の末つ方より櫻を愛すものの會合往々催されて、ここに世の視聽を集むる事となりぬ。その著しきは南葵文庫に於ける櫻の會なり。明治四十五年四月五日侯爵徳川賴倫氏はその經營せる南葵文庫に於いて櫻の爲に展覽及び講演の會を催せり。卽ち荒川の里櫻の優品を集めて、これを陳ね、又櫻に關する圖書器物等を陳列して、衆の觀覽に供し、更に文學博士芳賀矢一、理學博士三好學に囑して文藝上科學上より見たる櫻につきての講演會を催したり。この會合には三好、戸川兩氏の盡力少からざりきといふ。侯もまたもとより櫻花の保護に力を致しし人にして或は常陸に櫻川天川の櫻を搜り、或は大和に芳野奈良の櫻を賞しなどしたる人なりき。かくて又大正九年四月二十八日には再び南葵文庫に櫻に關する展覽と記念との會を開きたり。

かくの如くにして櫻に關する士人の關心は俗に所謂花見以外に別種の高雅なる催を誘起する所あり。大正三年の春には大阪市の呉服店高島屋の美術部に於いて、當時著名の畫家の櫻に關する畫幅を集めて衆人の展覽に供し、後その圖を撮影轉印して一冊の圖錄として櫻百趣と名づけて世に出せり。その圖すべて八十二、描ける人六十七名、とりどりに櫻花の美趣を描けるが中にも、わが心をここに强く牽けるものは、

今尾景年の　飛花朧月(雙幅)
橋本關雪の　義家公過勿來圖
渡邊省亭の　朝櫻

川村曼舟の　花の雨
谷口香嶠の　實方花下避雨
山田耕雲の　山櫻
木島櫻谷の　觀櫻
小室翠雲の　櫻筏
菊地芳文の　花櫻小禽
鈴木華邨の　春雨

等にして就中木島櫻谷、鈴木華邨の二圖は最も趣を得たりと思はる。而してこの二人共に櫻と華とを以て號とせるは奇なるが如くにしてしかも偶然にはあらざるべきなり。古來櫻を圖するもの少からねど、多くは寫生に止まる。今の如く一堂に多くの畫を會して櫻の美趣をとり〳〵にあらはさむとせるが如きは多く聞かざる所にして、これ亦昭代の一美事といふべきなり。

櫻に關する人々の會合は隨時催されたりしかど、永續性を有する團結は未だこれを見ざりき。ここに大正六年に至りて櫻花を愛護する特志者相集りて一の會を組織することとなりぬ。これ卽ち今もある櫻の會なり。そのはじめを按ずるに、

巖谷季雄　林愛作　戸川殘花　遲塚麗水　奥田竹松　田邊浩　山本直良
朝吹常吉　宮川鐵次郎　東園基光　杉原榮三郎　中鉢美明

の諸氏の主唱により園花として櫻の趣味と愛護の觀念とを一般世人に普及せしめむが爲に催されしものにして、同年四月二十三日、東京帝國ホテルに於いて第一會を催したるにはじまる。この日、觀賞に供したる櫻の品種四十三種各三四尺の生花を瓶に插し、なほ又櫻に關する標本圖書をも陳列して來會者の展覽に供し、更に又講演會を開きたりといふ。かくてこの會後直ちに櫻の會の創立となりしなり。この會の創立に關しては雜誌「櫻」第一號に男爵坂谷芳郎氏の述べたる所あれば、次にその要をあぐ。

友人三好博士は植物學の專門家にして特に櫻樹を最も熱心に研究し、又戸川殘花君は最も史蹟天然記念物の保存に熱中す。往年余の東京市長たりし時、二君及其他の熱心家諸氏と謀り、小金井に於ける櫻の保存を計畫す。

偶々荒川改修の結果として荒川堤にある櫻の一半は伐截の厄に遭はんとす。三好博士其種類の絶えなんことを嘆き、最も優等の種類を小金井に移すことを東京市に建議せられ、余は喜んで博士の議を採用したり。帝國ホテルの主幹林愛作は余の友人にして亦熱心なる愛櫻家なり。林君常に宿泊外人の我邦櫻花嘆賞の聲を耳にす。三好、戸川二君及余等の保櫻の熱心なるを聽き大に賛成の意を表せられ、大正六年の春、同君の好意によりて盛大なる櫻花の陳列及講演を帝國ホテルの大廣間に於て開催し茲に櫻の會の成立を告げたり。

ここにある如く大正六年四月二十三日の會は最初は永續的の會としての催にあらずして林愛作氏の發意と前記諸氏の賛同とによりて催されたる一時的の會なりしが、その際にこの永續的の團體を組織する議成りしものと見ゆ。櫻第一號の會報に曰はく、

四月二十三日第一回櫻の會終つて後、直に帝國ホテル内に櫻の會の創立會を開く。出席者

村井吉兵衛氏　奥田竹松氏　山本直良氏　三好學氏　巖谷季雄氏　杉原榮三郎氏　大橋重省氏　船津靜作氏　林愛作氏　井下清氏

とあり。この際にこの會の大綱を建て、同年九月二十五日に役員會を開きて一切の組織を決定し、

會　頭　子爵　澁澤榮一
名譽顧問　侯爵　徳川頼倫
顧　問　男爵　阪谷芳郎
同　理學博士　三好學
會計監督　山本直良
幹　事　林愛作　戸川安宅　大橋重省　井下清　遅塚麗水

かくして會は成立せり。かくてこの櫻の會は毎年四月に行はれ、東京にての年中行事の一となりて今日に至り、大正七年よりは機關雜誌「櫻」を發行し、これまた毎年一冊づつを出して今年まさに二十二號を出さむとす。會の幹部にはその後多少の出入ありといへども、本幹は儼として動かず。將來もまさに然る

べし。

櫻の會の歴史は別に會其のものに於いて記錄あるべければ、余はここに贅言せず。ただ思ふ、この會はこれわが櫻の爲の中樞的の會合として櫻の爲に繼續せらるべきなり。而して將來の櫻の歴史はこの櫻の會の記錄を以てすべきものなりと思ふ。ここに余はこの會の成立を語るを以てわが筆を擱かむと思ふ。

擱筆の辭

顧みれば、余が櫻の會の雜誌「櫻」の爲に櫻の歴史を草しはじめしは大正八年にして、十有三年の昔にあり。而して號を重ぬること十一回にしてここにはじめて終る。その間多くは多忙の間に筆を起したるが爲に、遺漏せるもの多く、前後せる點少からず、加ふるに才識足らず、見聞廣からず、文章また拙劣にして櫻花の美をけがせること多大なり。罪謝するに辭なし。しかも、余が才の識の乏少にしてかく終りをつぐるまでに到りしものは一は「櫻」誌の賜にして一は櫻の會の幹部諸君の賜なり。「櫻」誌なくば余が見聞の狹き、いかで、この稿を續け得べからむ。櫻の會幹部諸君の督勵無くば、余が懶惰なるいかでかく長年月の間稿を續け得べけむや。ここに深き感謝を捧ぐるものなり。

更に終に臨みて一言す。本稿中載すべくして脫せる點少からず、詳にすべくして略せるもの少からず。それらは他日、時を得ば更に補ふべきなり。ここに最後に讀者諸君のこの稿を寬恕して閱せられしことを謝す。

（昭和六年四月二日夜草、昭和十五年三月補）

附錄